女鑑

明治二十四年八月二十一日第三種郵便物認可

第拾參年第拾號
（明治三十六年五月十五日發行）

口繪

戰夫の妻（英國トーマス、フ[illegible]筆）
興風女學校交友會員
吉野山の名跡三種
芍藥園と菖蒲園
京都第二高等小學校女子部

重要目次

女鑑 第拾柒年第拾號 目次

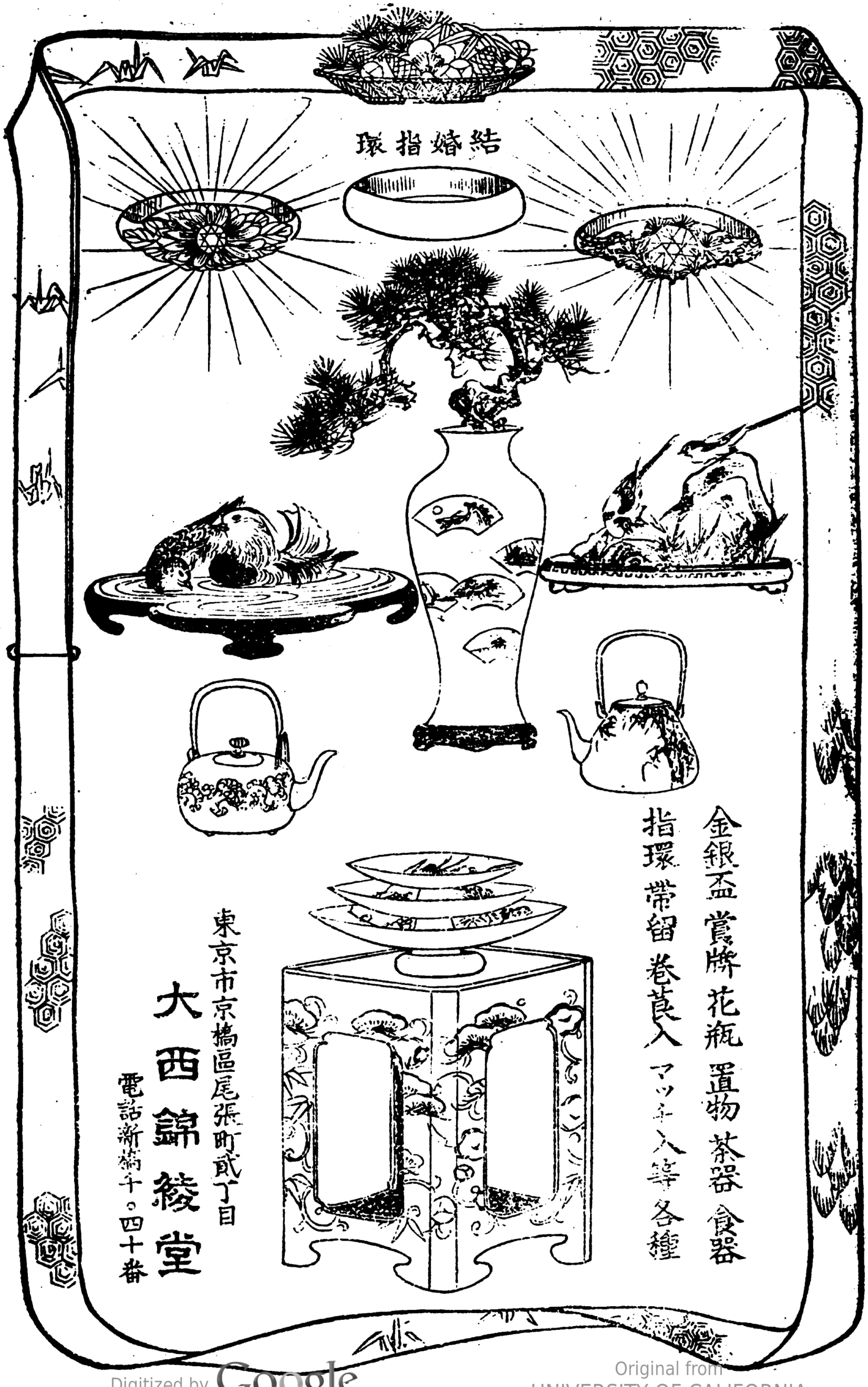
定價
一册 金拾錢
六册三ヶ月分 前金五拾七錢
十二册半年分 前金壹圓拾錢
廿四册一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金三拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
(色刷は特に御相談に應ず)

明治三十六年五月十四日印刷
明治三十六年五月十五日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人 渡邊素一
東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人 並木良雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 株式會社 國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

新小説　臨時増刊

夏木立

第八年第六卷 ● 五月十日發行

● 小説 ●

伊勢の卷……泉鏡花
瀬戸かよひ……小栗風葉
瘦馬……中村春雨
在郷唄……柳川春葉
姉弟……前田曙山
雁坂越……幸田露伴
會津節……後藤宙外
栴檀橋……廣津柳浪

● 韻文 ●

金剛山の歌……薄田泣菫

● 口話 ●

山椒魚の話……石川理學博士
人類學研究……坪井理學博士
霧島の植物……松村理學博士
採集談……城法學士
工藝の話……海野美盛

◀ 旅中詠草 ▶

漢詩　岩溪裳川　依田百川　野口寧齋　森槐南

和歌　中村秋香　小杉榲邨　小出梔園　佐々木信綱

俳句　伊藤松宇　瀧川愚佛　角田竹冷　内藤鳴雪　森無黄

夏木立（表紙）……梶田半古

挿畫は烏合會の秀才鏑木清方、鰭崎英朋、山中古洞の三氏が各自獨特の妙筆に成てこれに石版極彩色を施し各小説毎に挿入す!!!

◎實價　金貳拾五錢
◎郵税　金貳錢五厘

發行所　東京日本橋區通四丁目　電話本局五十一番　春陽堂

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

●再版發賣廣告

●樞密院副議長　東久世通禧伯題字
●華族女學校學監　下田歌子女史序文

東京帝國大學醫科大學卒業　秋山七朗先生著

再版 女子教育 家庭教養法

全一册　◉製本菊版大本　◉四號活字鮮明刷　◉正價金五拾錢

女子教育は今日の一大問題にして、家庭に學校に其書甚だ少しとせず、然かも專攻學家の手に成り生理に照し衛生に基き學理の上より家庭に於ける教養の方法を詳說したるものや即ち少し、殊に筆を姙娠の前に起し分娩保育より教育、性行に迯り家庭を通じて必要なる教養の方法を詳說したるものに至て本書に於て始めて之を見る、是れ本書に題して女子教育家庭教養法と謂ふ所以にして、試に其目次の一班を擧げんか第一章に姙娠を說き姙娠の徴候、精神の衛養、身體の攝養、乳房の準備を詳說し、第二章に分娩に入り產前產後に付て產室、出產用具、出產、產蓐中の用意を說き、第三章の生兒の保育には母乳、乳母、獸乳より入浴及胎髮、臍帶及衣服、啼音睡眠及外出、乳齒、離乳、種痘、保姆、疾病、健康、醫師藥用、服製、玩具及遊戯、第四章の教育には體育智育德育に付き身體の發達保護、衣服飲食、智力の發達、視官、聽官、觸官、嗅官、味官、筋肉官、記臆想像、概念、斷定、推理、性情、體慾、色慾、慾望、情愛、情操、推考意思、摸範、教訓、習慣を分說し第五章には放縱、傲慢、沈鬱、過敏、怯懦、刻薄、輕躁、懶惰、嫌忌、好奇等の各性行に付矯弊の方法を詳說し、凡そ女子教育に於て最も必要至重女子の知らざる可からざる家庭の教養法は擧て漏すなく生理的に心理的に衛生的に學理の定則より詳說細述したるものなり、是豈に生花の書を讀み點茶の書を讀むと其必要同日の論ならむや、苟も母たり女子たる者の座右に必ず缺く可からざる大好書也、賢母たらんとするの淑女請ふ必ず一本を購讀する所あれ

東京市麴町區飯田町四丁目三十番地
發行所　自治館　（電話番町四八二番）

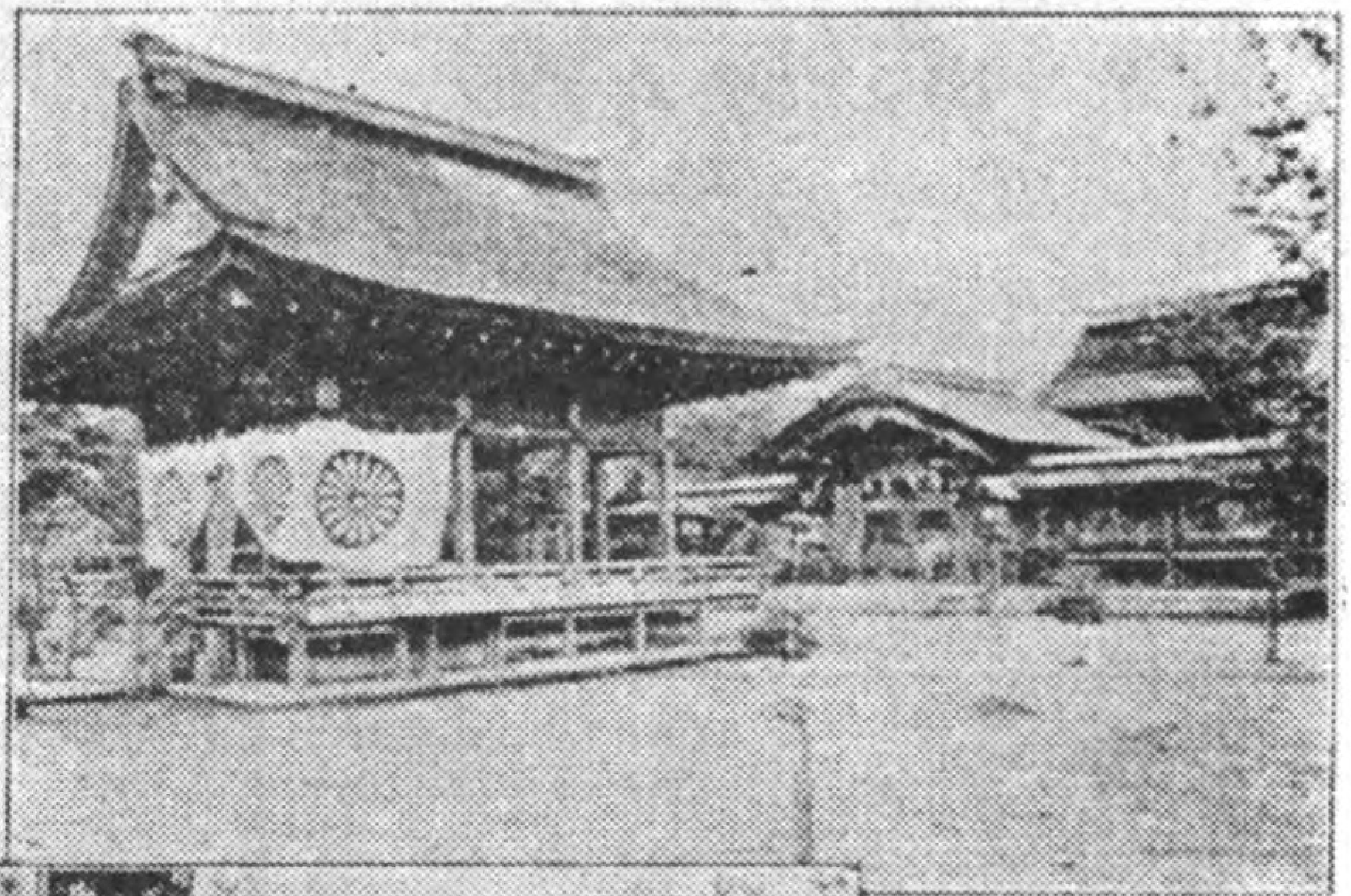


戰夫の妻（英國トウマス、フアド筆）



興風女學校交友會々員

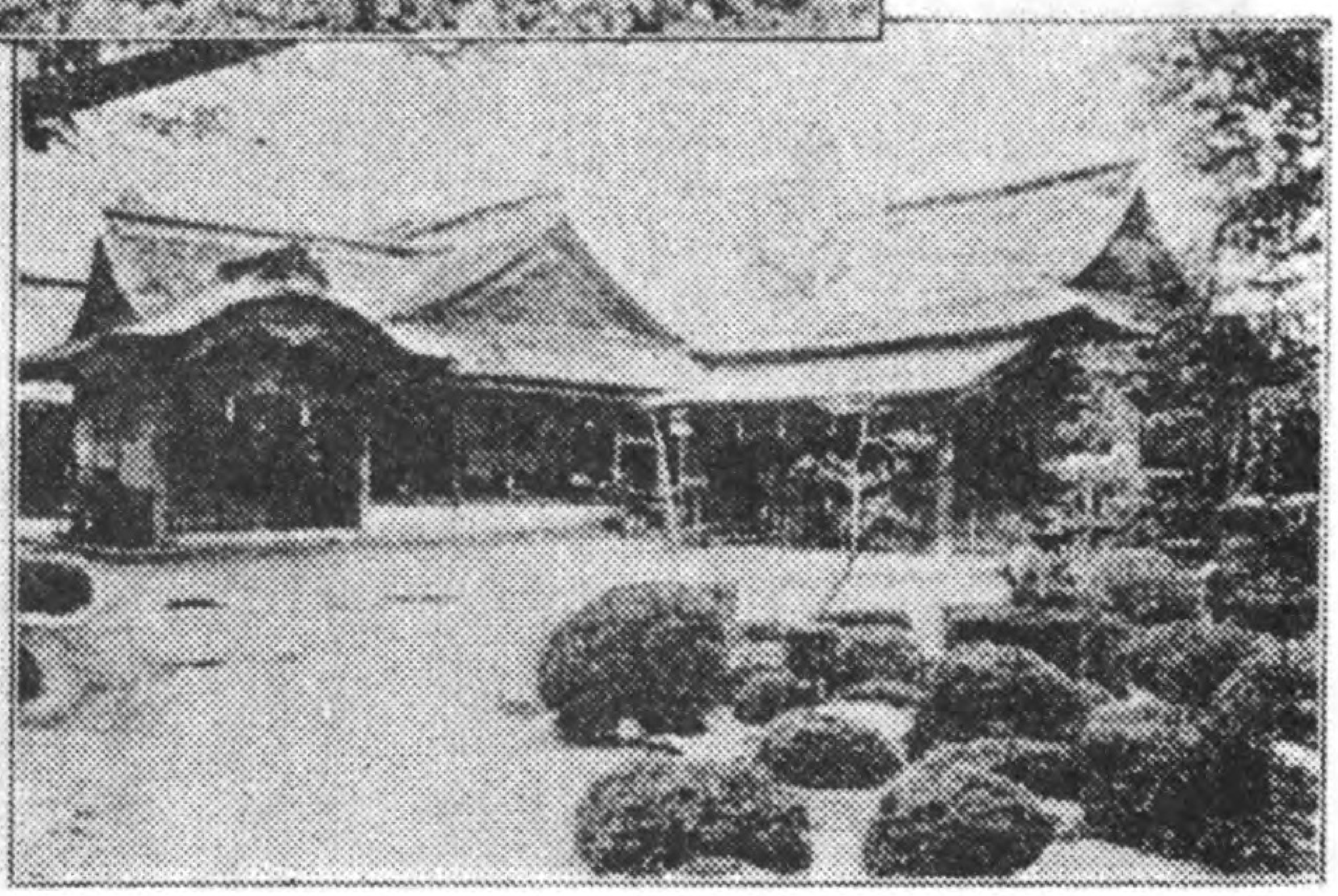
吉野山名跡



吉野神社

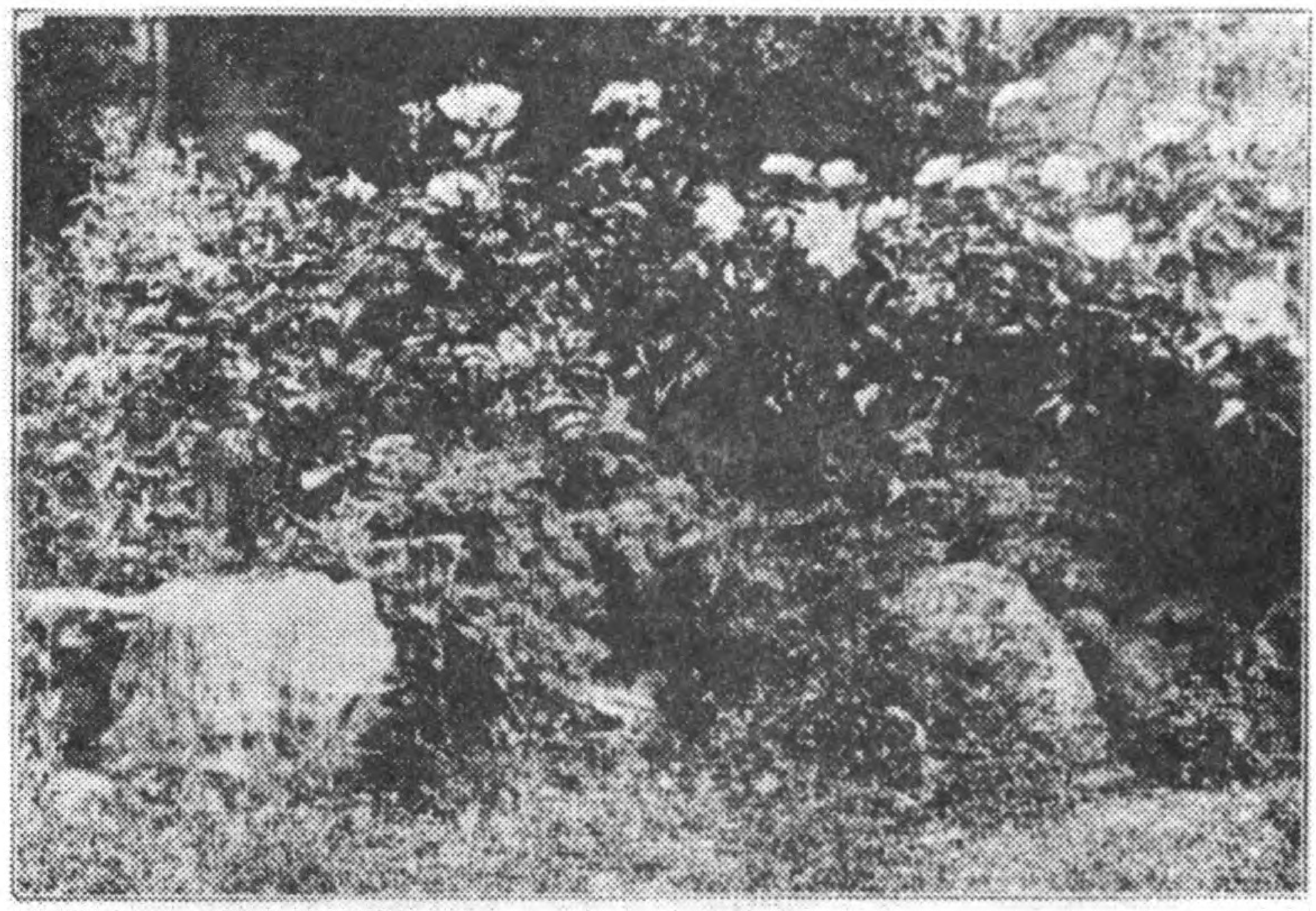


村上義光墓

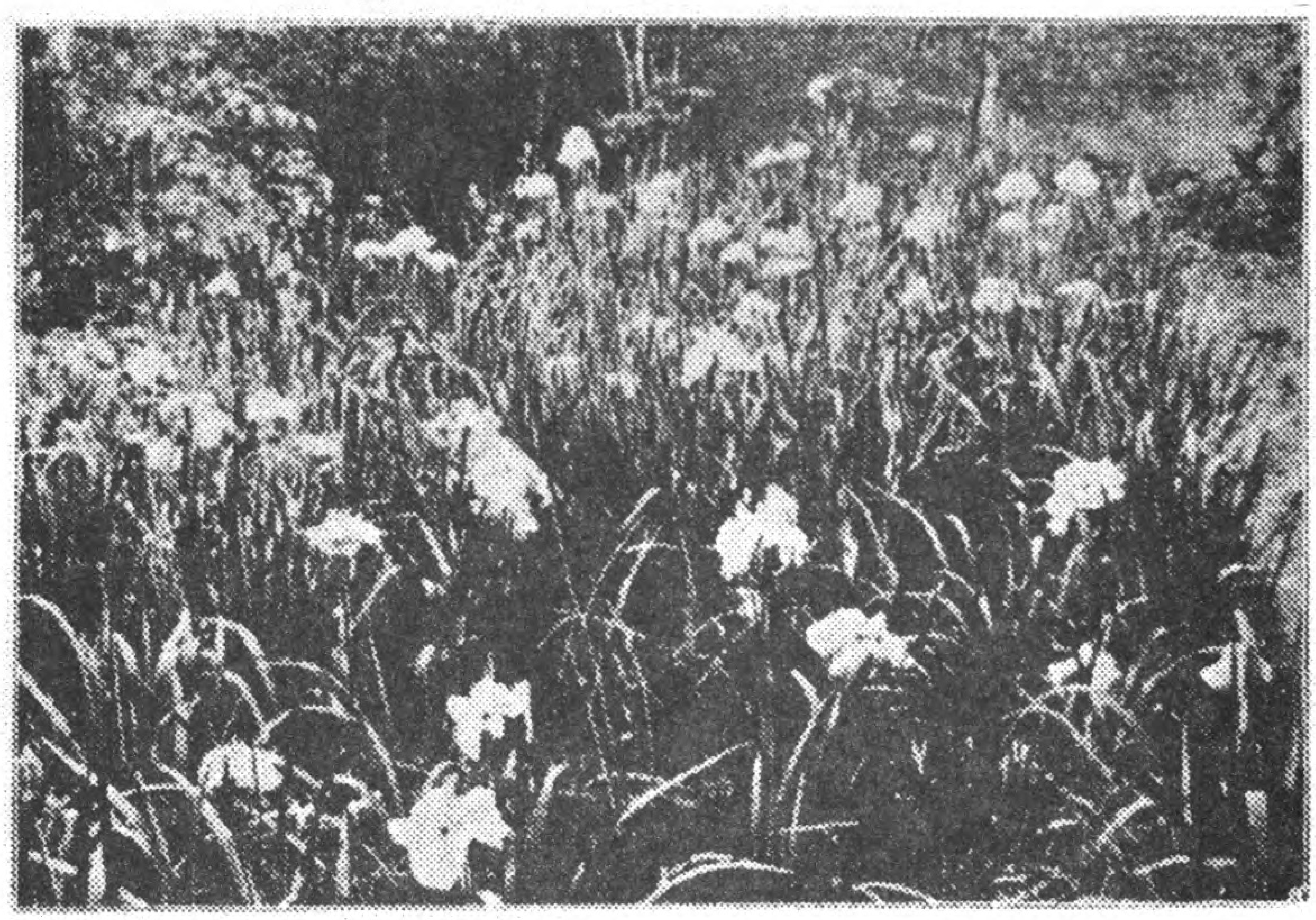


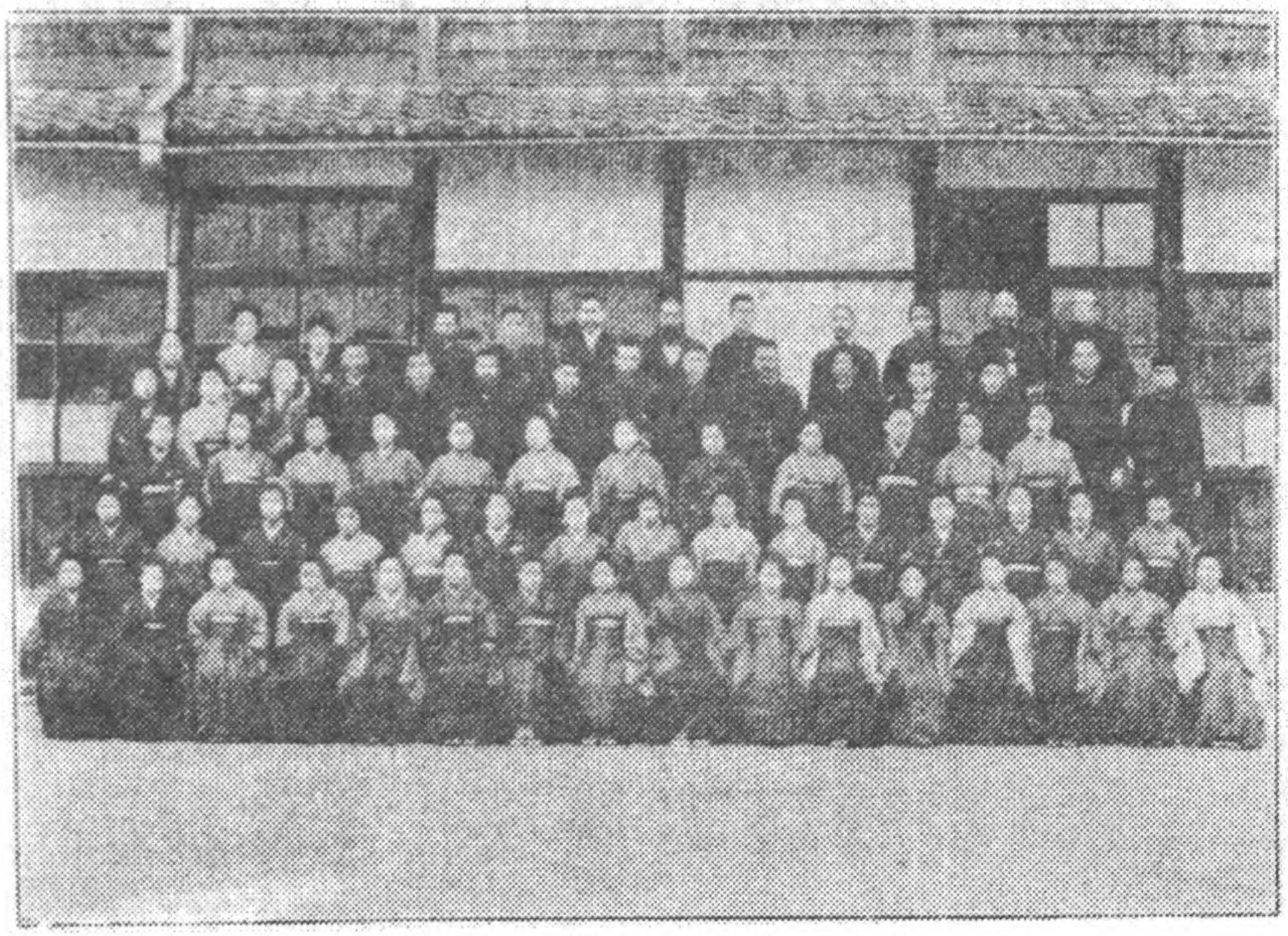
吉水神社

京都油小路久世邸芍藥園



仝上菖蒲園





京都第三高等小學校職員及卒業生

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

女鑑

第拾參年第拾號

境遇

多くの人は境遇の爲に制せらるゝなり。境遇は人をして能く善を爲さしめ、また能く惡を爲さしむ。勇者が時として懦者となるも、弱者が或は强者となるも、境遇の影響が與りて力あるは世間常に見るところの事實なるにあらずや。

動物園の獅子を視よ、虎を視よ、熊を視よ、みな惴々焉として尾を低れ、頭を俯し、哀を請うて休まざるの情勢あるは何故ぞや。その一吼して、山谷震動し、草木萎靡し、百獸慴伏するの雄姿を以てして、嘗て狐狸の屬にだも若かざるが如くなるは、寧ろ憐れむべきにあらずや。怪むなかれ、境遇は實に是等猛獰の獸類を一變して、軟柔怯懦、甚だ馴れ易く、與みし易きも

のと爲すなり。

江南の橘は、江北に遷されて、枳殼となるといふも、地質氣候なる植物界に於ける境遇が、之をして然らしむるなり。草木の無心なるも、一たびその境遇とするところのものに變動を生ずるときは、異花を開き、異果を結ぶも亦奇なるが如くにして、其實毫も怪むに足らざるなり。無情の動物も、無心の植物も、境遇の爲めには、その性を動かし、その形を變ずるを見れば、感化力の至大なる人間界にありて、感覺の鋭敏なる人類が、その享得する境遇に左右せられて、或は善を爲し、或は惡を爲し、或者は品性高き紳士となり、或者は貞節優れたる淑女となり、或者は品質低き卑夫となり、或者は常操なき劣婦となるに至れるは、また避くべからざる自然の趨向といふべきのみ。

ビコンスフキルド曰く、境遇は人生を嚮導するものなり、即ち人生は船にして、境遇は一種の風なりと、波間に浮べる一小舟は、順風に帆を揚げて、一瀉千里の勢を以て彼岸に達するの壯快ある一方には、逆風の爲に檣を折られて、危險なる運命に遭ふことあるをも豫期せざるを得ず。人生の此世に於ける、その境遇の爲に動かさるゝの有樣は、又殆んど之に異なるところ

なきなり。殊に天質繊弱にして、他働的なる女性にありては、一擧手一投足と雖も、境遇の爲に制せられ、動かされ、左右せらるゝもの多きも亦宜なりといはざるべからず。毅然たる男子すら何之が爲に絆されて、その身心に變動を生ずるを願はゞ、柔軟なる婦人が、世途の風にもまれ、波に激かされて、之がまに／＼、善となり、惡となり、智となり、愚となるは、固より當然ならんのみ、古語に謂ゆる習性となるといふも、詮じ來れば境遇の人を動かすを謂ふに外ならざるべし。

然らば則ち境遇は、運命なりとあきらめて、遂に之を如何ともすべからざるものとせん乎。否何ぞ必しも然らんや、多くの境遇は人自ら之を作るなり。故に人の作るべき境遇は、之を選ぶを得べく、また避くることをも得べきなり。例へばその學ぶべき學校の選擇を愼むが如き、或はその交るべき友生の良否を鑑別するが如き、或はその行を正うし、その業を勵むが如きは、來るべき運命の境遇を豫期するの一法にあらずや、又た境遇に處するに道あり。此道を守りて以て操持の確からんは、自ら平生の修養如何にあり。故に修養の重んずべきは勿論なり。敎育といふもの、一方より觀る時は、境遇に處するの道を敎ゆるに外ならざる也。



論説

日本の婦人に就て（つゞき）

女子高等師範學校教授 文學士　下田次郎君演説

日本の女に於て誇るべきことは、斯る性質であッて決して外觀ではないのである、日本の女の名物たる所は玆にあるのである、實に日本の婦人は、此點に於てはドコへ出しても耻かしくないものである、併ながら皆さんは未だ威張ることは出來ない、何となれば斯る立派な性質を現したのは過去の日本の婦人である、皆さんは是から斯る立派な、或はそれ以上の婦人となられるであらうけれども、まだ今日は一先づ其準備を終へただけであッて是までの日本の婦人が荷ふた名譽は、まだ皆さんが之を荷ふことは出來ないのである、それで皆さんに望むのは、是までの日本の婦人の美德を益々發輝して、何は此上に其德を進めなくてはならぬことである、一體女の働きは男子と違ッて、表に立たぬものである、男子の働きはハデで花火のやうなものであるけれども、女の働きはジミで蔭に於て働くのであるから、椽の下の力もちの氣味がある、併ながら其價値に於ては男女チッとも上下のあるものではない、彼の軍艦は其水上に現れて居る所は、水中に隱れて居る所の三分の一ぐらゐである、故に其水上に見えるだけの所を以て軍艦と名づくることは出來ない、況や重要なる任務

の或るものは、水中に隱れて居る部分に於て行はれるのである、水上の部分に於ては大砲が竝んで居り、或は金モールの厳めしき士官が、水兵を調練して居ッて、如何にも美事である、ハデである、併ながら水中に隱れて居る部分に於ての蒸氣機關の運轉を初め、其他色々の任務が果されなかッたならば、軍艦は何の役にも立たぬのである、男の仕事は軍艦の見える部分の仕事である、女の仕事は水中に潜んで居る部分の仕事である、それで男女ドチラが大事であつて、ドチラが大きな仕事をして居ると云ふことは言ひ難いのである、女子の働く場所はハデな所ではない、家庭である、家庭が最も女子の手腕を要する所であつて、女子は實に家庭の女王である、即ち良く夫の世話をし、子供を教養し、家事を理めて行き、一家をして春の如く團欒せしめ、浮世の苦痛を慰むるものは、家庭に於ける婦人其者である、俗に三つ兒の魂百までと言ふが、母の氣質は其子に乳を飲ますと同時に吸込まれるのである、又家庭に於ける感化は悉く子供に移るから、子供を見れば直ぐ其家庭の趣きが分る、如何に良い着物を着せて外形を隱しても、其下から直ぐ家の本當の性質は、子供が其言語擧動に於て白狀して居るのである、又家庭の強みは即ち國家の強みであつて、健全なる家庭は能く健全なる國民を出すものである、要するに國家の繁榮の本は家庭にありと言つて宜しい。

それから尙ほ女子に於て大切なことは子を產むことである、如何なる英雄豪傑も女が生んだものである、さすれば良き子を得るには女子の體格を發達さす必要が大にある、此點に於ては、遺憾ながら日本の女子は尙ほ歐米の女子に一歩を輸して居る、歐米に於ても女子の身體に注意する度合が違

ぶ、國によつて其女子の強弱健否の差異が一般に認めらるゝのである、例へば英吉利人、亞米利加人、獨逸人の如きは實に強壯で、如何にも立派な子を產みさうな女が多いのである、昔希臘のスパルタと云ふ國では、此意味からして體育を重んじ、女子も男子の如く體育に注意して、競つて立派な良い子を產まうと努めて居つた、それで有名なるオリンピヤの競戲に於ては、老人は我々も曾ては力の滿ちた男であッたと謠ひ、又若い者は之に和して我々は今それである、若しお前がやッて見やうと思へば一つやれと謠ひ、子供は之に對して、我々は他日尙は一層強きものとなるであらうと謠つた、又女にも非常に身體の立派なのがあッて、或る詩人はスビルタの女を形容して、如何に汝は美しく、如何に汝の皮膚は生々とし、如何に汝の肉及び胸は高まつて居ることであるよ、汝は牡牛をも締殺すことが出來るだらう、斯う云ふやうに形容をして居る、それでスパルタに於ては子が產れると皆之を役所へ持つて行つて役人の檢査を受け、強いものだけが殘され、弱いものは野山に棄てられて其自滅に任し、或は運の宜いものは他日奴隷とする爲に拾上げらるゝことがあつた、其他遺傳病を擴げることは一種の罪惡と考へられて居つたほどである、それで女の大手柄は良き子を產むことである、五人の物知りの女よりは、一人で立派な子を五人產んだ方が尊いのである、スパルタでは昔敵が懲罰として五十人の子供を請求した時に、スパルタは其代りに百人の立派な男を送つた、スパルタ人の考へは「正しくして大きい」、子供の中に未來の全き世界は隱れて居るのである、又羅馬の或る婦人は三人の男の子を持つて良く敎育して居つたが、曾て或る貴婦人が高價なる

金玉を示して誇つた其時に、私には無價の寶物があると言つて、其三人の子を示した、この三人は他日立派な人となつたと云ふことがある、兎に角大した人間を生むのは女の手柄である、それで大人物の意味と云ふものは、非常に大きなものである、例へば數十萬の兵隊を數箇年動かして大戰爭をする、其戰爭は世界の耳目を聳動して非常なこと、思はれるけれども、大人物の意味は斯る戰爭よりは大きいのである、例へばワットが鐵瓶の湯が煮へて蓋の動くのを見て、其蒸氣を利用しやうと云ふ考への起つた瞬間は、大戰爭の結果よりは大きいのである、或はニユートンが落ちる林檎を見て引力の説を考へ出した其瞬間は、地球はさて措き、全世界を網羅するほどの大きなことを發明したのである、戰爭の如きは大人物の此瞬間の電光石火的の考へに比ぶれば何でもないのである、而して斯るものを産むのも又女である。

それで女と云ふものは前にも言つたやうにハデに働くものではない、女の重もなる領分は情である、涙である、其尊ぶべきものは實に婦德である、智ではない、勿論女子の智育も忽にすることは出來ぬけれども、情育を犧牲にして智育をすると云ふことは大なる誤りである、此に此屛風に書いてあるやうに「人生の勤めは人の苦を救ひ人を樂ましむるにあり」、即ち自らを忘れて人の爲に盡すのである、人の苦を救ふといふのは他人の困つて居るのに向つて同情を寄せ己れの分に應ずるだけの助けを與へて眞底からの眞心を盡すのである、又人を樂ましむるにありと云ふのは、唯口先きで一時の機嫌を取り、或は人が歸る時に菓子を包んでやると云ふのが人を樂ましむるのではない、人を樂ましむると云ふのは、自分の眞心を以て人の肺

腑に押し、本當に其人に愉快を感じさすのであつて、必ずしも物を與へ、或は招待するのが之を樂ましむる所以ではない、要するに我を忘れて人の爲に盡すのである、是が女の本當の勤めである、或は言ふ人があらう、それならば女と云ふものは自分の爲には何も盡さぬのであらうか、たゞ人の方便として出來て居るものであるかと、無論女子もまた自分の爲に盡さねばならぬけれども、他人の爲に盡すと云ふのは一層意味の大きいことではあるまいか、他人の爲にするのは人間の行ひの中で、最も高尙なものではあるまいか、是までの發明とか發見とか云ふものは、唯自分の爲にばかりしたのであらうか、決してさうではない、果して結果が出るか出ぬか分らぬのに、多年苦心をすると云ふのは其結果が出た曉に、自分一人で其惠みを受けやうと考へてするのではない、今日の電氣燈も我家を照らすばかりに發明はしないのである、今日の電話も唯自分の用をたす爲にばかり作り出したのではない、其他昔からの大人物の大きな事業と云ふものは、悉く他人の爲に計ッたのであッて決して自分のためではない、人類のためである、それであるから女が人の爲に盡すと云ふことは、最も高尙なることで實に立派な天職である。

男子と女子とは、生理上、解剖上、又精神上、各く其特色があつて女子はドコまでも女子であるし、男子はドコまでも男子である、それで男らしい女、女らしい男と云ふのは實に變なものであつて、天下斯の如き怪物は無いのである、要するに女子の最も麗しき名は女子である、女子以上に女子を形容する名は無いのである、前にも申したやうに日本の婦人は最も婦人らしき所がある、能く婦德が

行はれて居る、此婦德の尙ほ改良すべきことは改良して、益々其光輝を發せしむることを努むるのは勿論であるが、なほ日本の婦人の缺點とする所は其智育の足らぬことである、即ち一般の婦人には學問上の素養が無くて、人の妻となり、子の教育者となるの準備に於て、智の方面に於て缺ぐる所がある、是は今後大いに進めなくてはならない、併し智と云ふものは、女子に於ては第二であつて、女子の最も尊ぶ所は情であるから、智の爲に情を殺すと云ふやうになつてはいかぬ、今日の若い女の缺點は是までの婦人に學問が無かつたから少し學問をすると世人も珍らしがり、又自分もえらいと考へるから兎角生意氣になり易い、しかし女が半熟の學問を楯にして生意氣になつたほど、世の中に見苦しいものはないのである、皆さんは此學校に於て一通りの教育を受けられて、其中には尙ほ進んで高等な教育を受けやうとする人もあるし、或はモウ學校を退いて、結婚の準備をされる人もあるであらう、それで尙ほ此後學問をせらるゝ人は、今日の所謂女學生の弊に陷らぬことを常に心掛けねばならぬ、又結婚する人は（尙ほ高等な教育を受けらるゝ人の多くも何れ他日は結婚せらるゝであらう）決して今日得た所を以て滿足してはならぬ、男子に於ても高等女學校に相當する中學校を終へてから、尙ほ高等學校、大學大學院、或は其他の高等なる學校に於て、尙ほ學習を自由に續けることが出來るけれども、女子にあつては高等女學校を卒業した後ち、二三年間專攻科などに這入つて、教育を受けるほか、モウ自由に教育を受ける場所は無いのである、それで女にあつては殊に自ら教育し、自ら學を勵むと云ふことが肝要である、且つ人の家に嫁しては、是ま

でのやうに時間が自由なものでない、婦人は實際イツでも人の爲に時間をアケて待つて居らねばならぬ、或る事を言付けられると直ぐせねばならぬ、今勉强して居るから立たれぬとは言はれない、それであるから、自分の勉强する時間は極めて不規則な僅かのものである、それで最も時間を惜むと云ふことが必要である、即ち能く時の屑を利用しなくてはならない、紙屑や襤褸屑の如きも、良く之を使へば新聞紙となつて再び世の用を達すのである、況や時間の屑である、時間の屑と紙屑とは元々比較にはならないのである、財産は一度び之を失ふても取返へすことが出來る、寶玉は一度び之を失ふても取返へすことが出來る、併しながら時間は一度び之を失へば長へに歸らぬのである、假令百萬圓を以てするも、モルガンの富を以てするも、一分たりとも一秒たりとも時間はアトに歸らぬのである、此間或る雜誌を見たのに斯う云ふてとがある、或る有名なる法官が、己れの妻の常に晝飯に十分乃至十五分後れて來るのを見て、毎日其時間を失ふのは惜いことである、其時間を利用して何か爲ようと思ッて、遂に著作に從事し、十五年の後に三卷の本が出來た、此本は非常に好評を得たものであると云ふことがあッたが、チヨとした時間でも、積ると大したものである、使ひやうに依ッては隨分大したことも出來るのである、それで人の妻となる人、又は順當な時間を得られぬ婦人は、能く此時の屑を利用して、益々學術上其他に於ての進歩發達を計らなくてはならぬ。

此の間私は美濃紙大の洋紙を買ッた、此洋紙には縱橫に筋が引いてあッて桝の目になッて居る、其八ッ切りを玆に持ッて居ますが、縱に十五と橫に二十六の線がある、それで其目を計算すると三

百九十となる、此目を一日に一つづゝ筋を引いて行くと、三百九十だから一年と一ト月ばかりで漸く其一頁が消える、表と裏とでは二年と二箇月ばかり掛る譯である、それで之を八倍した全體の紙は實に十七年餘りの年月に於て、漸く其目が潰されるのである、それであるから若し斯る紙が僅か五枚あれば、八十五年餘りの日が書入れられるのである、斯う考へると一日に一つづゝ目を潰すのは實に氣の滅るやうに思はれる、それであるから常に光陰を惜んで徒らに空々漠々として時間を費さずして、之を役に立てるやうに使ふことを常に心掛けなくてはならぬ、今日の日本は最早日本の日本ではない、世界の日本である、元はドンなとしても、日本だけに知れて譽れも恥も内輪だけであッたが、今日はそれが世界一パイに擴るのである、モト槍を立ッて練り歩いた頃には、京都から東京まで來るにも二十日も要したが、今は一日足らずで來られるのである、コンな工合に交通が便利になッて世界が狹くなッた、それで日本も唯日本として立ッて居る譯にはいかぬ、萬國の間に立ッて居るのである、故に總てのことに於て世界的の日本と云ふ考へを忘れてはならぬ、婦人に於ても社會に於ける日本の婦人を代表する積りで、シッカリして雄々しく且つ女らしくして、我こそは日本婦人の模範であると云ふ意氣込みで、内外表裏なく立派にやッて行かなくてはならぬ、殊に西洋人は成るべく珍らしいことを見やうと思ッて日本に來るのが多いのである、チヨット目に觸れるものも寫眞に取る、向ふの人は多くさうであるが、其見たことを本にして出すから、日本のことは色々向ふに紹介され評判されて居る、殊に名物なる日本の婦人のことは色々書かれて居る、必ずしも

通り過ぎの西洋人の觀察を恐れて、それが爲に愼むと云ふ譯ではないが、彼等は日本の婦人を紹介するのであるから、其誤解を防いで本當の面目を示すが爲に、居常日本の婦人と云ふことを忘れてはならぬ、又日本の家庭は、世界の模範であッて、其母として妻として子の敎育者として、日本の婦人は實に申分のないものであると云ふやうに、皆さんがなられることを希望する、又其家庭を暖き立派なものとして、此世に於ての煩悶苦痛を避ける港として、人々が安らかに其港に錨を投じて、此世の極樂を家庭に於て見るやうにしなければならぬ、斯樣にするのは今後皆さんの任である、それで今日は學校を卒業されて、丁度コヽで一つ猛省一番して更に進むべき方針を確立するの時であるから、私の言ふたことも、其參考になれば甚だ仕合せである。尙は今日卒業されぬ方々にも私の申したことは、矢張り應用が出來るのであるから、唯卒業生の方々に御話したものとして聞かれずに、自分にも之を參考とせらるゝことを希望するのである。

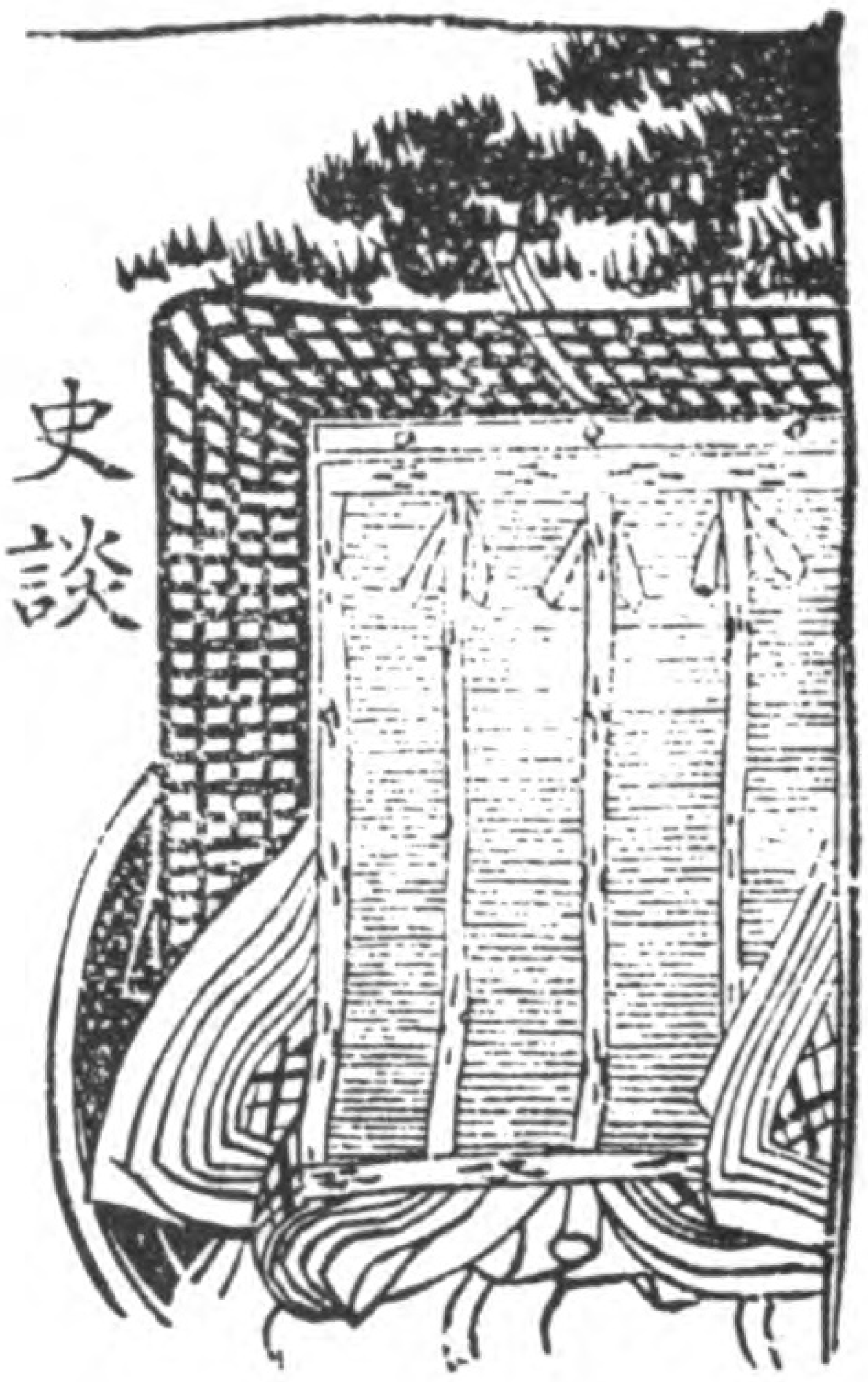
（完）

◎本多佐渡守曰く

第一、臣下となりたるものは、晝夜君に忠節を盡す事のみ考へ、大事に臨みては直に一命を抛ちて、奉公の誠を致すべし、之れ君の扶助に依り、一生の間安く妻子眷族を養ひたる代りなりと覺悟し、

第二、子は親に孝行を盡さゞるべからず、盡し盡すといふは只だ親を養ふのみに非ず、我身は即ち親の體を分けたるものなれば、決して其の本体をおろそかにすべきものにあらず、我が身に代へて保護すべきものと心得、

第三、夫婦の間は天地の如く、即ち天地和合して萬物を生ずるが故に、妻は夫を天の如く敬ひ、夫は妻を地の如く愛し、相睦み相親む時は、一家和合して其風俗自然天下に廣まるに至るべし、



遊女龜菊（つゞき）

文學士　小林雨塔

（三）　龜菊御前

人は頻りに祇王の薄倖、佛の温藉を傳へたり、祇王一度平入道の愛を得三年に及びて、西八條後庭の寵を一身に集めぬ、母と妹子は依て以て安を貪り、一時都下幾多の妓女をして欣羨禁ずる能はざらしめき、彼れが佛の爲めに清盛に勸解して強て歌舞を見せしめし時焉ぞ「佛もむかしは凡夫なり、或等も遂には佛なり、いづれも佛性具せる身を、隔つるのみこそ悲しけれ」と怨嗟するの時あるを思はん、實に情は却て身の仇となりぬ、遂に都門の榮花を捨てゝ嵯峨野に澄める月を上求菩提の便と歎せしは、悲しからずや、しかも其當面の仇と怨まれし佛に至りては尚憐むべきものあり、己が立つる道に名を成さばやとて、祇王の人知らぬ情によりて好技妙曲を奏し得ていかで、忘恩の譏を受くるを期せん、切なる情願も容れられず、力なくも清盛に引き止められ、遂に十六歳の花の袂を墨染の色に變ゆるに至りしは誰れの罪ぞや、一生の苦樂全く他人による彼等賤婦の出處進退甚だ多とすべし、又寧ろ憐むべきなり。

若し夫れ靜に至りては其貞烈の志は類少なしと云ふべし、彼れが芳野の奥に夫義經に分れ、從者に

は捨られ降り積もる雪路に行方もしらず迷ひし時一介の女子として天涯身を容るゝ所なきに至りしは數寄の極ならずや、後鎌倉に召されて、頻に糺彈せられ、或は別緒の愁を懷きながら鶴岡社頭に白雪の袖を廻はせし時、其懷果していかなりけむ、果ては夫の遺愛たる嬰兒を生みしも、直ちに由井が濱の波浪に投げ入れられしに至りては其慘其酷殆ど言ふべき所を知らざるなり、しかも始終貞女の志を忘れず、梶原景茂等の痴漢の無禮に遇ふては嚴然色を正して、判官にしてあるならば汝の輩我が面をも見る能はざらむと辱かしめしが如き丈夫の槪ありと云ふべし、古今其芳馨を傳へて止まざるも宜なり。

我が龜菊に至りてはいかむ、世未だ彼の壯烈を傳へず、殆ど傳するに足るものなし、されど其承久大亂の階をなせしは實なり、故に史に稱して偏へに女性の恨によりて此の禍をなせりと云ふ、此れ以て彼を罪すべきか、龜菊は實に傾城傾國の姿色あり、美にして艶、天の生せる麗質一笑百媚を生せしとかや、其後鳥羽院の殊寵を蒙りしも自から其故あるべし、一介舞女の分として、攝津長江倉橋の兩庄を賜りたるは異數なり、されば動もすれば兩庄の地頭かれが皷打等を凌辱して之を忽緒にする事ありしかば、龜菊之を院に訴ふ、されば、上皇は鎌倉の執權右京大夫義時に勅して夫の兩庄の地頭を改補せしめんとし玉へり、義時は奉答して曰く彼の庄の地頭は故右大將賴朝の時平家追討の恩賞として補任せられしものなれば、命に代へて功に募りしものと云ふべく、ゆめ義時が私の計ならず、さしたる過なくして改易し難しと答へまつりて叡旨に逆ひぬ、されど院は尙許し賜はず、再度に及びつゝ右の地頭改補の事を迫られたり、

時に恰も源右大臣實朝鶴岡拜賀の夜甥公曉の爲めに殺され、關東は正に上下紛雜のもなかなり、然るに院は實朝の死を吊し賜ふと共に同じ使して右の再度の勅を下し賜ひぬ、時に建保七年閏二月九日なり、十二日には義時大膳大夫大江廣元等と額を鳩めて、此の上皇の御難題をいかにすべきと凝議せしが、十五日には既に義時の弟時房一千餘騎を從へ、二位尼政子の使と稱して上洛しぬ、これ一は勅に答へ奉らん爲めなりと、風雲轉た急なり、之を以て見れば龜菊の内奏は實に大亂爆發の導火となりしは疑なし、しかも之を以て彼を罪すべきか、我は非なりと云はんとす。

（四）後鳥羽院

後鳥羽院は中世の英主なり、先皇安德帝平家一門の擁戴する所となりて西海に播遷し給ひ、果ては壇浦の洋上長へに幽魂を止め玉ひしに引き換へ計らざるに帝統を承け賜ひしは既に御過世目出度かりし事なり、されど帝天資剛邁岐嶷武門數世の間皇權を私し、叡旨を輕んじ奉るを怒らせ玉ひ、機に乘じて帝權を恢復せんと志し賜ひし事一日に非ざりしなるも酒宴、亂舞、白拍子、博奕、武藝、兵仗、太刀、刀、折烏帽子の御遊行又は鵜合等の御遊連綿して、時には玉體を河上に跳らして近臣と共に遊泳の術を學び玉ひ、あるは龍軀親しく鐵槌を振ふて秋水逝らんとする百錬の鐵を鍛へ成す等殆ど一天萬乘の君の御爲にあらず、只御志は公家榮華の古に復さんとするにありしなり當時の習として上一人の御身の白拍子の輩を近づけ玉ひしも怪しむべきにあらざるは以前述ぶるが如し、帝は龜菊の外にも舞女法師を愛し玉ふて皇子を生ませ給ひぬ、是れ後の禪林寺の門跡覺譽大僧都なり、余は只帝の御行動に於て天眞爛熳、剛毅

果決の御徳を仰ぎ奉らんとするものなり。

鎌倉の實朝兇刄に斃れしは、帝に取りて逸すべからざる好機なりしなり、是れより先種々の紛糾せる事情は迫まりに迫まりて、形勢危殆に赴きしに、今此の好機あり、龜菊に關する義時の悖戻は奇貨置くべし、大亂の崩發せしは騎虎の勢已む能はざりしものあり、されど此等の事情を曲諒するは本編の目的に非ず、只龜菊の內奏は帝をして關東追討の辭柄を作らしめしに過ぎざる事を云へば足れり、帝は久しく鎌倉を討せんと企て賜ひ、其口實なきに苦み賜ひぬ、龜菊の事の如き、固より一些事恐らくは叡旨固より深く關心せられしにもあらず、此の一舞女の事に關し義時陪臣の分として屢々帝旨に忤ふを怒り玉ひしも、全く以て其問罪の名を得んとし賜ひしなる事又明らかなり。

されば龜菊後世の讀史者よりして徒らに妬婦賤女の訴を受けしは、甚だ以て寃とすべきなり、固より靜の貞烈の跡なしと雖、又決して世を亂すものと云ふべからず、寧ろ一生他により苦樂をなす舞女一輩の薄倖の一事例として見るべきのみ、人深く彼を罪するなくば幸なり。

（完）

玉輿記（二）

須藤鳴門

眞田伊豆守母儀

信州埴科郡松代の城主、眞田伊豆守滋野信房の母儀は、上州沼田領、遙か山家の下平村と云ふ所の百姓五郎右衛門と申者の妹なり、されば、母儀の素姓を尋ぬるに、初め夫を持ち、そはいとも貧しき山民なりしが、或年天下大饑饉なりし時、其の夫餘所の家に忍びより、粟一俵を盜取り、之を背負ひて逃行けるを、粟主見付あとより追かけ、

鎌もて細首を掛けゝれば、即時に死したりけり、故に其女房をは、代官より申付られ、上り者に致し、信房の父内記信政の奥方へ召仕はれしが、或る時信政此女房に戯れ、寵愛の餘り、終に懐姙して伊豆守を產めり、由りて五郎右衛門を召出し、合力米五百俵下され、高橋五郎右衛門と稱す、其子男女二三人ありしが、家中に仕付置るゝもあり、旗本へ遣はすもあり、或は出家に爲るもあり、さて彼の母儀末津女は、後年御新宅樣とて、家中尊敬しけるが、後は松壽院と申及べり、誠に人の行末と水の流れは知れぬものかなと、世の人評しあへりとぞ。

伊豆守腹替りの舍兄あり、勘解由と申ける、されば勘解由の生國は山城なり、如何なる由と尋れば、寛永の頃、將軍家御上洛の時、父内記も供奉致して上京の砌、京都にて儲られたる息男の由、後春日局の執成を以て、旗本に召出され、三百俵拜領せりと云ふ。

眞田伊賀守母儀

上野國利根郡沼田城主眞田伊賀守滋野信澄の母儀は、父河内守信吉の時代、家來に手代塚十郎左衛門とて、少々食祿を賜はりしかば、勤功怠らす、忠義をぞ盡しける、後依田の娘を娶りて一子を生めり、是を手代塚左平次と申せし也、或る時、一郎左衛門女房嫉妬の事に就きて、大に夫婦喧嘩を起し、互に腹を立てゝ、最早離別の沙汰に及び、堪忍成らす、はや女房は走り出で、沼田城へ駈込み、河内守の御袋樣に、右の段々一分初終を語りて、私義は御城樣へ參候、上は、夫の方へとては、死しても歸り申間敷由申上るに付、其分に成され、召使はれけるに、この女房中々の取り成上手にして、風流ものなりしかば、後には河内守彼

れに想を懸けられ、いつぞの程か手を付けられ、寵愛なされし處に、程なく懷胎あり、日に月に重りゆき、はや其の當り月になりし時、彼女申けるは、我事是非ともに江戶へ登り、江戶の御屋敷に於て、此御子を產み奉るべき由申に付、大勢の者を附添え、江戶へ登せけるに、道中鴻巢の宿にて、男子平產あり、之を眞田兵助と稱す。

かくて兵助漸く成長するに從ひ、彼女房は御部屋樣と申せしが、後兵助の家督になり、明曆二年丙申十二月、從五位下に叙し、伊賀守に任せられ、信澄と稱す、又信澄の母儀御部屋樣と申せしは、慶壽院と稱す、されば、この慶壽院、前に儲けし手代塚左平次事、是伊賀守一腹の兄故に捨て置かず、彼れを召出し、千石程のあてがひにて、樂人に致され、親子圖らざる榮花を極めしとなり、げに世の中は樣々なり。

伊達遠江守同宮內少輔
両腹母儀

伊豫國宇和郡宇和城主伊達遠江守藤原宗利とて、仙臺中納言政宗の孫にて、前遠江守秀宗の三男なり、童名犬松丸と稱し、後兵助に改めらる、母儀は妾にて、その名を於小奈と申ける、後に寶池院と稱す、さて宗利は、承應年中諸大夫に任し、大膳太夫になり、明曆三年丁酉六月廿一日、父秀宗の讓りを受け相續ありて、同年十二月廿七日、從四位下に叙し、寬文三年癸卯十二月廿八日、侍從に任し遠江守に改む、されば宗利の舍弟宮內少輔宗純と申せしは、幼名伊達小次郎と稱す、母儀は於龜とて、是れ亦秀宗の妾なり、後常照院と稱す、宗純先年舍兄遠州家督の時、高十萬石の內、三萬石配分の事に付、色々出入ありと雖とも、何れも妾腹の實子なれば、井伊掃部頭直澄親類の好

みに依て、是を取扱はれけるに、如何相談きまりけん、十萬石の内三萬石、同國吉田にて配分せらる、故に以來兄弟不和にして、互に出入もなかりけり。

増山彈正少弼と父母

參州幡豆郡西尾城主増山彈正少弼正利は、二萬石を領し、正利始め辨之助とて、これ朝倉惣兵衛尉某の實子にて、七澤作左衛門尉が爲に子分となりて、その後將軍家御緣者たるの間、彼の彈正一卷悉く仕合よく召出されて、段々取立らる。

されば彈正父母の元を繹ねるに、下總國古河の出生なり、こゝに將軍秀忠公の御膳番なる朝倉齋三郎と稱し、五百石を知行せられ、その家來某と云者あり、彼れに齋三郎名字を授け、朝倉惣兵衛といひて、家の仕置など致し、知行方支配等、萬端差引勤めしむるの所、齋三郎ゆくりなく病死す、其後父朝倉右京進豊高とて、水戸黄門頼房に仕へて、物頭役を勤む、この右京進は、先年家康公より、水戸殿へ附けられたり、然るに右京進は、齋三郎死去に付て、水戸より江戸へ罷越、齋三郎跡の穿鑿を致し候へば、惣兵衛引負ひ餘程ありければ、其金銀米錢など出す可申旨にて、押籠め置れける、爰に右京進は、土屋忠兵衛知直には、未だ逢はざれど、忠兵衛の一家に伊豆惣檢校とて、其頃駿府へ御目見として罷下り、又秀忠公へも御目見の爲め、江戸へ罷下り在合候に付、右京進へ惣兵衛事を、達而扱ひ申さる樣は、齋三郎子息もなく果てられ、其上惣兵衛久しく召使候者のことなれば、只今左樣にせらるべきにもあらす、右京進も惣檢校へは、少々好みある上、亦その理に通じ、旁以て罪を宥め、夫婦共に暇を出さる、時に惣兵衛男子一人女子二人あり、其後惣兵衛妻

子を引連れ、下總國古河へ引込み、商人とも付かず、又職人とも見えず、元來百姓にも見えず、只何者とも知れざる浪人の成損して、名も知れぬ樣子なりしが、案の如く彼惣兵衞渡世の營み、一日を送るべき事の成されば、豫て嚴禁制道なるにも拘らず、潛に人目を忍び、鶴を擊取り、江戸へ持越し鳥問屋へ賣却し、是にて妻子をはごくみ星霜を凌ぎけるに、此事終に露顯し、惣兵衞は召捕られて死刑に處せらる、當時古河は永井信濃守の拜領の地なれば、則ち惣兵衞女房男子一人女子二人と共に、四人を揚り者に致さる、後年信濃守息女、立花左近將監へ嫁入り玉ふに付、彼女房は、紫と名付、茶の間の奉公を申付らる、娘一人は蘭と名づけ、是亦息女の禿にて、立花家へ連られけり、彼の男子は小姓奉公をなし、また一人の女子は、他所へ小姓に出せり、さる程に立花殿内室、幾程もなく死去し玉ふ、因て紫蘭親子に暇を出さる、其節信濃守の家來七澤作左衞門百四五拾石程の者なるか、彼紫を娶り、蘭女も共に引取らる、當時作左衞門は、淺草の邊に假住居なりしが、蘭女正月の事にて、門に出て遊び居ける處へ、家光公の乳母春日局、淺草觀音へ詣での折柄、ふと蘭女を見付られ、みめかたち賤からず、目の冷しさ、鼻筋の高からず低くからず、口元の締り加減、いかにも上樣の御意にも可入生れ付哉とて、則ち父母に預け置き、誰にも見せ申間敷と堅く申付られ、其後春日局より、永井信濃守方へ斷り貰ひ玉へは、すなはち信州娘分として、上樣へ御奉公に出し申さる、これ於樂の方とて、大樹家綱公の御母公なり。

さて彈正の姉は、品川式部少輔へ嫁し早世、弟の辨之助こそ、後には諸太夫に任せられ、增山彈正

即是れなり、前に記せる如く、二萬石となり、參州西尾の城主に仰せ付らる、誠に果報いみじき兄弟哉と、世人擧りて申ける、此れ一腹一生の兄弟にて、朝倉惣兵衛尉の實子也、作右衛門は後剃髮して、法名を雲晴と稱し、妻紫も法體せられ仙光院とて長命なり、子孫の繁榮を見て終られける、實に目出度女性かなと、皆人うらやみけると也。

（未完）

面影のかすめる月ぞやどりける
　春やむかしのそでのなみだに
橘のにほふあたりのうたゝねは
　夢もむかしのそでのかぞする
石のかみふるの早田を打かへし
　うらみかれたる春のくれかな
皇太后宮太夫俊成女



學藝

通俗土佐日記（第十五回）

北海道廳師範學校教諭　兒玉彌三郎

廿八日、終夜雨も止まず今朝も

○終夜　とは昨夜のなり、昨終日風吹き雨降りて、夜に入らば止みもやせんと思ひしに、尚は雨も止まずといふにて、風は固とより吹き止まぬを思はせたり、

○今朝も　とは今朝も尚は止まずとの心なり、

廿九日、舟出だして行く、麗々と照りて漕ぎ行く、

○是は初め空は晴れねど風雨は止みたれば舟を出せるなり、其の中に空晴れ日も麗らかに照りて海上愈靜かなれば快く漕ぎ行ける樣を書きたるなり、

爪の長くなりたるを見て、日を數ふれば、今日は子の日なりければ切らず、

○爪の云々　毎日風雨に沮まれ又は海賊の噂などにて、氣も屈したる爲め氣附かざりしが、今日の日和に心も長閑に爲りて、爪の長くなりたるに心附きしことさもあるべし、

○日を數ふれば　とは干支を數ふるなり、日數のことにはあらず、

○今日は子の日云々　子の日に爪切らずといふこと、當時陰陽家の說盛んに行はれたる證なり、

拾芥抄下卷、九條殿下遺誡幷日中行事の中に「次除二手足甲一（丑日除二手甲一寅日除二足甲一）」とあり、子の日に爪を切らぬは丑の日を待つべき爲めなるべし、後には卯巳未亥の日に切らぬことゝなれり、「世の中に思ひしことの叶はぬは卯亥巳未に爪を切る故」とさへいふに至れり、此の爪を切らざる位のことは記するに及ばざるが如きも、其は舟中日頃の心勞甚だしかりしが爲めに、手に延びたる爪にも毎日の干支にも心附かざる由を歎きたるが爲めなり、

睦月なれば、京の子の日のこと言ひ出でゝ、小松もがなといへど、海中なれば難しかし、或る女の書きて出だせる歌、

覺束な今日は子の日か蜑ならば海松をだに引かましものを、

とぞいへる、海にて子の日の歌にては如何あらむ、又或る人の讀める歌、

　今日なれど若菜も摘まず春日野の
　我が漕ぎ渡る浦に無ければ、

○睦月なれば云々　京の子の日のこと言ひ出でゝとは、去年十二月廿一日出發したるなれば、疾く都に歸り着きて、今日は都にて子の日もすべきことなるをと、船中思ひも寄らず長く費したる不幸を歎く心を外らして、京にては人々子の日をするならんと位に思ひ遣りたるのみらしく書けるなり、此の日は二の子の日なり、三の子の日をば乙子といふとぞ、正月七日を子の日と定めたるは後世の事と思はる、

○小松もがな云々　京に歸りて子の日をしたきは山々なれど、其は到底叶はねば、切めて小松だにもあらば、其れにて子の日をしたる心地だにせんと思ふ心なり、

○或る女是れも例の設けたるなるべし、

○覺束な　は心の濟まぬ程の義なり、今日を子の日と聞けど、子の日のしるしもなければなり、

○海松　はみるといふ海藻なり、形松の如くにして葉無し海產物なれば、小松に代ふべきものにはあらねど、松といふ名の通へるが爲めに、切めて是れをなりとももとの心なり、

○引かましものを　のましは總て虛構の事に付きて、其の未然を想像したる詞なり、むといふに等しけれど、齊しく、未然なるにも　虛なると實なるとの別なり、ものをとは其れすら叶はぬを歎く詞なり、

○一首、表は、子の日なれど舟中なるが上に蜑にもあらざれば、海松をだに引かれぬ詫しさを

讀みたるなれど、實は、元と斯かる舟路の困難なる土佐に任ぜられて、非常に船中に日數を費したる不幸を歎きたるなり、

○海にて云々　海中にての子の日の歌は、難題なるにも拘はらず、善く讀みたるかなと感賞することをば、見る人の心に讓りて、いかゞあらむと書けるなり、

○今日なれど云々　子の日なれど、いふなり、

○若菜も　といひしは、小松を引くこと能はずば、切めて若菜をだに摘むべきに、其れさへ摘まずとの心なり、若菜のことは正月七日の條に委しくいへり、

○春日野の云々　是れより下三句は、若菜を得摘まざる故をいへるなり、都に在りて春日野に若菜を摘むべき今日なるに、尙は此の邊に滯れるを詫びたるにて偏に都に歸りたき情を讀みたるなり、

○一首の意、此の邊に春日野なければ今日子の日なれど若菜も摘まず、假令近邊の浦に若菜摘むべき處ありとも、春日野ならでは摘まじと思ふとの心を表として、實は、專ら、斯く船中に日數を費して、今日さへ都に着き得ぬ不幸を歎きたるなり、

斯く言ひつゝ漕ぎ行く、面白き處に舟を寄せて、此處や何處と問ひければ、土佐泊とぞ言ひける、昔、土佐といひける處に住みける女、此の舟に交れりけり、其が言ひけらく、昔、暫し在りし處の名類にぞあなるあはれ　といひて讀める歌、

　年頃を住みし處の名にし負へば來寄る波をも憐れとぞ見る、

○面白き處に云々　風景好き處なるべし、土佐泊のことなり、

○此處や何處と云々　此處の風景の面白き餘りに其の名を問へるなり、是れまでに幾處も舟を止めたれど皆名をいはず、此處に限り名を問へるは、勝地なる上に此の土佐といふ名の用あるが爲なり、

○土佐泊　阿波撫養港の奥にあり、

○昔土佐といひける處に云々　昔といへるは漠然たることに書き紛らしたるなり、土佐といひける處と餘處々々しく書けるも亦然り、交れりも、自分の召し使ふものにあらず唯乘り合ひたるものゝ如く思はせんとて書けるなり

○其が言ひけらく　のらくはるを延べたるなり、

○昔暫し云々　昔は前に言へるが如し、暫しといへるは、此の女は土佐生れの者なれど然らざる樣に書けるなり、然るを斯く暫しと書けるは此の女は暫し居たる處なるだに斯くまで土佐を懷かしく思ふを、紀氏は暫し居たる點は此の女に同じけれど、彈指すべく思へる樣を對照せんが爲なり、

○名類ひ　とは名の類ひといふの丶字を省きて熟語とせるなり、

○年頃を云々　年頃とは年來といふに同じ、

○來寄る波をも云々　此の日頃斯くも厭へる波なるに、其れをも憐れと見るといふ意なり、

○一首の意、表は年來住みし土佐の名附きてある處なれば、日頃厭ひたりし波も憐れと見ると讀めるにて、其の實土佐の戀しく懷かしくて、唯名のみなる此處にだに思ひ出されて忘れ難き心を讀めるなり、讀み人の意は偏に故郷を戀ふ

る情なるを、傍らよりも憐れに思ひて記したるらしく書きたれど、眞意は、紀氏の土佐を快よからず思ふより、此處の名を土佐と聞くだに疎ましきに、此の女は只管土佐を戀しがるを、我が情に照らして思はせんが爲めに之れを記せるなり、

○此の段先づ始めに子の日のことをいひて、京の戀しさを述べ、次に土佐の女の土佐を戀しがることを書ける、兩々相反對して、土佐の女は紀氏の土佐を疎むを怪しむなるべく、紀氏は此の女の土佐を戀ふるを怪しむなるべき由を、言外に思はせたる詞の用ひ方、凡庸ならぬ所なり但し女の方は客にして紀氏の方は主なり、されど唯此の女の情を憐みて記したる樣に書けるは、一層の妙筆とやいふべき、

和歌評釋　小倉の色紙（つゞき）

神田中學校講師　中川愛冰

山部赤人

和歌を以て柿本人麿と名を齊うし、共に歌聖と稱せらる、また人麿と同じく父祖傳はらず、聖武天皇の神龜初年、聖駕に隨ひて紀伊に行き、天平年中吉野離宮に陪し、制に應じて歌を作る、猶詠歌によりて諸所を周遊せし紀念をのこせり、

田子の浦に打出てゝ見れば白妙の
　ふじの高根に雪はふりつゝ

○田子の浦　駿河國庵原郡に在り○うち出で見ればうちは發語なり、發語はすべて詞の勢をつけんが爲に上におくものにして、ふり分のふり又はかき分のかきなど此例多し○白妙の　持統

天皇の所に說明するものゝ如し、富士の雪にかかる冠辭○ふじの高根駿河甲斐に跨りて雲表に出づる高山○雪はふりつゝ　つゝは天智天皇の所にいへり、この所にてはつゝいの下にあると入れて考ふべし、

この歌、新古今集冬の部」に題知らず」とあり、又萬葉集第三には、山部宿禰赤人望不盡山作歌一首并短歌と題したる反歌に「田子の浦ゆ打出でゝ見れば眞しろにぞ富士の高根に雪はふりける」と見ゆ、浦ゆのゆは「ヨリ」といふに同じく第三句といひ第五句といひ、萬葉集に載する方大に力あり、

○一首の意　田子の浦に立出でゝ、はるかに向ひの方を見れば、大空高き富士の山に、雪が眞白に降かゝつて居る、實に美しき景色であるわいと歎稱したる也

河原左大臣

性は源、名は融、嵯峨天皇第八の皇子、御母は正四位下大原金子なり、仁明天皇御子となし給ひて、承和五年皇太子御元服の日、融も共に禁中にて元服せられ、正四位下に叙せらる、貞觀の初年正三位に進み、近江守を兼ぬ、同十四年左大臣に拜せられ、元慶二年正二位となり、宇多天皇御即位の後從一位にすゝみ、寬平七年八月七十歲にて薨ぜられ、正一位を贈らる、融遊樂を好み、別業を宇治に構へ、陽成宇多、朱雀の三帝御行幸あり、後藤原道長の領する所となり、其子賴通の時に至り、寺となりて平等院と名く又嵯峨に山莊を營み、棲霞觀と稱せしが、これも後に棲霞寺といふ寺となれり、又河原院を東六條に營みて此に居る、臺閣水石巧に華麗を極む、鱗介を取りて池中に放ち、每月難波の潮二

十斛を汲み、日に鹽を煮さしめ、以て陸奥鹽竈の勝區に擬す、世に河原左大臣と稱す、

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに
みだれ初にし我ならなくに

○みちのく　の道のおくの約りたるなり、すなはち陸奥の國を云ふ○しのぶもぢずり　しのぶに信夫と書き、陸奥信夫郡に在り、もぢずりはすり衣とて、古へ布帛に忍草の莖葉を色摺にしたるものにて、其模樣捩れたる故に名く、信夫摺の一種なり○誰ゆゑに　誰の爲に、即ち君の爲とほのめかしたの也、亂れ初にし戀に心の亂れ初めたる意○我ならなくに　我ではないにの意、なくはぬの延びたる音なり、いひさしたるやうにてつれなき意を含む、

この歌、古今集戀四に「題知らず」とありて、第四句「亂れんと思ふ」とあり、

○一首の意誰ゆゑに、信夫もぢ摺の如く、戀に心の亂れ初めたる我なるぞ、外の人の爲にはあらで君ゆゑであるに、などていつまでも斯くはつれなきぞとなり、

家政學大要講義（承前）

磯部武者五郎

（十六）　建物各部の名稱

木造家屋につき普通の名稱を擧ぐれば

棟、屋根の最も高き處

擔、屋根のふき下したる處通例軒の字を用ふ

櫌、屋の棟より擔に垂れたる木

梁、棟の木を支ふる木

屋根、屋根の種類に六種あり

屋根の種類
- 瓦葺　火を防き保存に利あり
- 板葺　木片葺、皮葺の二ッあり、木片葺は價廉なれども濕氣を含み火を防がず、檜皮葺は品格高尚にて神社に用ふべし、
- 亞鉛葺　瓦より廉にて亞鉛輕し
- 銅板葺　同上
- 鐵葉葺　同上

（亞鉛葺・銅板葺・鐵葉葺）此三種は家屋の都合により用ふべし、但釘を打ちたる處より酸化し易し、又ブリキ葺は毎年一度コールタールを塗るべし、

- 草葺　藁にて葺きたると茅にて葺きたると二つあり共に雨を防ぎ濕氣を去り熱を導かず夏冷にして冬暖なり、但火を防がざる故田舍のみに用ふべし、

屋根の外形
- 切妻　方形より價廉にて構造容易なり品格は方形より劣れり風害を受くること多し、
- 方形　構造複雜にして費用多し
- 宮造り　屋上に角材を高く交叉して千木片そぎと唱ふ、我國古代建築の遺風なり

天井、天井に三種あり

天井の種類
- 板張　通常の家の天井は皆板張なり角の棧を井桁に組みたるを格天井といふ價高し、板は通例檜、杉を用ふ
- 貼天井　紙又布を貼はる西洋風の建築に適せり
- 塗天井　板張の上に白壁を塗りたるものにて西洋館に用ふ

長押、鴨屋の上に長くつけたる横木

鴨居、障子襖其他遣り戸をすつる上の敷居

敷居、障子襖其他遣り戸をたつる爲に下に溝をほりてわたしたる横木元來は閾（しきみ）といふ、

土臺、家の下の柱の臺となる横木又は礎（いしずゑ）をいふ、

壁、壁に三種あり

壁の種類
- 塗壁　初め荒塗を爲し、次に中塗終りに上塗を爲す、上壁には泥大津、黄大津、砂塗及白壁等なり、
- 貼壁　紙にて貼りたると布にて貼りたるとあり西洋風の家屋に適せり、但汚れ目の付かざる利益あり
- 板壁　板を張りて壁を薄く塗る粗末のものなり、

廊下、細き板間にて諸室との通路あり

欄間、天井と鴨居との間にて多くは透すなり、又は板を張り、或は窓になす

欄干、椽先きの手すり

押入、戸棚のこと

家庭

椽、擔の下の板敷
戸袋、多くは雨戸を入るゝもの
違棚、床の間の脇にある互ひ違ひに取り付けたる
　棚
庇、楣に別につくり添へたる小さき檐
牀、壘を敷くところ、壘下に張りたる板を牀板と
　いふ

（未完）

たまものは人のわづらひかしこくて
　ひとのみちなきひとのゆくすゑ
なかれゆく水にひとしきこゝろあらは
　なにかけがれのあらんよのなか
我とわれこゝろにはづるものならば
　はづべきことのなきみとぞなる



鷄と鶩

林壽祐

「あゝ今日は實に、佳い天氣だ、孃ちやん坊ちやん、お出でなさい、あつちの庭に、鷄が遊んでゐます。こつちの池に鶩が泳いでゐます。餌をやッて、一ッ所に寄せて見ましやう。さア餌を投げます、トトト……、アヒアヒアヒ……あら〳〵鷄が驅

けて來る、鶩がヨタ〳〵上ッた。喰べるが〳〵可愛らしいことね！此鶏とね鶩はね、何ッちも人間の家に飼はれ、澤山卵を産んだり、能く肥え太とッて、肉に滋養分が多いから、食物になッて、人間の爲めには、大さう重寶な鳥であります。で温しくて、何處へも逃げてゆかず、また各自で巣に入ひり、各自で餌を統めて食ふから、飼つて置ても、誠に世話はありません。ですから何國でも、鶏と鶩を飼はない所はありません。鶏はね、大昔は野や山に捿んで、雉や山鶏の様に、バタバタ飛廻はッたものであつたのを、人間がよい鳥と見込んで、捕へて家に飼ッて置いたが、終には、すッかり人間に馴れてしまッたのです。それから何千年と經つ内に、平常飛ばないから、翼がいぢけて、飛ぶことが出來ない、其代り肉が増へて、卵を多く産む様に成りました、で庭で放飼にして居ッたから、始はニハットリといひましたが、後にニハットリとつまり、更に略してニハトリといふ様になッたのです。先祖ですか、さうですね、今印度の森なとに捿んでる、野鶏と同じことなんです。

それから鶩はね、もとは鴨あんでして、秋來て春還へり、遠く海山を越へたのですから、翼の力は非常に強ッたですが、人間に飼はれてからは、鶏と同じく飛ばないから、ダン〳〵短くなつて、殆んど飛ぶことが出來ない様になッたんです。而し體は鴨より　、ズット大きく成りました。で言ひ傳へには、今見てる通り、足の趾が廣いから、始めにはアシヒロといッたので、次にアヒロと呼び、それからまたアヒルと訛まッたといふことです。嬢ちやん坊ちやん、能く御覽なさい、此鶏と鶩は、同じく人間に飼はれて居りますが、體の構造



家庭



は大變違ッて居ますーー何うです、ーー違ッてゐましやう。今予が聞いて見ます、坊ちやん鶩の方をお答へなさい。『厭やだ私鶩なんか、ヨタ／＼するものは嫌いだ。』可笑しいね、そんな事は何うでもよい。それでは孃ちやんが、鶩の方を、坊ちやんが鷄の方を答へるとしなさい。『わたいもいやじや鶩の方は。』『孃ちやん大きい者が何んだね、そんなくだらないことといッて。ね……孃ちやんは佳い子だ、さうなさいな。極まッた／＼。じや聞かう。

(1)此鷄と鶩は、平常何處に何うして居るか。

坊『鷄は庭や畑や山などに居ッて、、草や芥を搔き散らして、餌をさがしてる。

孃『鶩は喜んで、水の上を泳ぎます、あの時々頭を深く水の中に入れて、餌を捕へ。それから田や池の淺さいところへ來ると、ズーズー泥水を吸上げては、ジヤブ／＼、嘴の兩側から流がし出しますの!!! ……

(2)何を喰ふか？

坊『鷄は、米だの麥だの粟だの、いろんな穀物を食ひ、また蟲だの小さい魚などをも、好きがッてる。

孃『鶩は水の中の小さい生物を好みますが、籾なども食ひます。

(3)嘴は？

坊『鷄の嘴は、短くて厚くて尖ッて、、何にからつゝくに都合がよい。

孃『鶩の嘴は、廣く扁くて、泥なんかすくるに具合がよくて!

(4)脚と趾は？

坊『鷄の脚は、太くて長くて鱗があッて、大さう丈夫です。趾も長くて、剛はい爪が生えてるから、土なんか、搔ぢり散らすに便利です。私は

ごないだ、雛子を捕へ様としたら、爪で引搔けられたア。

『そらア氣の毒だッたね、泣いたらう、

孃『鶩の脚は、體に合はすと、短くて細くて弱々してる。趾も鷄程丈夫でないですが、ずらりと蹼を張ッてるから、水の中では水をかき送くるに都合がよいの!!、わたい昨日泳いでるのを能く見てたら、自轉車に乘ッた人の樣に、足をチョイ〳〵と動かしたの、あれが無くちや、泳がれんのか知らん。

(5)首は何うです?

坊『鷄の首は、長い。

孃『鶩のも、矢張り。

『ロクロックビの樣に。だッて長いといふから。

(6)尾は?

坊『鷄の尾は長い、殊に雄のは圓くて、突立ッてる。

孃『鶩の尾は、雌のも雄のも短かい、水の中へ居るですから、長くちや、却ッて不便でしやうね……

『見場はわるくとも、小さい方が、大變便利です。

(7)雄と雌は違ッてるか?

坊『大變違ッてる、鷄の雄は、雌より遙かに大きくて、羽は奇麗だし、頭へは紅くてギジャ〳〵に割れてる冠をかぶッてる、で時々鳴いて時を報ずス。

孃『鶩も、雄は少し大きくて、羽に金光があつて、奇麗ですが、雌は汚たないの!!!

『人間と反對だね。

(8)何と鳴く?

坊『地鷄は、コケエ、コッコンヨーと鳴き。軍鷄

は、ゴゴゴッコンヨーと鳴き。矮鷄はケケケッケンヨーと鳴き。雌は卵を產んだ時、コケエッコッコ〳〵と騷ぎ出す。
『それは、どこだ〳〵と、仲間を呼ぶのだらう。
孃『鶩は、たゞ、ダーク〳〵、ダーク〳〵ばッかり、わたい可笑くて!!!
(9)雛子は、何うして生れるッ
坊『雌が、卵を抱いて温めると、それから孵へる。
孃『鶩は、卵を孵へすのが下手ですと、それですから、鷄の雌に抱かせて、孵へしてもらうの。あら坊やが威張ること、わたい鶩、嫌らひですわ。
『孃ちやんが、鶩でなければ構はん。猫も卵を孵へるのか知らん。さう〳〵獸は卵を生まない。けれども遠い濠洲といふ所へ居る、カモノハシ、ハリムグラといふ二種類は、獸でも卵を生んで、兒を孵へすさうです、まア鳥と獸の中間者であらうと思はれる
(10)親鳥は、子を可愛がるの?
坊『可愛がるとも、可愛がるとも、大可愛がるで、猫でも犬でも來ると、飛付いてしまう。いつか熊公は、雛子の傍へ行ッたら、親鳥は子をとられると思ッて、熊公の坊主頭へ跳ねついたから、熊公は膽を潰ぶし、泣くに泣れなかッた、親鳥は氣狂ひ見た樣なものだ。
『坊ちやん、坊ちやんたッて、熊か狼に逐ひかけられると、やさしいお母アさんか、屹度夢中になッて、熊や狼に向ふに違いない、親は此通り人間でも、鳥でも同じことである、何んと有難ではありませんか。世間は廣いが、誰が命をかけて、人を救ッてくれるものがありますか。夫故坊ちやん、能くお母さんのいふこときい

て、成るたけ我儘をしない方がよいのだ。所で鶩の親は、矢張り子を可愛がりますか。嬢ちやん、さアいふて御覧!!!

嬢『知りませんよ、鶩の子なんかは。

『嬢ちやん、先ッきから、鶩の方が、風向きがわるいから、大に不機嫌、怒ッちやいかんね。

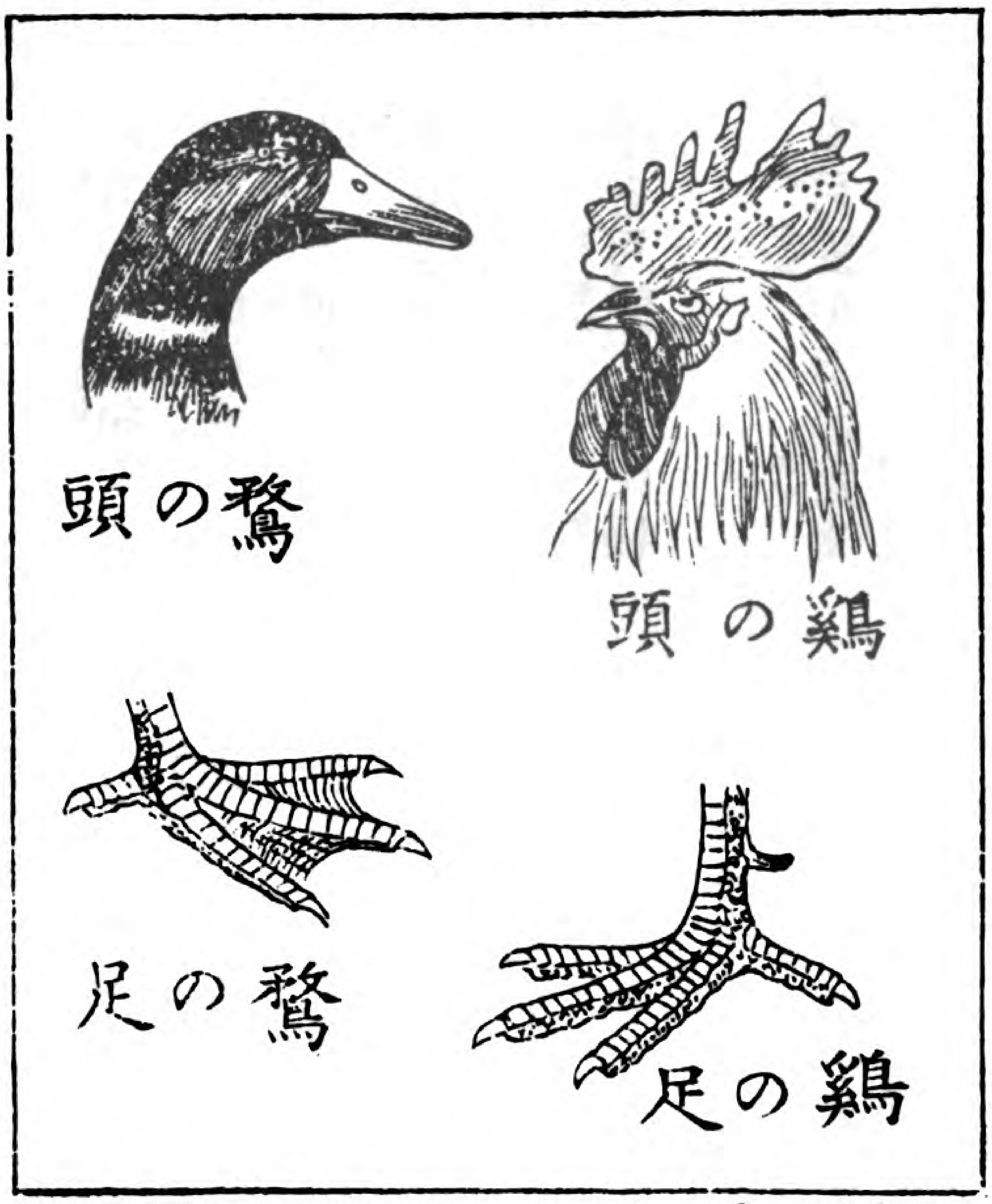
嬢『あら、いやな人。そんなことで、何んで怒るものですか、わたいほんとに知らないの、鶩が雛子を育てるのを。ですけれども、若し育てるとすれば、親ですもの、屹度子を可愛がるに極まッてますわ、

『さう〳〵親とあれば、必ず子を可愛がるに定まッてる、獅子でも、虎の様なものでも、若し自分の子を可愛がらないとすれば、それは全く動物界の番外ものである。

『もう宜しい、皆んな答へは能く出來た、優等優等嘘じやない、試驗なら優等は受け合いです。所で今坊ちやんと嬢ちやんのいふ通り、兩方とも人間に飼はれて居るが、體の構造は大部違ッてる、それは平常棲む場所と、食ふ餌の種類が同じでないからです。鶏は、陸で遊んでるから、脚は長くて太く、能く驅け走り、嘴は短くて厚く、麥や粟を拾ふに適してる、其上爪が丈夫で、土や芥の中へ埋まッてる、餌をさがすに便利です。堅い餌を拾ッても歯がないから、嚙み碎かれない、それゆへ時々砂を呑み込み、消化を補けてる。小便と糞は、絶へず出してるから、體の中には溜まッて居らない。雄は闘を好むから、脚の後に、距といふ長い棘が、鋭く突出てヽ、敵を悩ます武器となッてます。シヤモ、オケツコ、アンダルシヤン、ブラマ、コーチン、マレー、シヤンハイ、ランケイ、レグーホン、スパニシユ、ドルキン等、數へされ

ない程の種類があります。で雉山鷄だの野鷄だの、孔雀七面鳥だの、錦鷄だの、珠鷄鶉だのは、體の構造から、習性で能く鷄に似て居るから、是等の鳥を寄せて、雉鷄類と呼びます。で多くは地を掻き散らして、餌をもとめる癖があるから、一名掻撥類ともいはれてる。

鶩は、主に水の方へ遊んでるから。體は後前が尖ッてて、胴は太く、恰度船の形をしてる、故に泳ぐには、大そう樂であります。また趾には蹼があるから、それで水を掻くと、全で船の櫂の樣なものである、おまけに脚は凡の鳥より、ズット後の方にあるから、進むに都合がよい、其



代り陸へ上ッては、脚が體の眞中へない所へ、細くて弱いから、ヨタ〳〵して、から意氣地がない、犬にでも逐はれ、逃げる樣子は、誠にみじめである。樹の枝なんかへは、到底も止まッて居られない。けれども水面にあッては、船の走るが如く、頗る速かである、鷄などは、幾何年をとッても、水の中には入られない、若し誤つて落ちると、キヤキヤバタ〳〵あはて〳〵大騒ぎをする、所が鶩は、雛子でも自由自在に泳いでます。即ち棲む所によつて、體の造り方が違つてる、で鶩の嘴は廣くて、先端は感じが強く、泥の中などつゝき廻はり、餌をさがし、直き餌の善惡を見別け、善

いと思ふと、泥と一所に汲込み、さうして嘴の兩側には、細かい齒見た樣なものが澤山併んて丶、孃ちやんのいッた如く、其すきまから、泥は水と共に流れ出て、餌ばかし殘る。それを舌の作用で、喉の方へ呑み下してしまう。鶩は隨分大食で、喉へ支へる程喰ふさうです。臀の上に脂肪の出る所があるから、時々頸を後へ廻はし、其脂壺へ嘴を附け、それから體中の羽へ塗る、それゆへ水にぬれることが出來ない。鷄で雨の降る日は、矢張り嘴で、臀の上の脂肪を羽に塗りつける、けれども鶩よりは、少ないから、上面は少々ぬらされるのです。鶩の種類も澤山あるが、佳いのは亞米利加のカユガ、英國のアリス、佛蘭西のローウエン、支那の北京鶩などであります。親類はといへば、本家の鴨から、雁、鵠、鴻、蒼鷺、鴛鴦などで、專ら水の中へ接んで、暮してるから、遊水類といはれて居ります。孃ちやん坊ちやん、わかりましたか。さう!!!

『じや鷄と鶩。やもう解散だア。

『鶩が、わきた〳〵と還へるよ。

『吾等も一邊池の周圍を運動してから還へらう!!!

『やア〳〵鷄共が蜻蛉を逐かけてらア。

『あらア〳〵鶩が、こッちへ泳ぎ出して來た、三艘の船が揃ッて進む樣ですこと。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

孃『鶩や鶩や、佳い鶩!

鶩『ジャーク、ジャーク

孃『向ふにアヤメが見えるだらう。折つて來て下さい、ね……一枝でいゝから。

鶩『ジャーク、ジャーク。

孃『あら〳〵、鶩は速いこと、もう口にくはへてらア、首を曲げて、あア採れないこと。あア折れ

たア〳〵、嬉しいね……。難有う！

鷺『孃ちやん孃ちやん、奇麗な孃ちやん！

孃『何んじやいな。

鷺『舞ひて下さい、此花もッて。

孃『わたし、能く出來ないの、何んでもいゝかい。

鷺『ジャーク、ジャーク。

ではと孃ちやんがアヤメを持ち、長い袖と、廣い袴を、風に翻へしながら、しとやかに一舞ひ、まひて見せたア。で坊ちやんと孃ちやんが、アヤメの花の構造について、說明を請ふから、二人を左右にならべ、池の邊を步きながら、懇に敎へてやッた。二人は大嬉び、新智識を得たといふ樣な顏付で。坊『難有う。今日は面白かッたア』

孃『わたい、ほんとに今日は樂しくて、こんどお出でなさッたら、矢張り敎へて下さいな』

（さよなら）

挿花の話

小畑いく子

太藺　木賊

藺は燈心草科の宿根草でありまして古へより疊表に用ひ、又現時では花莚として輸出品の一となりて居りますから、栽培方も益々盛になりて居ります、然し是挿花の方に用ひますのは、太藺と申して、疊表に用るのとはまた別種でありて、太く且つ長く生育致すもので、前回の菖蒲、燕子花などゝ同じく水邊の草でありますから、少し大きやかなる砂鉢などに挿しますと、如何にも漣漪よする汀の趣が見えて、夏期の挿花として至極すが〳〵しきものであります、其挿方に至りましては普通の草木と異りまして、葉もなく枝もなく只直なる一條のものでありますから、大に勝手の違

ふものであります、斯樣な類を總て條物といひならはしてあります。

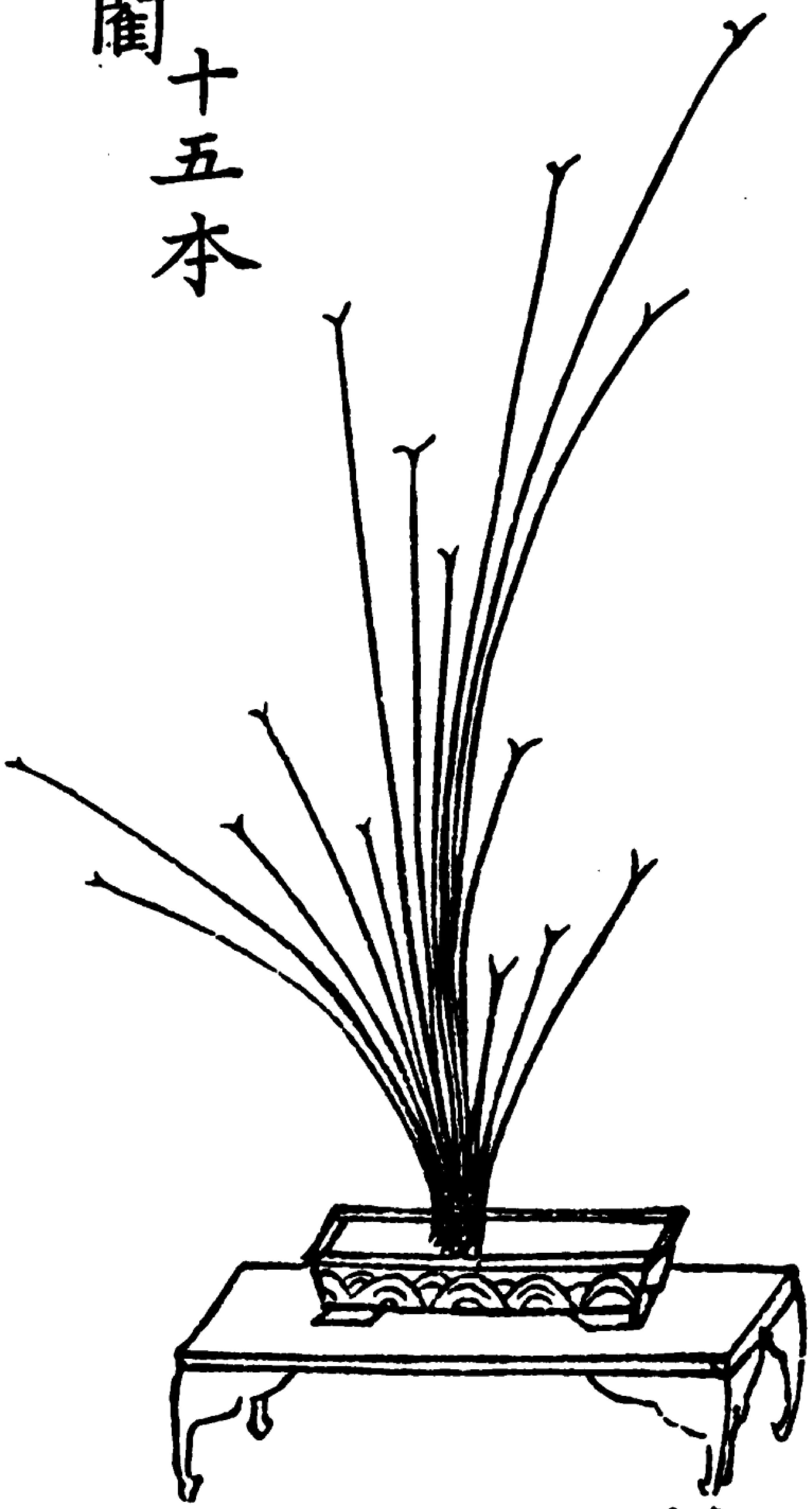
挿方は一本々々宛挿すのが挿花の理想よりするも一番宜しく、又熟練なれば出來ぬ事でもありませぬが、何を申ても細長き條のものでありますから、一本宛挿します事は、初學者には困難でありますから、茲に其便法を述べませう。

先づ十五本位挿すものならば、「一」に六本、「二」に五本、「三」に四本。位の割合に分ち、まづ「一」の六本を一本づゝ適當なる所には腰をいれ、其長短を都合よくはかり、紙よりか藁の如きものにて一束につかねて、然る後に根を切り揃へ、「二」「三」と同樣にして、先づ「二」の束「三」の束「一」の束の順に挿し、終りて紐を切り解くのでありますが、茲に注意すべきは例の配木の事であります、配木の股があまり廣ければ、根本が固まらぬために、糸紐を切り去ると共に、折角整然と立ちて居た各條が頽れる恐れがありますから、殊に適當の大さのを撰ぶ必要があります、それと又「一」「二」「三」の各束の長短に注意せぬと、同じ長さのものが幾本も出來て醜きものです。

如斯條物では、「一」は普通より短き事を要します、假令ば「一」の最長が十なれば、「二」の最長は六ぐらゐの比を宜しとします、かやうにした上で其條と條とのもつれの見えぬやうに、形を直すのでありますが、何分にも數の多き爲め、ともすると前に述べました如く、同じ長さの出來るものであります、他の草木と異りて、たとへ長ければとて根の方ではいくら切りても宜しきが、頭の端を切る事が出來ませぬから、最初に其長短を、よくよく注意して揃へて置ぬと、又初より束ね直さねばなりませぬ。

又これを矯めますにも、少しづゝ念入りにしては居ては却てよろしくありませぬ、大體を定め置きて其の一定の矯め場所より勢よく、すごく事が肝要であります、さすれば、存外矯めのきくものであります、或る流派では一直線に箒の如く立て、周圍に根本を切りたる塵にて倒れぬ樣に堅めてありますが、誠に拙く見えます、若し配木が大きくて根本しまらぬ時は、太藺の頭の端を短く切りて挿す方が宜しい、さすれば水面を漸く出でたる若芽の樣に却て趣があるかと思はれますから、御注意までに申し添へて置きます。

太藺　十五本

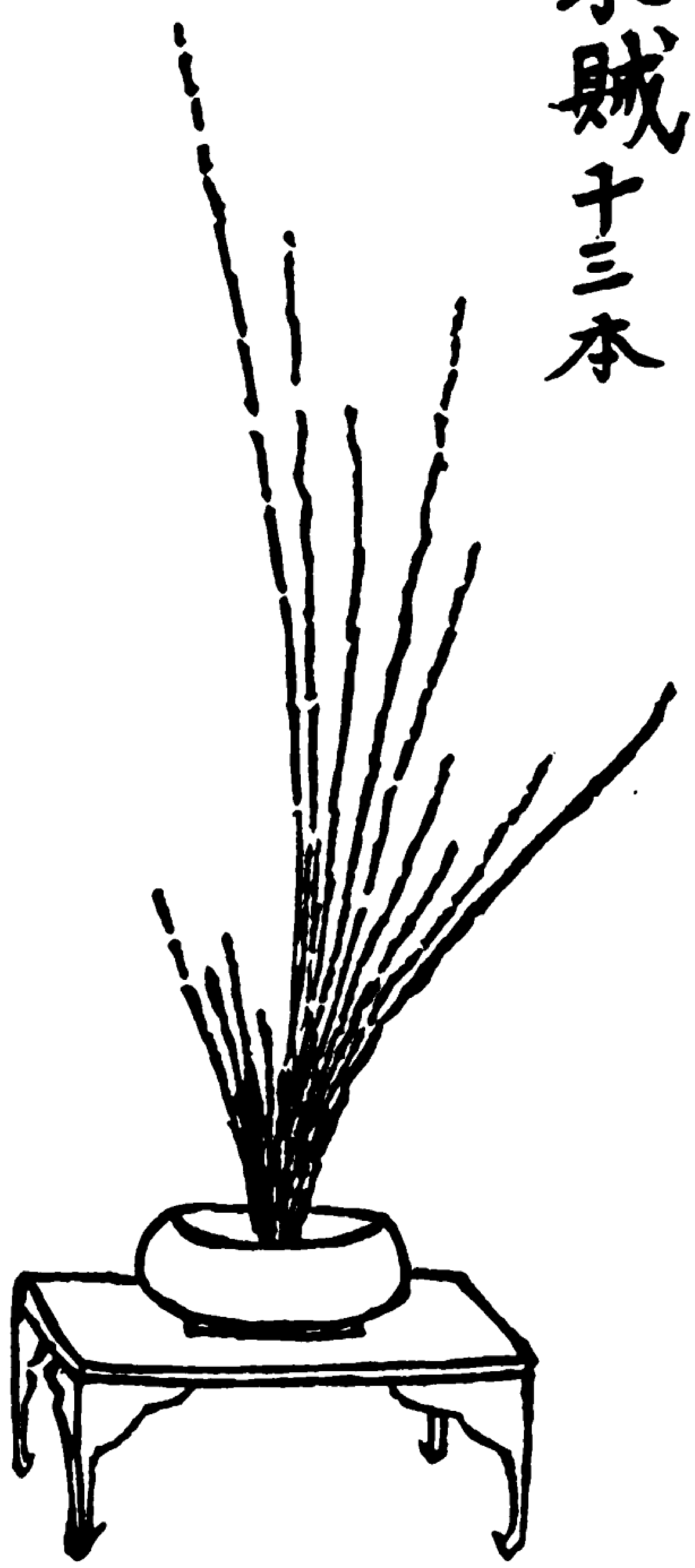


木賊は、木工の磨物に用ひましてよく木を研ぎおろしますから、自然名付けられたるものと思はれます、是は「とくさ刈るその原山の木の間よりみがゝれ出づる秋の夜の月」と古歌にもある如く、季節は秋のものでありますが、是も條物の一つで挿方に於きましては、太藺とかはる事がありませぬから、玆に述べる事を致したのであります。

是は大體の挿方に置きましては太藺と同じでありますが、太藺の如く長くない、そして節が有りて、

中が空虚で矯めがきゝ難きものであります、そこで是を矯めますに、節の處を強く折る樣にすれば幾分かは自由のきくものであります、然し矯められると曰ふより、折れた樣になりますから、あまり面白くありませぬ、寧ろ自然に曲りたるを擇ぶ方が宜しい。

木賊十三本



挿方は簇生するものでありますから、自然の通りになるべくサラリと挿さねばなりませぬ、又木賊には節毎に曲折の甚しきものがありますが、左樣なものは誠にこちたく醜きもので、殊に見切を生じ易きものでありますから、縱令自然の曲りを擇ぶからと申しても、決して左樣なのを擇びましてはなりませぬ、自然に彎曲したのでなければなりませぬ。

全體太藺、木賊は同じ樣でも、一は浮草、水鳥のよすがとも見えて夏に限りて、涼しげに水面を拔き出でゝ居りますが、一は春夏秋冬枯るゝ事なく、蕭條たる山野に散りしく木の葉に、埋もれで勢するどく生ひ出でたるさまは、自ら似て否なるものでありますから、其心を忘れず挿すやうに志たいものであります。

春花さかざれば秋實らず　英國俚諺

家庭

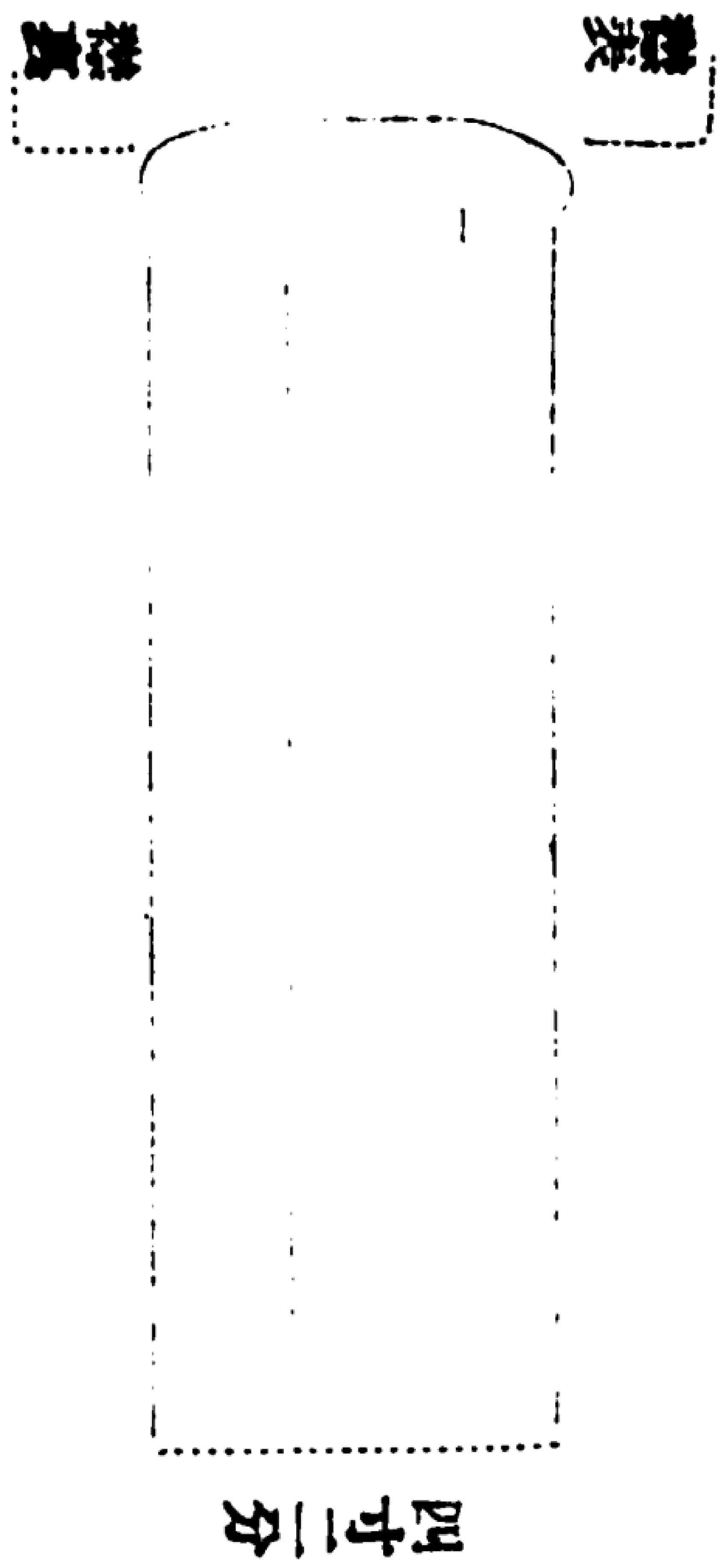
裁縫

あや子

色彩の配合といふ事は、いづれの美術の上に於ても最も大切なるものでありますが、殊に婦人は此點に於て充分注意を要する場合が多きものであります、衣服の撰定方によりて其人の性質の如何をも略推測せらるゝと申す樣なものでありまして、縞柄、模樣、色どりなどゝ申すものは、其材料即ち地質の如何に關せず、常に必要なる物であります、時の流行もあるものではありますが、いかに流行の色なればとて、其配合宜しきを得ざれば却て見苦しくなります、假令ば兩三年前より、一時は非常の勢を示しました、流行の褐色などはなる程よい色で昔は薄納戸とも申しましたので上品な色でありますから、何物に配合してもあまり惡からぬ物でありますから、誰も〳〵裾廻しとしては必ず此色を用ひる筈の如くなりて居りました然しながらいかに流行の色とはいへ、表の色に釣り合はぬ時は却て全體をあしさまにして仕舞ますたとへば小紋などにしても、仙齊や鼠色にはよろしくない、やはり黒地鼠がへしといへるか、或は大島紬の如き、統て色の濃き方に用ひて一しは榮へあるものであります、兩三年前までは總てが薄色〳〵といふ流行でありましたが、彼の褐色流行が導火線となりて、流行色に大なる變動をきたしました、現今では一般に濃き色を好みまして、薄藤色などよりも菫色、牡丹色或は納戸、栗皮茶などを多く用ひます。

此色の配合は單に表のみに留りませぬ、上着と下着、着物と羽織、或は着物と帶とか其色の調和が中〳〵必要なものであります。

羽織は相かはらず黒の三所紋、五所紋でありますが、男女とも丈は長きを愛でます、然し紋付ものはあまり長きに失しますとよろしくない、普通男用にて二尺五寸乃至八寸迄、女用にて二尺四寸乃至六寸五分であります、絣、縞の類は充分長きがよろし。

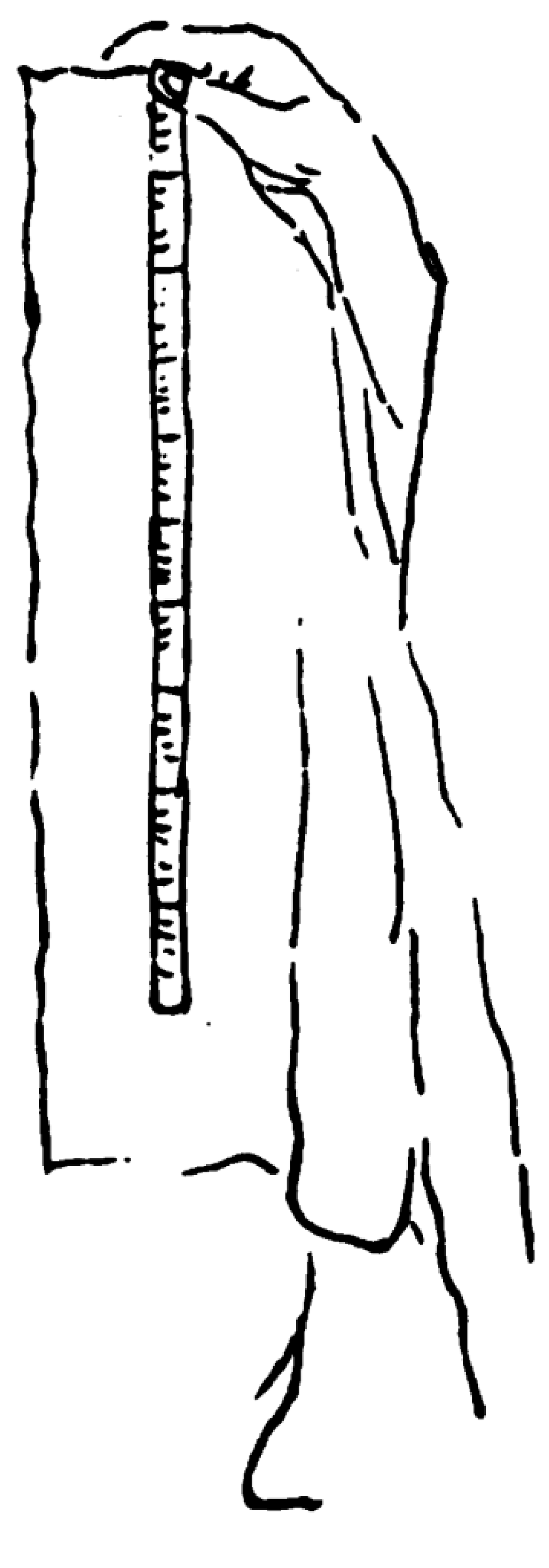


袖羽織の仕立方は襟付けに袋縫と、絎襟との二樣あります、木綿又は非常に地厚き品にあらざる限は、袋縫の方がよろし、其袋縫にせんとするには先づヘラ印を付けて後表裏を合はせ、背筋を渡し

次に前の脇入をつけ、次に襟付けの下縫をして乳を付け、豫め圖の如く折り置ける襟の表を身の裏に襟の裏を身の表にと、即ち襟巾だけの中に前身をたゝみ込みて、一針ぬきに縫ひ、襟先を正しく折りて、動かぬやうとぢ付け、襟あけの處よりひき出すのであります。夫より後の脇入を付け、袖を付けて終るのでありますから、大に手數も省け、仕立上げもよく、且つ着ばへが致します、又間には上に着るものは肩行を長くするがよいなどと申して、羽織の行は着物より一分位は必ず長くする人もありますが、大なる素人考と申すものであります羽織は所謂はふり物で、帶紐の拘束がありませぬから同じ行にして置きましても、長く出る位のものでありますから、決して寸法を初より長く仕立る樣な事をしてはなりませぬ、やはり上着同樣にして置くがよろし然し袖口は着物より

二分大く、假令ば着物が七寸五分なれば、羽織の袖口は七寸七分に致して、重ね着たる時、完全に揃ふものであります、地質は縮緬紋羽二重、七子織などを重に用ひますが、婦人用はやはり縮緬が占めて居るやうであります、然し老人は女にても羽二重、七子などの如き少しは硬きもの丶方がよろしい。

茲に縮緬を仕立るに、第一困難なるは、其肩行の調べであります、是を等閑に致すと、自然「袋」の入るをまぬかれませぬ、そこで袷物の時は裏地の方に正しき寸法を定め置きて、表は縫ひか丶る前に假に針にてとめ、裏地と並行させて、其餘れるだけをひかへて縫ふ事とするのでありますから大した間違ひはありませぬ、茲に最注意せねばならぬのは、縮緬の單羽織であります、心なく寸法通りに仕立まして、若し下に風通或は糸織の如き少しも伸縮なき衣類を着しますると、羽織の行は五分乃至八分も伸びて、恰も同人の衣類とは見えぬやうなる、滑稽を演ずる事があります、それは全く初めの調べの届かぬ爲めであります、さればとて最初より凡そ幾分ひかへめといふ事は出來ませぬ、何故かなれば、其縮緬の地質によるからであります、地質のよろしきだけ伸る事も多くなるものであります、そこでそれを調べんには先づ幅八寸にせんと思はゞ下に置きて、假りに八寸の處に印を付し置き、而して圖の如く尺を添へて提げ見る時は必ず尺面八寸の處より幾分か長く垂る



るものであります、其剩餘の寸法だけをひかへて仕立てる時は、たとへ下に置きて行短きやうなりとも着したる上は、必ずよき程になるものであります、又女物には袖付の關係があります、羽織の袖付は着物よりは二三分多くする方がよろしい、それは同じ袖幅ながら恰も幅狹き樣、下の袖の見ゆるものであります、それを防ぐ爲めであります

毎夜、寢に入らば、先づ當日行ひたる所業の善しきしのを反省せよ、曰く今日予は何處に行きしや、曰く如何なる爲さゞるべからざる事を當然に爲せしや、曰く、如何なる善事を爲すべきことを怠りしやと、而して之を數へ畢りたるの後、惡しき事は勉めて之を除き、善き事は喜んで之を果れよ

ピサゴラス



松影波光（上）

文學士　濱田紅於

渡波より松島に至るまで、約六里の行程を行きつくせば、蒼然たる暮色、松影波光の間より來りて茜さす空のけしきおもしろし、逆旅にのぼりて、一浴しおはれば、身輕く體胖なること〻ちして、終日の勞苦も忘れはてつ〻夕餐の膳に一壺の旨酒を

命じて、肋骨先生と相獻酬す、諸生來りて曰く、豫期の旅程、今夕を最終とす、茶話會を開かばいかにと、對へて曰く善哉々々。

松島は宮城郡の東北の海岸にありて、前に松島灣を控ゆ、灣は南千賀の浦を極め、北石磯崎を限り、灣内無數の島嶼碁布して、翠松蒼波相映じ、眺望の明眉なる、日本三景の名にそむかず、奥羽觀蹟聞考誌に、寔天下之絶景、古今之勝迹、可謂扶桑之一滄洲也と云へり、誇張の嫌なきにあらざれど、又以て一日遊觀の値なしとなさず、さればにやあまさがる鄙には在れど、古よりその名遠く都にきこえて、歌人騷客の吟咏甚だ多し、又新井白石の松島記などもあれば、その景致を今更にものせんも、おこがましきことぞかし、若し夫れ一日舟を僦うて、彼方此方にたゝよはゞ、分析的に風景の美を賞することを得む、又側に聳てる富山の頂より下瞰すれば、その風致の妙を綜合的に覽ることを得む、こゝに松島八景なるものあり、これをかかげて叙景に代へむ、

松島秋月

松島十分秋、留連皎月洲、金波暉二桂楫一、玉水曜二蘭舟一、啼斷猿崖白、眠驚蟲不愁、歸來人不レ寢、猶上庾南樓、

雄島夕照

雄島一洲秋、洗々返照幽、斜餘江水寂、幾射海雲愁、柳縣漁晉噪、松村暮磬浮、黄昏人不レ見、沙岸對二閑鷗一、

梅浦早春

梅浦一枝春、早櫻二深雪津一、倚レ磯疎影瘦、含レ暖暗香新、月照羅浮夢、花餘隴滯眞、江橋多落蕊、漁笛苦二騷人一、

霞浦歸雁

江南歸雁春、燦々彩霞新、風浦殘聲遠、煙汀數旗屯、客懷二鄉里信一、燕背二遝雲外一、北渺平沙岸、向レ北別二香蘋一、

瑞巖曉鐘

疎鐘殘月寺、霜氣滿二江天一、淵浣南溟外、紆餘東海邊、鶴林添レ露響、僧窟與レ禪圓、菱市三竿日、來漁驚二釣鮮一、

竹浦夜雨

一夜千竿雨、砂汀蕭颯寒、漁燈落二短烟一、釣笛促二凄酸一、松咽二湘琴怨一、蘭鳴二楚佩難一、曉光烟竹浦、餘滴瀝二琅玕一、

清少納言と紫式部

和軒梅澤精一著

四六判紙數三百頁
定價三十五錢
郵税六錢

二六新聞　清少納言の人となりは或る點まで明快に詳傳されたれど紫式部は尙ほ霞を隔つるが如し好で古人を研究し最も熱心に古閨秀を研究する著者に於ても感情を暴露せざる紫式部を明快に詳傳し得ざるは是非なき次第なり

國民新聞　曰く枕草子、枕草子の文章、清少納言の和歌、紫式部の理想を論ず、小說としての源氏物語、諸家の源語論を評す、以つて本書の性質を略ぼ察するを得べし。文辭の鍵ならんと欲して、時に枝葉に走るなきにあらざれども、又た其所論に首肯し難き節なきにあらざれども著者が淸紫二姬を研究したるの深かりしは多とすべし。

日出新聞　是れ梅澤利軒氏が貞淑謙讓溫乎玉の如き紫式部と才氣煥發英烈の如き淸少納言とを對照批判し延いて王朝時代の國文に及ばんとして枕草紙と源語を反詳論したるものなり引證該博筆鋒犀利加ふるに著者が這種のことに專念研鑽せし餘に出でたるものなれば今の所謂片々たる著述ものとは大に其趣を異にするものあり

成功雜誌　二女流の詩を捕へ來つて其人物と作物を縱橫に批判したる所の議論最も妥當にして眞摯苦者の苦心充分に現はれたり

發兌元　東京市築地二丁目　國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

出版業空前之光榮



定價廿五錢◎郵稅四錢◎特製卅五錢

畏多くも本書には皇后陛下上御肖像を精巧なるコロタイプ寫眞版にて奉寫したれは坊間に有觸たるものと類を異にし髣髴御眞影を拜するか如く加之土方伯御珍藏の御眞筆(竪一尺二寸横一尺七尺)を同伯の許を得て拜寫し皇后陛下菅公の御詠を土方伯に拜寫を乞ひ其卷頭に奉戴し又華族女學校學監下田歌子女史の序文を附し而して表紙の(坤德)の二字は前皇太后宮太夫杉孫七郎子の揮毫を乞たるもの眞に弊社の光榮出版界空前の盛事なり

本書元篤志者間にのみ分つ目的なりしか發行の事を聞て頒布を希望するもの相踵くを以て遂に一般に賣捌く事となしぬ

嗚呼坤德の廣大無邊なる今更ら申も畏こし四千萬同胞本書を讀んて誰か奉公の心を激勵せさらんや

發行所　東京京橋區築地二丁目　株式會社國光社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

大町文學士著

常磐御前

江南の橘は江北の枳となるとかや、平家の庭に移され、更に大蔵卿の園に植ゑられたる源氏の名花は、伏見の雪に千行萬行の血涙を呑みて遂に他家の枳となり了れるもその苦節は鐵枴山頭に再び春風を迎へ、壇浦の烟波に凱歌を揚げて目出度初志にかゆるに及びぬ。著者の靈筆此間の消息を寫して餘蘊なし。讀誦一番、當年を夢みるの概ありて興味津々禁ずべからざるものあるなり

國府犀東著

靜御前

花より明くる三吉野の萬樹の櫻に香魂を留め、後人をして長く其の貞操義烈に泣かしめたる靜御前は即ち是なり。堀河の夜襲何ぞ無殘なる。大物浦の涙風何ぞ暴虐なる。山中の白雪は生別離の哀を埋むること深く、神殿の舞袖は想夫戀の怨を寄せて長し。婀娜幽婉にして而かも意氣大丈夫を凌ぐの概ある古美人の面影は犀東氏の筆に依りて、例の美麗なる袖珍冊の上に活躍し、讀者をして、身其境に臨み、其人に接し、其聲を聞くの思あらしむ

長田偶得著

顏世御前

鹽冶高貞の夫人顏世御前容姿絶麗、不幸にして兇暴なる東夷中最も嬌縱の聞ゆある高師直に戀慕せられ、其意に從はんか小夜衣の重きを如何にせむ之に從はざらんか喉死の一途あるのみ、遂に鮮血を雪の肌に灑ぎて武庫川邊の朝霜と消は失せぬ、偶得子が此著一位貞烈の美人を寫して筆泣き靈哭するの妙あり、東洋流の倫理將に堙びんとして西洋流の倫理未だ起らず女子の節操を輕視するの傾向ある今日是實に對症の靈藥と謂ふを得べし

四六判三切洋裝美本　口繪挿入　各定價拾三錢　郵税二錢

小林文學士

勾當内侍

宮禁秋涼しく夜闌なる時、美姫半簾を捲き、月に對して玉琴を彈ずれば名將千草の露を踏み、馬を佇めて戀に泣く、是何等の風流ぞ。而して一たび天の憐を受けて、鳳鸞の契なるに及んでや、即ち亂離の厄に遭ひて、長く恨を北國の青山に留む。又何等の悲慘ぞ忠臣の魂、名媛の怨籠りて此の小册子の中に在り、孤燈を挑みて之を讀む、誰か又一滴の涙なきを得んや。

濱田文學士

袈裟御前

白刃を揮て人の妻に迫る何等の兇暴ぞ、紅粧を凝して良人と飲む何等の從容ぞ、綠髮を濡して夫の死に代る何等の貞烈ぞ、遠藤武者盛遠の如きは實に天魔破旬の變化にして、袈裟御前に至ては惟ふに觀世音菩薩が極重惡人を化度する爲め假りに婦女の身を現し給へるものにあらずや、濱田文學士が神變不測の靈筆は此間の眞相を叙寫し、忽にして鬼哭啾啾たり、忽にして天華繽紛たり讀者をして踊躍歡喜せしむ

株式會社

東京國光社發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

彩色摺表紙大和綴菊版美本全壹冊定價金廿五錢郵稅金六錢

第十四版出來

女子の本分

細川十州先生序文

三輪田眞佐子刀自著

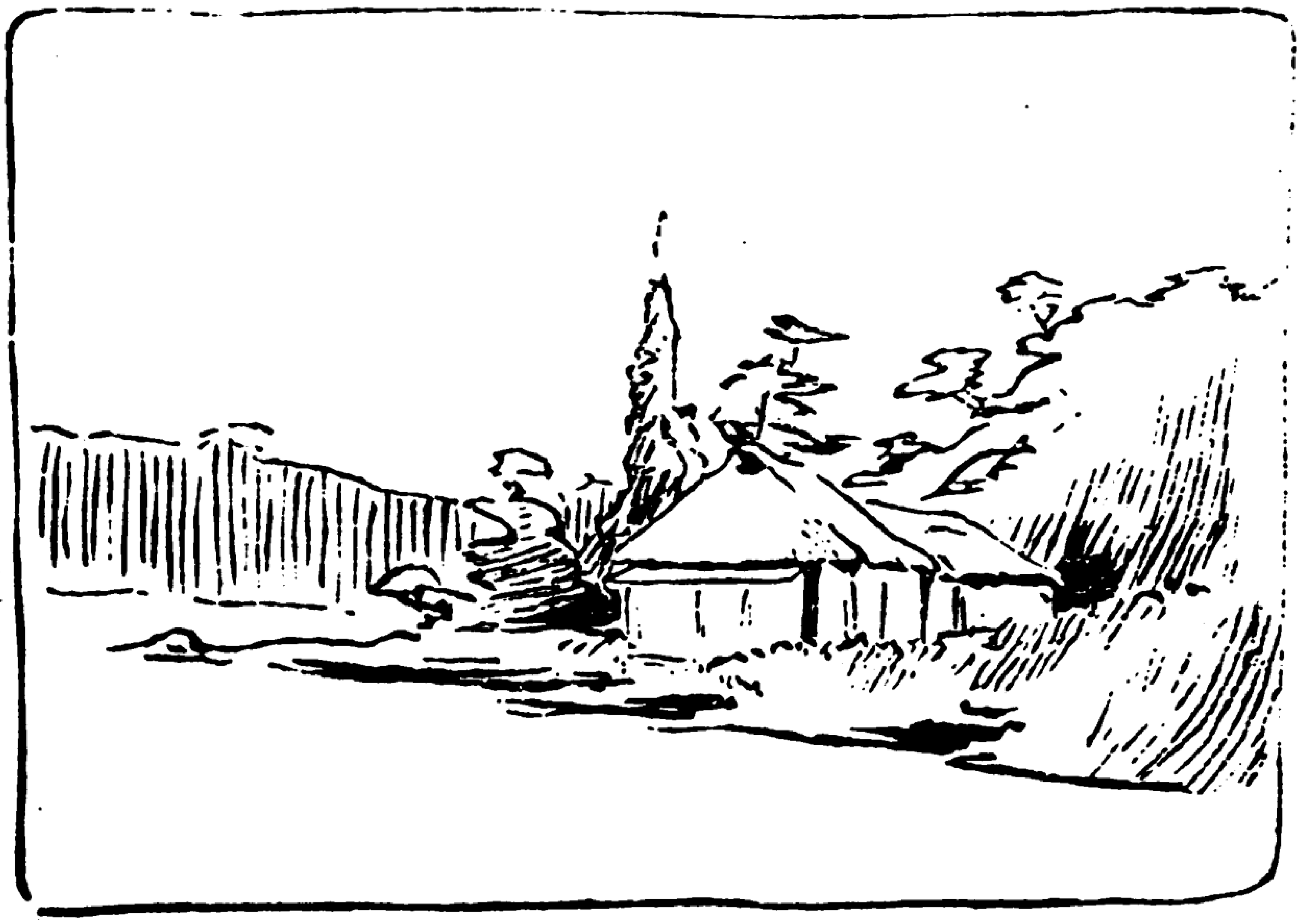
雙龍暮烟

秋江殘雨裡、雙龍暮烟斂、慘淡籠二通岸一、濛漫罩二石磯一、曳レ寒松島暝、掠レ水葦洲晞、浮翠碧溟外、宿砂功未レ非、

江縣殘花

獨愁三月暮一、跋涉惑二西東一、春盡吳門雨、花飛楚岸風、日添二汀草綠一、時減二落桃紅一、江縣烟霞裏、啼鶯處々空、

松島の名稱の起原を說くものは曰く、聖德太子達磨を待ちたまひし地なれば、因て古へ待島と書けり、附會もこゝに至りて極れり、達磨は支那南北朝梁武帝中大通二年、魏嵩山少林寺に寂せり、即ち我邦繼體天皇二十三年に當り、佛敎未だ我邦に渡來せず、聖德太子は未だ生誕せられざる時なり、此二者何ぞ相見ると云はむや、是れ舊事紀和歌本紀に載する所太子の作、松島哉、御島者不見止、日標方之、月之都之、外千尋者と牽會せしならん、惟ふに此名稱は灣內の島嶼悉く松樹茂りて、千歲の色に榮ゆるを以て、しかく命せしなるべし。



二十二日六時、閨を出でゝ窓を開けば、うらゝかなる天氣、朝日花やかに千松島の翠を照せり、汀には已に數多の健兒群がりて、よばひをたけび、走りののしる、入時出發の豫定なれば、ひとり欄に凭りて島のたゝずまひ、海のけしきをまもりて、徐ろに、詩想を養ふ、食後装をおさめてそこと

もなしにすゞろありきして、遂に瑞巖寺の境內に入る、松杉の木立いと年ふりて、轉た太古の靜寂をおもはしむ、伽藍宏壯にして貞山公が富强の昔を偲ばしむ、松島瑞巖圓福禪寺碑あり、はゞその由來を錄すを以て、左にこれを轉載せむ、

明治九年六月、車駕巡幸東北、駐蹕松島瑞巖圓福寺、右大臣岩倉具視、召寺僧眞宗太陽、問其緣起沿革、對曰、按舊記、此寺舊稱松島寺、承和中（註云朱雀大皇御宇）天台宗僧慈覺所創、歷四百餘年、鎌倉執權北條時頼、逐台徒、使僧法身住持、更名圓福寺、爲臨濟開祖、又三百年、仙臺藩主伊達政宗、拓其境而改造之、冒以瑞巖二字、及藩廢、寺隨衰、今

至尊臨降、前古所未有、梵宇從此興矣、右大臣具視奏之、既而

車駕還東京、賜內庫金壹千圓、以爲修葺資、縣令松平正直、又承順

聖意、以督工事、於是管內士民爭施淨財、寺觀復新矣、太陽、以松島稚松數十本、送獻東京、併上詩一首、以謝恩、

復賜帛一疋、太陽深感寵恩、欲勒之石以垂永遠、以孫七郎當時扈從鸞駕親見其事、將請之、夫承和迄今千有餘年、其間郡國治亂興亡跡之相隨於史冊、而求常時豪傑餘業遺趾、無復存者、獨此寺雖時有盛衰、靈境具存、法燈永輝、居然爲舊物、況地爲名區、勝擅海內、

聖情眷注良有以也、然非上德聖理化超古、安能見恩澤及物之如此哉、吾聞政宗改造此寺、特飾一室、極其華麗、人不知其故、遂莫敢居者、至是泰以爲御座、嗚呼政宗之擧、若逆知有今日者、何其奇也、然則此寺邀聖眷非偶然也、

さればこの寺承和の建立よりこゝに至るまで、約百年を經たり、東北有數の法境と稱せらるゝ、蓋し故なきにあらず、然れど政宗が今日あるを豫想して、御座を營みしと云ふが如きは、甚しき獨斷的の妄說と云はざるを得ず、杉の林に沿ひ、篁の森をうがちて、賤がふせやのうらさびしき景色をながめつゝ、五大堂の側に出づ、大槻盤溪が五大堂觀日出の詩に曰く、

一島纔過一島長、双橋潟處履秋霜、曈々日上金華外、映出松間五大堂、

こはまさにその形勢をうつすものなり、双橋を渡りつくせば一宇の祠あり、即ち五大堂なり、柱に榜して曰く、厨司堂は延歴廿年征夷大將軍坂上田村麿の建設する所、慶長五年中納言伊達政宗講堂を建立すと、神さびし堂宇、苔むしたる老松の間に立ち、底ひもしらぬわだつ海に嘯けば、精神遠く世外に飛んで、しばしうき世の苦しみを忘れぬ、やがて又双橋を歸る、橋の袂に幾基の石碑あり、和歌俳句を刻す、中に士朗の句あり、

日くれぬ、ひとしけれども秋の暮

秋晩羈旅の情誰しも同じものなりけり、一度旅舍にかへり、再び瑞巖寺に向ふ、（未完）

花菖蒲の話

橘村生

スラリと行儀よく列んで座つた、四人のいづれも愛らしいのが、莞爾と顔ばかり見合して、嬉しさうに微笑みながら暫時は無言である。

恩師某の令嬢を除いて、他の三人は莊園に住ふものゝ女の子。お下げ、稚子髷、蝶々、リボンもあればたけながもある。無邪氣な笑ひ聲も聞えそめた。

一わたり小供らしい話がすむと、はや表へ出やうと云ふ、それならば自分もと四人の手を取つて、池のある莊園を、此處や彼處と歩き廻るうち、リボン子は早くも一本の花菖蒲を見付けて、若葉の蔭から小手まねきする、と他の三人もばた〳〵走けて行く後について、自分も其處へいつて見ると、成程今朝咲たかと思ふばかり、露も滴る瑠璃の一もと、乙女が五人になつたかと見えた。

そこで自分は此花のお話をすることになつた、ぶら〳〵と築山の邊り、松の下かげを辿りつゝ、そ

の物語を續けるのである。

『昔のむかし、何る處の野に、いろ〳〵の花が澤山より集まつて『虹の祭』といふものを開きました。其時は一年の大祭日でありまするから、水仙だの蘭だの、菫だの蓮花だの、タンポヽだの菜の花だのが、皆思ひ〳〵麗はしい衣服を着飾つて、お供には是れ又美くしい蝶々を引連れて、東から西から、どんどん〳〵寄り集まつて參ります、今迄は四方に散らばつて居りましたから、唯燦然と眼を射るばかりでありましたが、繼て宴會が始まつて一同ズラリと並んだうちに、青き花が三片の鳶尾を垂れ、黄色がゝつた飾を頭へさした一人が、特に目立て見え渡りました。又其色と云へば、夕べの空をもしのがん青藍色、姿は艶かにうるはしいので、他の花はみな色を失ふやうでありました。が不思議なるには、誰もこの貴婦人の名を知つたものがありませぬ。すると其内の人々が、『皆様能く御覧なさい、彼の人の衣の色は、丁度虹のやうに美はしいではありませんか』と云ひ了はらぬに、沛然と雨降りいでやがて、天の一方に大きな虹が現はれました。すると暖かな雨をあびた鳶尾の花は一人美はしく見えたので、集まつてゐる花どもは、異



口同音に、『虹の使者！虹の使者』。と呼んださうで、夫からは此花を以て使者といふことを意味させるさうで御座います。

皆大人しく聴て居つたから、『サア今度は花あやめの歌をうたつて上げますよ』。と聲を張りあげて。

あなうるはしき花あやめ
　流れしづけき川添に
里を離れし池の面に
　せきて水をば送るなる
　　牧場の中の小流に
笑ふかなれは水車の
　かけひの水にせかれつゝ
せわしくめぐる音をきゝ
　つむと織機とのやすみなく
　　歌ふ音色をよろこびて
色さへにほふ紫や
　たのしみあれと生れきて
勞めはげます遊べるも
　野邊も水際も汝あれば
　　よろこばしくぞ見ゆるなる
風徐ろに吹きくれば
　高くあかれる汝が旗の
下にと集ふ草の藺は
　日の大治權のとゝかざる
　　汝が領地の衞士にして
づばさかゞやく蜻蛉は
　汝が車の從者なれや
ものゝ具つけし日光は
　甲冑はきて立りとて

樹々の木かげを翳るなり

虹とも見ゆる汝が花は
　よろこびの中に美はしき
黄金の笏を手にとりて
　青き翼をうちひろぐる
　　汝は大神の使なり

あなうるはしき花菖蒲
　花吹きにほふ小流は
汝をしたひて讃ふらむ
　あはれゆかしき虹の花
花さき匂へとこしへに
　地ぞ美はれかれとうたひつゝ

四五人は何時しか池の汀に出て樂しさうに歌ひはやして居るので、自分は又もや花菖蒲の話を續ける。「貴嬢方は、菖蒲と、燕子花と、花菖蒲と、みんな同じものだと思ひますか」と聞くと。「同じよ」「イヽエ違ふのよ」と暫らく爭つて居つたが、極しがつかないので自分に質問するので、「夫ではお話しゝますが、今云つたアヤメも、カキツも、ハナシヤウブも、實は皆別種で、今それを區別すると。

花瓣雌蕊より長きは　アヤメ
花瓣雌蕊よ｛葉に中肋狀の脈無は　カキツバタ
り短かく且｛葉に中肋狀の脈有は　ハナシヤウブ

で、水邊に多く植えられてある花菖蒲は、燕子花の變種したものです、是は此鳶尾科の內、最も大きな美くしい花です、夫でまづ花の形狀は、小さな三片と、大きな三片より成り、小さな簿の方は雄雌蕊を包んで風雨の害を避けるやうに大きな瓣の方は昆虫を呼んで花粉の媒介をさせるやうに出

來て居ります葉は刄刀劍を立たやうに、出來てゐるのは、盆を覆すやうな大雨にも、決して折れる



害の無いやうに仕掛けたので、此樣な葉の脈（養分の通ふ所）を並行脈と申します。（櫻、ツヽジの葉は網狀脈）

五月五日に用ゆるシャウブは花が咲いてもこれとは違ひます、是等の區別は昔より亂れて居つて、特に歌人は。

こやの池の菖蒲にまじる杜若花
花ゆえ人に知られぬるかな　　後鳥羽院

はいゝが。

池ふかみ水草ながらに引手にも
あやめは長き根にぞわかるゝ　　東滿

などゝ詠みますから、一寸解し難い時がありますヽ又花の似よつたものが、シャガ、イチハツ、ネヂアヤメ、コカキツバタな

ど有ますから、小供などは往々間違ふことがあります。

我國では此花を飾りに用ゆるとは聞きませんが、外國では一般に此花の彫刻、繪畫等を以て、殿堂や室内の飾りに用ゆるさうで、特にフランスでは此花を以て王室の御紋章として、假令ば我國の菊の如くに用ゐられました、夫から獨逸に參ります と、屋根の上に此花を植えとくさうで、我國でも程ケ谷あたりの民家に、鳶尾の植えてあるのを見ますが、これは風の爲め、やねの茅を吹き拂はれない爲めださうです』。

理科の先生、或る書籍で讀み覺えて居る奴を、二つ三つ講釋する、中には飾り氣もなく大きな欠伸をする子も見えたので、此罪過を償ふ爲め、後ろの芝山へ促し立て、蓮花ダンポヽの中へ導いた。

偶にして山へ來た都乙女ではないが、小供のとて何がなよき獲物もやと、珍らしげな眼をつけて、見る每に搜してゐる。

『アラ幸ちやん呼んでゝよ』

『お飯ですつて、行きませう』。

先生獨り山へ殘されて了つた。

（了）

我觀小言

天風生

◎社會の單位は何にであるか、個人なりとする人もあるが、最近の社會學者は、家族なりといふ科學上の斷定に一致してきた、然らば、最も有力なる社會團體、即ち國家は最も强固なる家族團體の上に建造せられねばならぬのは、明白なる道理と云はねばならぬ。

◎我帝國が、最近二三十年間に、めき〳〵として、世界優勝の舞臺に頭を擡げ出したのは、之れ全く

團體が强固なる地盤の上に建てられてゐるからである、其の强固なる地盤は、家族組織であッて、其家族組織は、國家組織にも應用され、此に、牢固なる、健全なる慣習によりて、殆んど自然法の如きものと成つた。

◎此點に於て、私は斷言する、日本の家族組織は世界に於て、最も完全なる形式を有するものである、兎ても、歐洲諸國の此等が我が足下にも、立つ事が出來ぬと、然し、實質は、教育其他の原因によりて變遷する、之れは注意して貰はねばならぬ。

◎歐羅巴の家族組織も、古よりは、非常なる變遷をして來た、殊に家族に於ける婦人の地位、隨て社會に於ける婦人の地位は、驚くべき程移推した。

◎今より二千年も溯れば、現歐洲婦人の祖先なる婦人は、全く奴隷と同一に取扱はれて居たのである、人格を無視されて居たのである、其痕跡は、猶は暫く引續いて居たのは、羅馬法の内に、掠奪結婚を認めてゐるのでも判然する。

◎其時代より移りて、婦人は、稍高尙なる地位に昇がりたる事は事實であるが、猶は男子の玩弄物として、又男子を中心とした家族の飾裝品として完全なる人格を與へられざる事は免れなかつた、其證據には、中世以前の日耳曼族の歷史に、婦人の活動が、少しも其影を現はして居ないのでも判かる。

◎婦人が男子の尊敬を買ふ樣になつたのは、全く十字軍以後の事である、夫も只の尊敬ではない、婦人は弱者なり、弱者を保護するは武士の務であるといふ、當時の武士氣質より出で來たつた結果だ。云はゞ他動的に、男子の情によりて、其地位

を進めたのだ。

◎斯くして、漸次今日の有樣となつたのだ、然るに我國の婦人の地位は如何なる變遷をして來たかといふに、彼等には、まるで異れる傾向、即ち美風を保つて來た、其は私よりも、讀者諸孃の方が詳しいだらうと思ふ。

◎神代にありて、婦人の地位は如何であつたか、彼等歐洲婦人の如く奴隷視されて居たか、人格を無視され居たか、否、大なる活動を以て、男子と各〻異れる方面によりて、平等なる人格を有したのである。

◎伊弉諾伊弉冊の二神はいかに、既に歴史の第一頁より、婦人は堂々たる地位を占めて居たのである、家族團體の主權者は男子であるが、家庭の執政家は婦人である、かくして大なる變動もなく、健全なる日本の家族組織は、今日に至たつたのである。

◎現日本の女權論者諸君よ、何故に、かゝる高潔なる健全なる婦人の地位を捨てゝ、かの歐洲の皮想に倣ひ給はんとするぞ、私は、其の意のある所を了解し得ぬのです。

◎成程、隨分と、日本の男子は、婦人を踏つけにするのが多い、然し、婦人は、之れによりて女權擴張を論ずる必要はない、參政權を要求する必要はない、古來よりの慣習に立ちて、益〻我國體を發揮するのに力めるのが、之れ即ち婦人の義務である。

◎請ふ、更に、現今に於ける歐洲の家族組織と、我國の家族組織を比較して見ませう、暫らく御淸聽を願ひます。

◎歐洲の家族組織は、全く個人主義の上に立つて居ます、之れ一時流行の、自由主義、個人主義の

影響にもよるが、亦男子と女子と、何らか、權力を爭ふ樣な氣味ある歷史上の結果にも據るのでせう。

◎婦人は家庭の中心たるべきである、調和機關たるべきである、彼等はかく唱ふるにも關せず、其個人主義による結果はどうだ、男子に楯を突く、交際に夢中になる、隨て家庭は支離滅裂して、子供も、親を親とも思はない樣になる、遠くばソクラテースの妻、近くばリンコルンの妻の如き、好適例ではあるまいか、私の知り合なる某外人も、常に其妻君の跳梁にはコボシて居た。

◎其結果は如何である、其國は永遠に存在を保つであらうか、佛國の末運、希國の末路、思へば目に見える樣です。

◎然らば我日本のは如何であらう、其は始めにもいふた通り、男子は家族の主權者で、婦人は家庭の執政者である、換言すれば、男子は家族の上に、形式の最高權を有して外部に對抗する務があり、女子は家庭の政治家として、萬般の事に目を付ける役がある。

◎男子の地位は、「家」と云ふ者の中には、却て消極的で、女子は寧ろ、積極的である、男子は侵される事がないと云ふにすぎ、女子は總ての家事に積極的行動を取る必要がある、されど此「家」の內部の關係を以て、世上の活動事業の關係を律せんと誤解されては困る。

◎其が故に、女子は決して男子より輕き責任を有するのではない、寧ろ重い位である、かゝる重要なる責任を有すると同時に、女子は決して閑暇な時間のあるべきでない。

◎かく西洋のは個人主義で、吾國のは寧ろ小「社會主義」とでもいふべきである、從て單位なる家

庭の集合せる國家社會に、孰れが有効なるかは、一目瞭然であらう、國家が強いといふは、各人が暇なく働くといふ事であるとすれば、女子男子、共に一寸も油斷せぬ我國のは、恐らくば世界第一等の組織であらうと思ふ。

◎女子は男子に服從すべきものである、然し、之れは、女子が男子に劣れるといふのではない、之れ、女子本來の眞面目にて、之れあるが故に、婦人は尊むべきものである、之れが即ち、我家族組織、否、國體の精華とする所である。

◎之れを捨てゝ、ハイカラ的議論を恣にする婦人は、自ら、己れの美服に泥を塗る樣なものである、換言すれば、自ら己れの價値を零にせんと焦る者であるのです。

◎コンコルドの聖者曰く、眞の服從を知らざる者は、最大愚人也と、大に味ふべき格言ではないか。

吉野山の史蹟（寫眞參照）

錦街隱者

吉野山は我國に双びなき悲慘の史蹟なり、之を唯櫻花の名所遊覽の勝地となす如きは餘りに心なき事と云ふべけれ。「歌書よりも軍書にかなしよしの山」と支考の吟せしは我と所感を同ふせしものか故内大臣三條實美公は詠じて云く

よしの山むかしの春のあはれさを
月と花とにとふてよひかな

公か前半生の經歷は元弘の藤房卿に似玉へり、幸に中興の盛運に際會して位人臣を極め給へるも、一度此山に登りては延元中興の業半途にして地に墜ちたる往事を追懷し感慨に堪へざるものありしならむ、古來吉野山の和歌多かれど此歌の如きは

五指の初に數へらるゝものなるべき歟。

吉野山は大和國吉野郡の北部に位し上中下の三郷に跨かれる故に三吉野と稱せるよし、此山南和紀和の兩鐵道線路に接近し居り遊賞に便利多し、東北よりする者は紀和線の五條停車場にて下車すべし、此處より六田の渡場迄四里半なり、西南よりものするは南紀線の葛にて下車すべし、此處より六田迄三里餘にて何れも人力車を通す。六田より吉野の藏王堂迄一里、車を通せざるにあらねど處々に峻坂あり、且つ路傍には櫻樹まばらに立並び眺望も佳ければ寧ろ歩行するを好とすべし。



長峰の彩霞、吉野八景の一、一の坂より一目千本迄を云ふ、吉野宮村上義光の墓等皆此峰にあり。

官幣大社吉野宮、祭神後醍醐天皇、攝社御影神社祭神藤原資朝藤原俊基、同船岡神社祭神兒島範長兒島高德櫻山玆俊、同龍櫻神社祭神土居通增得能通綱。天皇の昔愛させ給へるに因みてか、境内には多く櫻を植ゑしが今を盛りと咲亂れたる花の今朝より降つづける雨に打たれて庭前に散敷ける樣ひとしほ憐れに坐ろ昔の偲ばれて双の袂を濕しぬ。本社の寶庫には天皇の御宸筆並に南朝忠臣の遺物等數多ありと云ふ。權掌侍藤原道子の歌

文の上に見てもかなしきみよしの丶
　吉野の宮をおふく今日かな

村上彦四郎義光の墓、樂師堂址の側なる小高き處に五輪の塔を立つ是其屍を葬れる所か、其下に「忠烈之碑」あり天明三年高取内藤景文子武立る所にて義光が死節の顚末を記せり。彼の時大塔宮に從ひ參らせし武士何れも忠義ならぬはあらねど殊に村上父子に至ては拔群と稱すべきものにて、今此の墓に向へば一鎧に立つ所の矢十六筋、枯野に殘る冬草の風に伏したる如くに折り懸けて、宮の御前に參り、召されて候錦の御鎧直垂と御物具とを下し賜りて御諱の字を冒して敵を欺き、御命に代り進らせ候はんと申し」終に宮の御許を蒙りて二の木戸の高櫓に登り、白く淸けなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に搔切りたる義光其人を眼前に見る心地せらる。加藤千浪が

　君が爲ちるやよしの丶花やくら
　　たかき其名は今もにほへり

と詠せしは以て義光の讃と爲すべきものか。

杉山亭址、文祿三年三月豊臣秀吉觀櫻の時設けしもの、今は唯其址のみ殘れり、秀吉の歌に

　吉野山こずえの花のいろ〳〵に
　　おとろかれぬる雪のあけぼの

皇后陛下御野立址、長峰より一目に見る所櫻樹最も多し、世に之を下の千本と云ふ。明治二十三年四月皇后陛下御登山の時御休憩所の址、今猶小亭を存せり。此行啓あらせられんとせし時御歌所長藤原正風の詠みて奉りける歌

　みよし野の千もとの櫻のこりなく
　　ゑみほころびて君をまつらん

高崎翁の歌には感服し難きもの往々あれど此歌は

稍勝れて見ゆ、山靈の冥助にやわらむ。銅華表、高二丈五尺柱周一丈一尺餘、聖武天皇の御宇奈良大佛鑄造の餘材をもて造ると云ひ、發心門の額は弘法大師の筆蹟と傳ふ。吉野町大凡四百餘戸あり、崖造りにて眺望の佳き旅舍多し。藤尾坂、文治元年十一月源義經の愛妾靜御前義經に別れて路に迷ひ、此坂路より藏王堂に來りて吉野の衆徒に見とがめられ、其勸めもだし難くて起舞ひしに、もとより日本一と言はれたる舞の名人なれば見る人袖を絞らぬはなかりしとぞ。藏王堂、金峰山寺の本堂にて天平年間行基菩薩の創立せし處本尊金剛藏王權現の像長二丈六尺、行基の自作なり。昔時は樓門、大塔、講堂、金堂、觀音堂、七十二間の廻廊、四十一區の坊舍ありしが、元弘及正平の兵燹に罹りて殘らず燒失ぬ。今の堂宇は康正年間の建立にして、天正十九年大修繕を加ふ、十八間四面、高さ十一丈二尺、柱の數七十二本、神代杉の柱長三丈五尺周り一丈三尺、躑躅の柱長三丈一尺周り八尺なり。金峰杜鵑」是れ吉野の八景の一也或人の歌に



みよしのゝ昔のあはれ忍びつゝ
今も血になく山ほとゝぎす

四本櫻、藏王堂の前にあり元弘三年閏二月朔日吉野陷りし時大塔宮の御酒宴ありし處、太平記に

宮は藏王堂の大庭に並居させ給ひて、大幕打ち揚げて、最後の御酒宴あり、宮の御鎧に立所の矢七筋、御頰さき二の御腕二箇所つかれさせ給ひて、血の流るゝ事瀧の如し、然れども立ちたる矢をも拔かず、流るゝ血をも拭ひ給はず、敷皮の上に立ちながら大盃を三度傾けさせ給へば、木寺相模四尺三寸の太刀の鋒に敵の首をさし貫きて宮の御前にかしこまり、(中略)はやした揚げて舞ひたり、

と書きし筆の跡さへ思ひ出されて暫くは立去るに忍びざりき。宮の英武にして其臣下に亦大剛の者多かりしも遂に御利運なかりしは天命にこそ。

實城寺、金峰山寺の本坊にして藏王堂の西にあり後醍醐天皇一時行在所に定められ、諸儀式も此處にて行はれしと云ふ、天皇の御製

　都だにさびしかりしを雲はれぬ
　　吉野のおくの五月雨の空

吉水神社、元は吉水院と云ひ、南朝四世五十年の行宮なり、明治八年に吉水神社と改稱後醍醐天皇及大楠公を奉祀す、御製に、

　花にねてよしや吉野の吉水の
　　枕の下に石はしるおと

淒凉の景、幽寂の情、筆墨に溢れたり、之を奉讀して臣民誰か暗涙を灑がざる者あるべき、又

　吉野山我住かたは明やらで
　　高嶺は花にしらみ初けり

の御製も此院にて遊ばされしならむ。是より先義經も此院に匿れ、是より後秀吉も此院に宿せり、今の家屋は其舊物なりといふ。

山口神社、元勝手明神と云ひしを明治八年に改稱す、後醍醐天皇賀名生邊へ落させ給ふ折に

　たのむかたなきにつけても誓ひてし
　　勝手の神の名こそをしけれ

村上藏人義隆の墓、山口神社の前を右へ行くこと五町ばかりの山腹にあり、義隆は義光の子なり、宮の落ち行き給ふ御供に候ひしが、敵の追ふこと急にして、討死せずは宮遁れさせ給はじと覺えければ、只一人踏留まりて敵を防ぎ十餘ヶ所の疵を被り、腹掻切りて死にけり、時に年十八歳村上父

子が忠死の間に宮は虎口を御遁れありて高野山へ落させ給ひける、義隆の碑は明治三年に建つる所なり。

後醍醐天皇塔尾陵、如意輪堂の上にあり、延元四年八月十六日、左の御手に法華經の五の巻を持せ玉ひ、右の御手に御劍を按して崩御なりぬ、寶算五十三。正平五年の春新待賢門院此の御陵に參り堂舍は皆回祿に罹れ共花は昔に變らず、哀に覺えて一房を消息の内に入れ宗良親王に送るとて

三吉野はみしにもあらず荒にけり
　あたなる花は猶殘れとも

如意輪寺、日藏上人の開基にて本尊如意輪觀音寺に後醍醐天皇淚川の御製眞蹟を藏せり

淚川身も浮きぬべき寐覺かな
　はかなき夢の名殘ばかりに

之を讀みて淚なき者は其人必ず不忠。正平二年十二月楠正行が龍顏を拜し帝陵に謁し、其族黨百四十三人の名を此堂の壁に留めしが、不幸其堂は燒失せて今姓名を知る由なきも、正行が鏃もて

かへらじとかねておもへば梓弓
　なき數に入る名をぞとゞむる

の歌を彫りたる扉は今に殘りて拜觀人の淚の種となりぬ。又此時正行の截りし髻を埋めし處には森田節齋氏の撰める碑文建てり。御陵最寄の谷々櫻樹多し、之を中の千本と稱す。

西行庵、上人の木像を安ず、此邊の櫻を西行櫻と云ふ、花淡白故上人之を愛せしに因るとか

吉野山去年の枝折の道かへて　西行
　まだ見ぬかたの花を尋ねん

猶記すべきこと多けれど餘り長文になるの恐れあれば此に筆を擱く。因云此山の花盛は立春より六七十日目にて、年々多少の遲速ありと云ふ。



小說

婦人記者（上）

内田茂文

疊なら二十五六疊も敷き得べき西洋室の入口に、三面編輯局と記された木札が高く懸けてある、室の中央には墨インキなどに汚されたテーブルが七八脚両側に向き合せて順よく並べてある。室内の正面稍々高き處に懸けた八角のボン〳〵時計は、今しも午後六時を報じた。之を合圖の樣に記者の多くは相前後して立去つた跡に、尚首席のテーブルに據て居た洋服の四十恰好の鼻下に髯のある眼鏡を掛けた記者先生、無論編輯長であらう。頻りに編輯簿を把て大組の順附を拵へて居るのであつた。末席に居つた年齡二十二三の、一人の婦人記者は、編輯長に向つて

「お先へ失禮いたします

輕く挨拶して立ちかゝるを、編輯長は俄かに氣が附いたか
「アッ桃井さん、ちよつと
桃井と呼ばれた婦人記者は
「ハイ
と言乍ら、編輯長の傍近く進み行きて
「何か御用で
「少し貴女にお願ひ申度い事が有るんですが……斯く言ひながら編輯長は大組の順附を拵へ終つたらしく、編輯簿を押遣つて婦人に向ひ
「桃井さん、外でも無いのですが、昨日斯いふ投書が舞ひ込んだんです
テーブルの抽斗より二三枚重ねて疊んだ原稿を把出し、自ら披きて
『薄命なる一家』、是れです
編輯長は原稿を桃井に示し
「ちよツと御覽なさい……事實ならば實に憐むべきで、一片同情の熱涙を禁じ得ない位なものです。併し投書と云ふ奴ア無責任のものが多くて信を措けないですから、ウッカリ採用も出來ませんが、事件の筋が普通と變つて、其婦人と云ふのは高等女學校の出身だとか書て有りますね、チヨット面白いじや有ませんか、必ず精探する價値が有るだろうと思ふんです、事件の舞臺が赤阪ですから、其方面

の受持探訪に探らせうと思ふんですけれど、大體が婦人に關した事ですから、是は貴女の手を煩はした方が宜でせうし、又貴女でなければ女性の精細い觀察は他の探訪じや解らないですから、どうか一ツ遣て下さい

「ハア、承知しました、その赤阪の番地は判然ておりませうか

「番地は判然しない樣ですが、田町四丁目に有やうですから、大概その邊で聞たら解らない事は有りますまい



「夫では明日出社前に其方へ廻つて調べて見ませう、ですけれど私しで克く探る事が出來れば宜ですが……

「そりや確です、貴女なら屹度面白い事實が探り得られませう、斯言つちやア失禮ですが、貴女には適任の事件であらうと思ふんです、マア一ッ骨折つて專任探訪の奴を驚かして遣て御覽なさいハヽヽ……

其夜、婦人記者桃井千代子は歸宅して、先刻編輯長より托されたる原稿──『薄命なる一家』の投書を把出して熟讀した、其記事は左の如くである

◎薄命なる一家　世間均しく薄命と稱せらるゝ中には往々自業自得にして毫も同情を寄せ難きもの無きにあらざれど此一家の如きは實に憐むべきと同時に感歎措く能はざるものと言ふべし赤坂區田町四丁目の裏長屋に住居する春野お三千(二十七)と云ふ婦人は素高等女學校出身にて相應の教育もあり同人の良人と云ふは春野八重雄とて曩に四谷區南伊賀町に住し某省に奉職し統計的事務に敏腕の聞えありしが嘗て上官交迭の際意見の合はざる事ありて斷然勇退して官を辭したる後統計學研究の爲め自費を以て洋行せしが圖らずも病魔の襲ふ所となり遂に昨年十月中巴里の客舍に歿したり此悲報に接したる妻のお三千は一時は悲歎の涙に掻暮れ前後も忘れん計りありしが甲斐々々しくも氣を取直して夫々跡の始末を整理し南伊賀町の住居を引拂ひて良人が遺兒の今年八歳になる長女艶子と倶に目下の住居なる赤坂田町四丁目の裏長屋に引移り馴れぬ仕業の賃仕事を爲して僅かの收入の内より艶子を近邊の私立女學校へ通はせ居りしが去二月の下旬より風邪の心地にて打伏たるに積日の心勞が加はりてや假初ならぬ病症と變せしかば艶子も今は學校を休みて只管母の看護にのみ從事せるが先立ものは金にて先頃より少々の貯金も藥代に大方は費ひ盡して詮方なきより一ッ二ッの道具を賣却しては其日の烟の代と爲せるが斯る中にも感ずべきは艶子にて毎朝四時に起きて潜に同區一ッ木町邊より苞納豆を二十錢ばかりづゝ買受け來りて母が藥取りの使に醫師方へ赴く際各町々を納豆〳〵と賣り歩きて商ひ歸るを例となし斯くの如くにして毎日七八錢の利潤を得ては母が醫藥の料に充て居るとは少女には珍しき行ひと言ふべし尚聞く所に依ればお三千に一人の實妹ありしも今より十年前お三千が春野家へ嫁せざると

き他家へ養女に遣りたるが其後音信打絶え兩親は既に沒し身寄の者とてあらざれはお三千は頻に妹を戀しがり居れど更に其行衛を知らずと云ふ

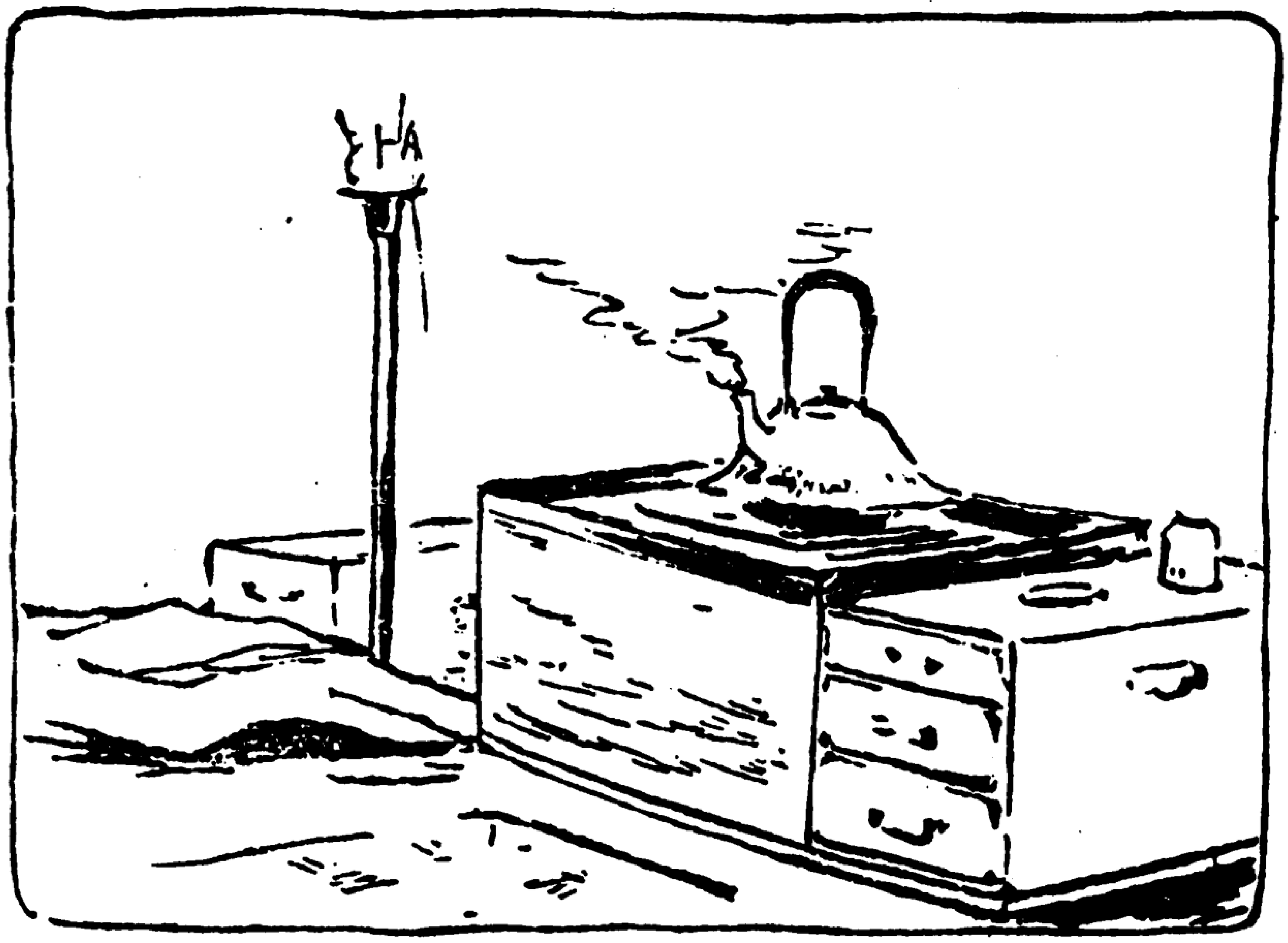
（下）

灰に匂ひ漏るゝ煎じ藥の香にそれと察して進み寄りし一婦人

「御免なさい……少々物を伺ひ度ぞんじます……

「ハイ……誰殿？

音訪ふ聲を聞き附けて出て來た乙女は艶子である、色の褪た紡績絣の綿入に三四度も洗張り仕立直したメリンスの幅の狹い帶を胸高に〆めて居る、婦人は問ふた△



△貴孃の家、春野さんと仰しやつて？

「エ

とのみ答えた外、何事も言はず不審そうに婦人の容貌服裝等を熟視た、婦人は尚も問ふた

「おつ母さんは臥床て入ッしやるの？

艶子は又も

「エ

と答ふるのみである、婦人は懷中の手帳の間から一枚の自分の名刺を把出して艶子に渡し、

「一寸おッ母さんにお目に懸つて伺ひ度事がありますから然う仰やッて下さいまし

艶子は「ハイ」と言乍ら受取た名刺を眺め〳〵奥へ持行き母の傍に進み寄るのも待たで、お三千は今しも呑了りし煎薬の茶碗を枕頭に置きながら、

「艶や今表へ誰殿か入來しやつた樣だが誰殿だへ

「ハア、此方よ、おつ母さんに何だかお目に懸つてお伺ひしたい事があるからつて……

艶子は件の名刺を母の手に渡した、母のお三千は把上げて

「オヤ……この名刺は……桃井千代子……桃井……桃井……

俄然不審の雲に心鏡を蔽はれ、幾度か口の裡に名刺の文字を默讀で居る如くである。

「おッ母さん何と申しませう？」「お通し申すの」お三千は氣注し如く快活に「ハア」

軈て艶子の返辭と倶に破屋の四壁計りの座敷へ打通つた婦人記者桃井千代子は、初めての挨拶をした、

お三千は頻りに桃井の顏を打守つて「千代さんじやないかへ」

唐突に此語を聞て千代子は狼狽しながら「貴女は……」お三千の眼には早充分の涙を湛え、聲は既に曇つて居る「無理もない十年も會いないもの、お忘れの筈ですワ、私は花村の三千だよ「ヱ……姉さんですか……

婦人記者桃井千代子が探訪の結果、編輯長への報告は、原稿紙に認められずして、委さに千代子の口より密に編輯長の耳にのみ達せられた、翌日編輯會議の際、編輯長の發起で編輯局内で醵金して春野お三千へ金數十圓を惠贈した。

（終）



文林

岸上藤　　久我建通

藤なみは岸のやなぎにかゝりけり
おなしゝなひの花かつらして

殘花薫風　　鍋島直大

さきのこる花は青葉にみえねとも
風ふくたひに香こそにほへれ

池杜若　　高崎正風

かきつはたむらさき深く咲にけり
ひこひのあけも奪ふはかりに

殘鶯　　宮地嚴夫

あかすして春に別れしうくひすか
尙卯のはなのかけになくなり

連峰新樹　　阪正臣

峰つゝきおなし緑もをちこちの
いろはさすかにわかれける哉

大原女　　小出粲

いたゝける黒木はかりを重荷にて
世にはかしらをさけぬ大原女

芍藥　　千葉胤明

えひす草さき出にけりしきしまの
大和なてしこうゑしそのふに

藤原百川公　　遠山英一

雲きりをはらひはらひて久かたの
あまつ日つきを迎へけるかな

埋木　　岩崎勝從

世のなかのうつはとなれは埋木の
なもうもれさる物にそありける

艦隊操練　近衛貞子
たひらけき青海はらに日のみはた
掲けしふねのかすあまたみゆ

筍　蜂須賀隨子
ちりつもる花のしら雪ふみわけて
思はす得たるにはのたけの子

農業　柳原愛子
田かへして秋たかるまて雨つゆに
いくたひ賤はそてぬらしけむ

松陰餘花　西四辻茂子
山まつの木のまのはなの一もとは
はるにおくれて今さかりなり

松有歡聲　日野廣子
君か經む千代をよろこふ松かせに
なみもこたふる心ちこそすれ

百合　小池道子
鬼あさみしけるなつ野に打ましり
さく姫百合のいとはしきかな

潮干狩　田中瀧子
しらぬまに夕汐さしてかひ拾ふ
干潟はせばくなりにけるかな

辨内侍　小川直子
あはれ世にかりの契りもあさき人の
跡とふのりのこゑそかなしき

水道　服部磯子
大御代のめくみあまねく家ことに
ゐなからくめる玉かはのみつ

鵠沼　河村重子
江の島の貝ひろふ子かそてかけて
ゆふかせかよふ鵠ぬまのはま



五月十五日兼題

樞密顧問官正三位子爵 黒田清綱先生撰

（先生未だ伏蓐し居らるゝによりて門弟子の代撰に係る）

夕蛙

天　東京市赤坂區青山北町三丁目六十八番地　山本茂子

ゆふつきのかけさへゐての玉かはに
すたくかはつのこゑそなかるゝ

評　月なほ暗く四邊寂として、只蛙の聲と玉川の水と共に流れて、益々清き井手渡頭の一夜描き得て清絶。（超舟）

地　東京府下荏原郡大井村二百四十八番地　三好珍子

ゆふくれの小田のわせ道ゆくてさへ
まよふはかりにかはつなくなり

評　田事終へて將に歸らんとする夕暮、蛙の聲に追られて足を運ぶに躊躇せし風情、見る心地せらる、佳作と稱すべし。（超舟）

人　熊本市東寺原町　田代艶子

ひもときし文もかはつのもろこゑに
よまてはてけりゆふくれのそら

評　意はさまで清新ならねど、多少飄逸の氣、言外に顯る、學生の歌として蓋し上乘なるもの歟。（超舟）

甲之部

めつらしくきませる君にきかせまし
すたくかはつのゆふくれのこゑ　伊豫　磯崎千代子

一しきり小田のかはつのこゑやみて
ゆふへさひしくはるさめのふる　埼玉　横田音羽子

さくらちる小田のあせみち暮そめて
こゑふむはかりかはづなくなり　越前　上村ちと子

衣のはすの池にすみてもなつの夜の
　つきたまたえてなくかはつかな　秋田　三浦さわ子

花なくてうさはちらしといふひとに
　ゆふへのかはつきかせてしかな　北海道　澤　鈴子

乙之部

ほともなくけふの日かけもくれ竹の
　ふしみの小田にかはつなくなり　埼玉　前野ふさ子

夕まくれ田のもをくれはせゝらきの
　田にしとゝもにかはつなくなり　埼玉　磯田秋子

ゆふへまて雨のふる江のにこりみつ
　こゑのみすみてなくかはつかな　東京　河合きさ子

せき入れしなはしろみつにゆふ月の
　かけにこらしてなくかはつかな　三河　永井さい子

なはしろの水ゆたかなる世なりとや
　かはつもうたふあめのゆふくれ　三河　服部萬子

昨日今日またすみなれぬこのゆふへ
　あなれかはつのなきわたるかな　札幌　山田姉美子

春さめにくろゝたつらのゆふまくれ
　かはつなかすはさびしからまし　三河　本多きさ子

かはつなく聲もあはれにきこゆなり
　はなちるころの井出のゆふくれ　東京　椎野鋭子

ゆふつきのかけもやとれる小山田の
　なはしろ水にかはつなくなり　東京　石野敏子

ゆふ月のかすみてにほふ池のおもの
　はすのわか葉になくかはつかな　愛媛　松友家久子

賤か家のともし火うつる水のおもに
　かはつなくきり小田のゆふくれ　東京　佐藤成子

庭さくらちるもかなしきゆふくれに
　ものおもへとやかはつなくらむ　松山　上原のふ子

山ふきのにほひこほるゝ池のおもに
　ゆふへしつけくかはつなくなり　横須賀　上田ゆき子

ころひれになきこそかはせ夕まくれ
　小かはのかはつなみのうれく　肥後　佐々有隣子

雨よひて小田のかはつのなくころは
　はるのゆふへのさびしかりけり　山口　村上操子

くれてゆくはるの野川のしたみつに
　ひかけおしみてかはつなくなり　東京　椎野薫子

夕つきのかけさすにはのやりみづに
　あめよふかはつこゑしきるなり　大和　栗山けい子

川そひのはなもかすみてくれそむる
　ゆふへさびしくかはつなくなり　東京　椎野秀子

かきくらし雨もふる江のゆふくれは
　すたくかはつのこゑのみそする　埼玉　前野壽賀子

さらてたにさみしき小田の夕まくれ
　あはれをそへてかはつなくなり　三河　石川満壽子

入相のかねのねとふくひゝきて
　はなちるなたにかはつなくなり　秋田　古瀬りく子

夕されはこのもかのものいけみつに　肥後　德永多瑠子

歌の庭

こゑさひしくもなくかはつかな

ゆふ月夜かすめる小田のみつもせに　長野　山本直枝子
　なけるかはつのこゑのさやけさ

夕されはかとだのみつにおほろよの　秋田　三浦ふさ子
　つきもうかひてかはつなくなり

小山田にみつせきいれしゆふへより　東京　山田ふみ子
　はやもかはつのこゑきこゆけり

八重かすみたなひくそらの夕くもり　東京　高谷いち子
　あめ待ちかほにかはつ啼くなり

雨はれしなはしろをたのゆふつきに　東京　田中ちゑ子
　こゑもみたれてかはつなくなり

うくひすはれくらしめたるゆふ山の　三河　宇都野傳子
　はなちるをたにかはつなくなり

ゆふされは戀しきいもとまろひれの　熊本　志方圓女
　音もころ〳〵にかはつなくなり

春さめのふる江のかはつおのかしゝ　東京　山本梓子
　なきてなくさむゆふくれのそら

くれてゆく春をおしとやゆふつきの　札幌　山田靜子
　わたるやま田にかはつなくなり

夕まくれいそくやまたのあせみちに　東京　三好賢子
　こゑふむはかりかはつなくなり

くれそむる春のゆふへのつれ〳〵を　長崎　八尾いへ子
　なにゝかこちてかはつなくらん

かしましきかはつなれとも夕まくれ　肥後　田代綾子
　なくはさひしきものにそありける

ゆくはるもいまはとみゆるゆふ日影　三河　服部正子
　をしみかほにもかはつなくなり

ゆふまくれ雨につとひてなくかはつ　東京　倉原圓城子
　よるかのいけのかしましきかな

あはれともたのしともきく人こゝろ　肥後　澤田春子
　日くれ日くれにかはつなくなり

あかつきのころよりふりし雨はれて　丹後　木村義子
　小田のかはつのゆふくれのこゑ

いとゝしくかはつのこゝろ浮きたちて　下野　佐藤おき代子
　こゑさはになくゆふくれのそら

五月雨のはれまゝつなるゆふまくれ　伊勢　中村縣子
　あはれを添へてなくかはつかな

さくらちるやまもとさむく風たちて　上總　高石登代子
　ゆふへさひしくかはつなくなり

すみれ草すきかへす小田の夕まくれ　肥後　佐々小琴子
　かはつなきたつあめやよふらん

すみれつむ子らはかへりてゆふ月の　東京　林環子
　ほのめく小田にかはつなくなり

夕まくれあめとなる夜を知らせてや　愛媛　すみれ子
　かなたこなたにかはづなくらん

山さとの小かはのかはつうちむれて　肥後　德永廣子
　こゑあはれにもなくやゆふくれ

苗しろのみつにうつれるゆふつきの　美濃　吉村せむ子
　かけうこかしてなくかはつかな

ゆふ月のうつれるをたにともよひて　東京　佐々木八重子
　なくやかはづのこゑのさやけさ

折におひてきけはさすかにあはれなり　下野　和賀井花子
　いけのかはつのゆふくれのこゑ

あすもまたあめにやあらん夕つきの　大和　栗山高子

小くらきさわにかはつなくなり

つきかけもかすみはてたる夕まくれ　愛媛　松友　みどり子
あめ呼ひかほになくかはつかな

ほともなく雨となるらんこのゆふへ　愛媛　松友　くに子
なくやかはつのこゑしきるなり

池の邊のひともとやなきゆふつきの　遠江　比良古　よし子
かけほのくらくかはつなくなり

問ふ人もたえてさひしきゆふくれに　東京　柳田　靜子
うきなもしらでかはつなくなり

はなちりてにこりもみえぬいけの面に　栃木　川連　秋子
ゆふへさひしくかはつなくなり

なき友の御はかのほとり日はくれて　遠江　比良古　代子
むらさめしけくかはつなくなり

櫻ちる池のみきはのみかたれに　濟國　稻田　鍬子
蛙なくなり春の夕くれ

丙之部

なへうゑて家路にかへるゆふまくれ　東京　杉田　紫子
みきひたりよりなくかはつかな

三日月のかけもにほひてさくらちる　熊本　日高　かす子
いさゝ小かはにかはつなくなり

ゆふまくれこと引なれはころ／＼と　東京　山口　こと子
いけのそこにもかはつなくなり

うの花の散りてなかるゝゆふまくれ　下野　佐藤　しげ子
あはれみきはにかはつなくなり

根芹つむ子らもかへりてくれそむる　東京　藤田　いく子
野さはのみつにかはつ鳴くなり

ゆふ風にみきはのさくらちり／＼て　大阪　桝田　益子
なくやかはつのこゑにほふなり

ゆふさめに田のもの道はかすみつゝ　東京　横山　きやう子
なはしろみつにかはつなくなり

春にうみておはしまちかくたらよれは　東京　荒井　千代子
なくさめけにもかはつなくなり

をやまたの里のゆふへのさひしさを　肥後　坂本　道子
なくさめかほにかはつなくなり

きのふより小雨そほふるなはしろの　下野　民屋　嘉久子
ゆふへさひしくなくかはつかな

せきかくる苗しろみつをまちわひて　肥後　德永　尚壽子
なくねあらそふゆふかはつかな

たゝひとりおもひにくゝる夕つき夜　下野　民屋　喜美子
なくさめけにもかはつなくなり

夕まくれそほふるあめのなか／＼に　長野　小泉　みつし子
小田のかはつの鳴きまさりける

夕されはかせになり／＼きこゆなり　下野　佐野　孝子
をちのやま田にかはつなくこゑ

うちかすむゆふへのそらを雨にして　山口　田村　多豆子
こゑかしましくなくかはつかな

はるさめの古井のなかにともよひて　福井　平田　そう子
ゆふへさひしくかはつなくなり

やなきかけをくらきゆふへ池みつに　肥後　岡山　登壽子
こゑあはれにもなくかはつかな

夕月夜かすむ田つらのみつきよみ　東京　北島　功子
こゝちよけにもかはつなくなり

夕ひかけかすみにくるゝをやまたに　讃岐　大山　登ゝ子

歌の庭

こゑのとかにもかはつなくかな

さくらはないつしかちりし池の邊に　東京　荒井満武子
ゆふくれうしとかはつなくなり

夕まくれあなはましりのにわの面に　東京　植村むめ子
ふしおもしろくかはつなくなり

夕まくれこさめそほふるはすいけの　愛知　後藤信子
わかはかくれにかはつなくなり

かはづなく小田の畦みちゆふくれに　東京　後藤ちか子
いへぢないそくわかみなるかな

花はちりあめしづかなるこのゆふへ　伊豫　小松千代子
ところえかほにかはつなくなり

さくらちるなはしろをたの春さめに　三河　河合ぬひ子
ゆふへさびしくかはつなくなり

ひとりすむ草のいほりのゆふまくれ　東京　田中よし子
物おもひなれはかはつなくなり

夕つきのかけおもしろきをやまたを　同　山村小雪子
ところえかほにかはつなくなり

しつの男かいへぢにいそく夕まくれ　但馬　田尻保代子
くろゝとつけてかはつなくなり

ふしの花みてかへるさのゆふつきよ　安藝　和住千鶴子
小田のかはつのこゑしきるなり

はなもちり人もかへれるゆふくれに　肥後　坂本たけ子
なくやかはつのこゑのさひしき

おちこちのさくら散りしく夕まくれ　三河　石川代志子
はるをしみてやかはつなくかも

こよひあめふらんとすらん夕まくれ　下野　中村清子
いけのかはつのこゑしきるなり

はなもなく夕へさひしきいきつ田に　東京　松村あさ子
あはれたゞそへてかはつなくなり

折にあへはかはつの聲もあはれなり　東京　椎野ぬき子
ほそたにかはのはるのゆふくれ

賤の女か植うるわせ田のゆふくれに　下野　佐藤幸子
こゑをそろへてかはつ啼くなり

ゆふかすみたなひきにけり山さとは　横須賀　岩橋花子
小田のかはつのあはれとやなく

あめそゝくなはしろ小田の夕まくれ　肥後　徳永雪枝子
いとゝあはれにかはつなくなり

夕つきのおほろにやとる佐保かはに　和泉　福原菫子
かはつなく音のさやけくあるかな

ゆふ月のさしのほりたるいけとのゝ　東京　佐藤央子
おはしまちかくかはつなくなり

山ふきのちりてなかるゝみつも瀬に　下野　菅沼とく子
かはつともよふ小山のゆふくれ

はる雨にゝはのふるいけみつまして　東京　山口はる子
ゆふへさひしくなくかはつかな

田事おへて畔みちつたふゆふまくれ　鹿兒島　伊知地とみ子
あしもとちかくかはつなくなり

ゆふつきのかけなほくらき小山田は　下野　葛生徳子
かはつ鳴く音もさひしかりけり

小山田にかすみたなひくゆふまくれ　下野　花方利貞子
あめとまかひてかはつなくなり

しめ／＼とふる五月雨のゆふまくれ　下野　大木秀子
こゑさひしくもかはつなくなり

小山田のはるのゆふくれなか／＼に　下野　大木善子

こゑかしましくかはつなくなり

ゆふかすみ雨となる夜をさくら散る　下野　木宮愛子
やまそへ小田のかはつなくなり

やまふきのちりしく池に鳴くかはつ　下野　田崎孝子
なれもさひしとゆふくれのこゑ

夕月夜かけおもしろき小やま田に　栃木　森田みと子
こゑをすましてなくかはつかな

ゆふ月夜いけのみきはのさくらはな　下野　民屋美津子
ちるかけ見ゐてかはつなくなり

ゆふ風のわたるみつ田のよるなみに　下野　民屋信子
こゑもなひきて鳴くかはつかな

さくら散るゆふ月かけにこゑしけく　下野　舘沼以智子
外やまの小田のかはつなくなり

ゆふ月のかつらのかけのかけくらく　下野　谷田貝登志子
田井のみきはのかはつなくなり

うすゝみの色よすなみのおほそらに　下野　佐藤文子
ゆふ日はおちてかはつなくなり

夕餉たくけむりのそらにたなひくを　下野　花方米子
あめとまかひてかはつなくらん

ちる花のうかへるいけにきて見れは　下野　花園德子
ゆふへさひしくかはつなくなり

山さくら散りしくをたのゆふくれに　鳥取　大塚信子
あめもよふしてなくかはつかな

さは水にうかへるはなにみかくれて　下野　川中子てつ子
こゑものとかにゆふかはつかな

夜半はまた雨にやならんこのゆふへ　秋田　古瀬幸子
こゑくもらせてなくかはつかな

かしましきかはつのこゑも聞なれて　東京　佐藤なか子
ゆふへたのしき小やまたのさと

夕たちのくものいつるやあめと見て　下野　佐藤富貴子
よろこひうたふかはつなるらん

たちつゝく山たのさとのゆふけふり　秋田　古瀬とよ子
なひくしたにもなくかはつかな

夕くれないそくゆくてもくもりくる　東京　荒井いく子
かはつそなきていとゝせはしき

影うつる野さはのみつのゆふつきに　東京　高谷華子
かはつもほそきこゑに鳴くなり

ゆふ月のおほろにてらす小やまたに　北海道　中川伊代子
こゑかしましくかはつなくなり

すかのねの長きはるひやわひつらん　秋田　佐藤かつ子
かはつなきたすゆふくれのそら

うた人のまとゐともみんつきかけの　秋田　古瀬たゝみ子
うつるはなたになくかはつかな

小田の邊に草つむ子等のこゑたへて　信濃　小林よし子
ゆふへさひしくかはつなくなり

ゆふ月のかけおほろなる小田の面に　下野　佐藤鈴子
こゑをつくして啼くかはつかな

しらへなす小琴のふしにかよはせて　若松　川島謙子
かはつなくなりゆふくれのころ

やまふきのみきはにうつる夕日かけ　下野　和賀井芳子
あなうつくしとなくかはつみゆ

さみたれのふるのゝ小田の夕くれに　栃木　岩間きよみ子
さひしさそへてなくかはつかな

五月雨にふりこめられてつれ〳〵の　鹿兒島　久留靜子

歌の園

ゆふへさひしくかはづなくなり

あめすきて植田のおものゆふまくれ　うれしかほにもなくかはつかな　東京　山口すま子

ゆふ月はいつしかきえて雨となり　かと田さひしくかはつなくなり　大隅　平田芳子

霧立つ田のみなくちのゆふやみに　かはつもあめをこひてなくらん　下野　大森富久子

なか〱になかしきものは夕まくれ　ふしいろ〱に鳴くかはつかな　下野　長波津子

あめふりて水くちのみつ増すゆふへ　ときをにかほになくかはつかな　下野　長榮子

やまふきのはな散り流るゆふまくれ　みきはのかはつこゑかほるめり　下野　毛塚登久子

ゆふくれは古井のかはつともよひて　このもかのもにかしましきかな　下野　菫花子

しつの女の宿にといそくゆふくれに　かはつなくれのかしましきかな　京都　坪内りき子

あろしうせしゝやうやの軒の荒にあれて　もゝちるゆふへかはつなくなり　新潟　檜八重子

我庵はゆふへさひしと人はいへと　かはつなく音にいとゝにきはし　若松　川邊柳子

夕日さすきよたきかはにときゝぬと　こゑもおしますかはつなくなり　東京　川瀨たき子

山さくらちりてなかろゝかはの邊に　かはつゝまよふはるのゆふくれ　東京　平尾あさ子

人おともたえてなさめのゆふまくれ　あはれかと田になくかはつかな　東京　中野昌子

夕くれのしつかかと田にころ〱と　こゑおかしくもなくかはつかな　東京　川村まつ子

時きぬとうたふかはつのはりこゑに　れむさおほゆるはるのゆふくれ　東京　内田きみ子

夕めくる小ほりのかはつよひ〱に　なきてはゝをやをしむなるらん　東京　吾妻ちか子

さくらちる小河のなかれとめくれは　ゆふへさひしくかはつなくなり　東京　戸塚てつ子

夕されは野さはのみつにところ得て　かはつともよふこゑあはれなり　東京　戸塚ふみ子

華族女學校教授井上賴圀先生撰

故郷を出つるの記

東京赤坂區青山北町三丁目六十八番地　山本梓子

天

みの虫のちゝよちゝよとこひきこえ、柞葉のいともなつかしきかけを、今日しもはなれて、なれにし故郷の山たち出でむとす、錦着てかへらすは、再びこえしと、思ひ定めて、涙などつゆ見せ奉らじ、うちゑみつゝ別れまゐらせんとすれど、今はとなれば、いとたえがたし、いとま給はる折しもあるべきやうこまごまと、都なるほどは、伯母君

のおもとを、頼むこかけと、かしつきまつれ、心の錦かざりて、かへらむ事を忘るなと、かへすがへすのたまひつゝ、夜かぜ心せよ、友ゑらびて交はれなど、母君もことそへ給ふ、わざと門へには送りいで給はず、親しき友ぞ、五人ばかり、みちまでとて共におはす、かへりみは中々ならむと、思へどさすがに、めに見えて、しるしの杉のたてる門いとゞなつかし、彼の岡こそ、いにしやよひ蕨をるとて入りし所なれ、こゝの田のもぞ、根芹つみしよと、たれかれの給ふにも、あはれこむ春は八重の霞のあなたより、思ひやられむかしと心細し、君が別れのかなしさはと、皆うたひ出で給ふに、袂わかたむすべもなし、故人なからむと、聲高からず、つぶやき給ふにも、げに、なしとにはあらねど、かく心深き友どちは、あるべきやうなからんと思へはいと心ぼそし、さはれいづこまで行くとも、つくる名殘ならねば、枝をたわむるとかいふ故事もあれは、かの柳のもとにて、別れまゐらせむ、とて立よりつ、いざゝらば春秋ならでもかりのたよりは、かきかはし給へや、別れはあふのはしめぞやと、いひかはして、幾度か手にぎりなどして、己れは都まで送り給はる、家人と共に、こゝより車にのりてゆく、さらばとのたまふ友どちの聲も、やうやうかすかになりて、又も見かへれば、杉の梢は遠く、柳はけぶりてたてり、そのかみ道眞の朝臣が、心づくしのはてに、行かせ給ふとき、君がすむ、宿の梢を、はるはると、かくるゝまでに、かへりみしはやと、よませしを今日はいとゞ身にしみて、おぼゆ、はやましけ山みとりこちたく夏めきたる中を行くにも、郭公なきつときかは、いかばかり、こひしかるべき故さとの山、と口づさみて、停車場へ車いそがてぞ行く。

地

安藝吳市二川町二百八番西村方　和住千鶴子

かねて、もの學びせんため、かしまだちすべきよしとなりぬ、たらちねの、ねもごろに、さとし給へるみことばを千代までも忘れじと心にちかひて臥戶に入りぬ、わが家の閨の戶も、こよひのみとおもほへば、いねもやられず、すぎこし方をかにかくと思ひ煩ふひまに夜もあけにけり、希望ある身は勇ましく立出づるに、空は朧ばかりの雲もなく、木々の木の芽も春深き山々の景色かすみだに

けさは、かゝらで、わざやかに見渡されたり、わがゆくてをほぎてやと、いとうれし、たのしきあさげのまとゐも、けさのみは何となうらかなしうおぼえけり、出立も程近うなりぬ、行末の事ども語らふうちに、はや十時となりぬ、さらばとて住みなれし古里も今を名殘と立出でゝ、父君、母君、幼けなき弟、いとこなるしん子まで小舟にて送りぬ、うれしくも又かなし、船は汽笛をならしぬ、しばしながらも名殘と思へば、人こそ知らね涙に袖をぬらしける、送りませし舟も小さくなりぬ、船も陸地をはなれぬ、云はまほしき事も今はいはれず、いとゞ涙のせきかねて浦戸の湊を出づるまで、はた、その濱邊の見えわかぬまで涙の雨は晴れざりき、名にしおふ月の名所ときこえつる桂濱、えならぬ眺めもこの折一しは哀れまさすのみなりけり、白き眞砂の上に生ふる綠の松影おさなき頃の忍ばれて、いとなつかしうおぼえし、古しへ大湊と云ひけん所にきたりぬ、見渡すこなたは土佐、伊豫の山々綠色こくそびえたり、磯邊は白波うちよせて、枝毎に鶴ぞ飛びかふと貫之うしのいひし宇多の松原も、いつしか過ぎて室戸岬てふ名だゝる波荒きはとりにきにける、見渡すかなたは果しも知らぬ渡津海のたゞみ空とつゞけるがごとし、そが中を眞帆はらみし落葉の如き小舟の二つ三つこなたをさして漕ぎ來れり、いかにと見ればこれなん、珊瑚をあさる舟なりとか、われらが乘れるこの大船だに堪えがたきを、かゝる舟にて大海を渡る心のをゝしさよ、いでや吾等も、かく廣き大きやかなる心もて、いそしみたらんにはなし能はざることあらん、これよりのちは、勉めはげみてわが父母のこの海のごと深き惠みに報なん。

人

東京神田區駿河臺南甲賀町八番地　金原玉城子

世の中は、いづこかさしてといひけむやうに、ゆきとまる所を、宿とせんは、さることなれど、とし久しく住なれし、ふる郷は遠津祖の、しをかれし、家の傳はり物もあるを、こたひまめなる人の思ひ立にて、かゝるためしもなき、大御代に生れ逢て、いたづらにみやまのおくに、くち果むやはかつは世のため人の爲なる道のひとつも、ひらきてましと、東の都にと心ざす、いざもろともにとそゝのかされて、その出立の、いそぎなどするを聞つけたるにやあらん、ちかき里人どものあまたつどひきて、わかれがたくかなしむ、されど命だ

にあらば、年々にきて相見んことかたきにあらず汽車と舟に千里も比隣とひとしく、ゆきゝすなる世なりとなぐさめつ、わすとての夜は、日頃むつまじかりつるひと〲に、酒などいだして、もてなしくみかはしつゝも、別れむことのみ、ゑひなきして、くりかへすほどによも明方になれば

　わかるとも古郷人をわすれめや
　　天の中かはすまむかぎりは

汽車の笛もしば〱きこゆるに、今はとてをしむひと〲を捨てゝ、のりおくれじといそぎて、こゝろつよくも出たつになむ。

以下原稿到着順

長野　松澤まつ子

年頃東の都へうち上り、物學びせまりしうて、たらちねの君に、こひまつりしに、此月ばかり、許るし給へしかばいと嬉しうて、何くれと用意も、とゝのひつ、人に送られ今や、故郷の地を立ち出でなんとして、あやしや、何にひかるゝ我袖ならん、花ちる野邊にたゝずみて、思にしづみぬ、げになつかしき此景色、今日よりは見る事能はざるか、妾は友に別れ只ひとり、遠く〱行かんとするを、あな悲しからじやは、折しもあれ耳おどろかす、きゞすの聲に、あはれ思ひぞ出づる親の恩、よべしも我子の門出の祝ひにとて、いとにぎはしく、開かせ給ひしむしろにて、ねもごろにさとし給へしみ言葉は、彼の三遷の教にもまして、いといと忝くこそおもほゆれ、されば妾も、雪に螢にいそしみつ、一日も早う業卒へて、なつかしき母君のみもとに立ち歸り、學びのやにて學ひつる家政の道を、實地にほどこし、雖に言はすらん(ホーム)の團欒を、まのあたりつゞけむなり、思へば〱おのづと心も勇むめり、さらば山よ河よ暫し別れん、ふり返り〱し時、我里は霞のとばりにとざゝれつ、一聲高くなき渡る雁も、都の空を志すにや。

長崎　八尾いへ子

錦を着ずは歸らじと初學の窓に歌ひて言の葉の今日は我身の上となりて、文の林の奥深うわけ入らばやと東の都にまうのぼるべうなりぬるぞ嬉しき。げにこゝたの年月はゝその木の下陰に生立て雪の朝も霜の夜も暖かき思の露をかふむり、吳竹のよのうきふしも知らざれば、今日より旅のつらさを重ぬる事の心細さを思ひやりては、勇む心もたゆむぞわりなき。今日はゝからやからは更なり、なつかしき友垣の我門出を祝ひ給ふも嬉しく、母刀自の一日も早く業なりて、玉の浦曲の玉の光りも、そはるべく、かへす〱もよき友撰ひて、世の浮たる樂にならはず、ゆめ女の道なふみ違へそと、深き御心つかひて今更なから忝けなさに、答へ奉る言の葉も只涙計りになん。時來ぬとて住馴れし家を見かへりつゝ停車場に至れば、名殘は未だ盡ざるに、早くも笛の音に車はゆるき初めぬ、恙なおはせそとよはせ給ふ人々の、戀しき影もやさしき聲も遠さかり、なつかしき山の姿は見はずなりぬ、あなしたはしき故郷の空、こよひよりは夢路にのみや戀わたらん。やがて光る玉を袂に包み、榮あるほまれを身に負て、またせ給ふ親の御もとに立歸りなば、今日の別の悲みはうれしき逢ふせの種とおもひかへして、旅の日記とうてゝものしぬ。

長崎　高田杉子

學の業終へてふるさとに錦かざらんとは、今も昔も笈を負うて旅立人の心なりけり。花もちり、春も深うなりて、八重の霞は野、にきぬきせたらんごとき、けしきのどけき此頃、われも笈を負う

て東の都にのぼらんと、船の便をまちゐて、けふなんとゝつなとく事とはなりぬ。あはれ都にゆかんといさみつれど今となれば心くじけてかにかくと物思ふも初旅なればなるべし、きのふ學の舍にむつびし友の來給ひて、春は花、秋は紅葉にあくがれて、蛾眉山あるは瑁杵山の野へを徜徉し、夏は螢追ひて、此虫の光に文よみし人のふる事したひ、冬は雪の景色をながめて心はかくも消かれと思ひ、ゐろりべにつどひては、夜更くるもしらで、樂しみし事とも語りいで給ひて、遠く秋をわかつとも、友だちのかたらひわすれず、雁のたよりにも、折々は文おこせとわかれの言葉きゝつる折は、うれしくまたかなしくて、故鄕さりがたくそ思ひし。さあれ一度かうと思ひ定めては、たゆむべくもあらず、なみなのなすべき業を學び得てあはれ賢女とあふがれ、世の女子たちをも敎へ導きて、國恩の爲が一もむくい奉らでやは、ことに我大君の大ましまず宮所にあれば、しだしく御もとに仕ゐ奉ると仝じ事なれば、ゆめゆめおこたらず學の業とくをへて、父母の御心やすめ奉るべし、又女子ながらも一度都に行くの便りをゐつれば、名所をたづれ、古跡を探り、おぼつかなき心のまどひをとかば百度きくに勝りて、こよなき學びならんなど、くさぐさ思ひ浮べて、船にのる。ほどもあらせず、港を後にみて稻佐、女神わたりを過ぐる頃は、わが心の裡は筆にも盡しがたくや。さて高島、端島になびく霞をぬひて、船のすゝむまゝに、はや東の都に近づきたらん心地して、ふるさとの方のみ戀しかりければ、

かりかれのおとつれのみそたのみなる
ふる里人にわかれゆく身は

伊豫　すみれ子

天さかるひなにのみおい立ちし身のこたびの初旅よ、行くさきは都なればいと嬉しきに、まいて妾三つの歲別れにし叔父君おば君のおはせば、とく逢はまほしくて、いよゝ今日出立つことゝ決しぬ。

さはいへ日頃住みなれにし此家、いつくしみ深き母君、さてはやさしき姉きみと、別れて遠き旅路に出でにし後はいかに心細かるらんなどゝ、今さら何となく悲しうにも思はれつゝ、おのが部屋に入りて支度など調ふる折しも、母君の來たまひて、我家のことは心にかけそ、さて學びの道にいそしみはげむ傍ら身を大切にせよ、折々は寫眞にもして送り給へ、などゝ何くれとみ心こめての玉ふ御聲、けふは殊さらに身にしむ心地せられてなん。やがて我乘船すべき肱川丸は着したりと婢のづげ歸ればいざ〱と兄君にせき立てられて諸ともに惜しき別れを告げて、浜べには來りつ、さて棧橋つたひに端船にのり込みぬ、さて兄君と共に甲板に立ちあがりて眺むれば、我家のさき、門べに見送り玉ふ母君姉君のみ姿、いとなつかしくて、別るゝは惜しけれど、さらばよと頭を下げぬ、折しも汽笛一聲と共に船はすゝみ初め次第に遠ざかりて、遂に見ゐずなりはてしこそうらしめけれ、今はとて甲板をおりて　室にありしこと數時間。

翌朝三時船は早神戸港につきぬ、海上はるかに見渡せどいかで戀しき故里は見るよしもなくなりはてぬ。(某旅館にてしるす)

はなれきし身は淋しさのまさりつゝ
ながめがちなる故さとの空

東京　杉田繁子

治まれる、御代に生れあひたれば、なみなの學びも、世に廣く行はれゆきて、こよみだにしらぬといふなる、深山のさとの、女までも、物の文よまぬはなきやうになりにたり。おのれは、今、父母のもとにありて、自由なる身を以て、かゝる草のやに、むなしく時を過さんは、いとくちをしきかぎりなれば、いかにもして、一

度都にのぼりて、學びの道を修めんものと、折にふれて、母にれぎ申たりければ、父のゆるしをも得てければ、幸ひ都なる叔父の許に行き、三年の間修業することに定まりぬ」實にゆめみる心地して、よろこびたり」されど長き年月はごくまれ　、たらちねのもとをはなれて、住なれし地をわかれゆくは、心もとなきわざなれど、家の事は心にかけず、ひたすらに、學ごとをはげまんと、思ひ立、旅のまうけなどするほどに、いよ〳〵出立の日になりにたり。朝より門出の祝とて、しるべの人あまたよりつどひ、酒などくみかはしよろこびあふほどに、滊車の時刻もあることゝていそぎ出立て道のほとりの小高き岡などを過ゆくに、をさなきよりの遊び處にて、折柄千草の花咲にほびにもいはれず美しけれどわかれし古さと人のことなど、おもひづゞけてゆく、今よりはおのれも心ひとつに勉めばげみて、三年の後、此處に春花のさかりに、にほへる頃、錦をきて立かへりなば、おやたちのよろこびたまはむは、いかにうれしからましと、大なる望をいだきて、東なる都の方に、出立になん。

東京　後藤ちか子

誰か、思を故郷の樂土によせざらん、誰か足をこの地にとゞめざらん、春は野べに霞の中に、好鳥を聞き、菅の根の長き日の暮るゝも知らで、或は摘草など餘念なく、いづれ菫、蒲英公、紫雲英、筆草、など、家づとに父母のみ心の安らはせ給ふ樂さよ、夏は磯邊に貝拾ひあるは小川の藻草に小魚すくはんと袂、濡らし、秋は野山にものゝあはれを知り遠寺の鐘、晩鳥の聲に家路を急ぐ夕まぐれ、月の影さす畦道に、虫鳴かせ、冬は、一家、埋火に、睦み話に夜をふかし、あるは遠く見渡す雪の晨、など、四時のめぐりのいとなつかしからざるはなし、まして恩愛の契り淺からぬ、父母兄弟のゐますにや。

かくて我が身は樂かりしが、げに、故郷はなれて、都に遊ぶの日となりしにぞ、ものうく思はるゝ、あたら、一生を通してあはれ深きはこの一夜、よすがら冴に渡る月影浴び、星輝りそはれ、獨、思に沈みぬ。

ひたすら、學藝に砺せよとは、憂世の荒波にみ心を懊ませられて白髮になられたる、父上のみ言葉なれや、おんみ健にせよとは、常々かよはき母上のみ言葉なれや、あゝおもひ續くれば、父母やけに仇氣なき弟妹の面影、目の前に浮び出でられてぞ、そゞろ戀しくもなつかしくも思ひ待らる　、されど、我が身はかゝるかよはき思になげられては、行く末の身を、いかで定むるよすがあるべき、あゝ我身の錦飾る日を、待ち給ふ父母のみ心を安めにべきいでや學を修め業を卒へて、樂しく安らけくこゝに逢ふ日を期せんかな。

東京　植村むめ子

東の京の妾の伯父より、近頃文してこなたにきませよ學び舍も、はらびてん天さかる鄙にのみあらんよりは、などいひおこされければ、妾はいよゝ來らん廿日を待ちて都にのぼることゝなりぬ、なべて別れとしいへば、花にわかれ、春を送るだに大方は心細う想はるゝを、まして姉ともはた妹とも睦びあびたる友と、西と東に袖ふり分るこそ言はん方なく悲しく恨めしけれ、さはあれどこたびは、いと喜びわらひて別れまゐらすべきにあれど、妾の旅立たん廿日をはやあすとぞかぞへし夕は、すゞろに涙のふり落ちて思はず袖をしぼりしも、げに人のつれなりや。思へば振分髮のまだ幼なき頃より、むつびかはし、おなじ學びの窓に伴ひ、おぼつかなくも、物のかずをしならひつる友はいとさはにはあれど、わきて、池田の君とはさきの世にいかなる契りありけん、好むところもいとおなじければ、いとうるはしうて、一

日も相見ねれば、いとなつかしう、訪ひもし、訪はれもし、櫻花さく春のあした、螢とびかふ夏の夕、あるは錦おりなす紅葉露も玉しく萩の花、明き月影妻とふ鹿の聲見きゝづゝ、うれしき思ひも、ときにかなしみ、ともによろこびて、うらなく交らせしを、思ひきや、山の井のあかでこゝに立ちわかれ、我れ一人都に上らんとは、さはさりながらたとひ幾山川をへだつとも、また逢ふをりのなからめやゝかくするうち遠山寺の鐘の音また哀れなり。人々　妾を驛路まで送られぬ、日頃は早きを望みし車のおそかれといのるもあやしや、しばし驛路に息ふほどに黒き煙を吐き、すさまじう走り來る瀛車こそうらめしけれ。あはれ無情の瀛笛は高く妾が心臟を破りぬ。

三河　石川代志子

今更におふし立て、給ひしたらち根の、雨につけ、風につけての御心配り、しかのみなしず、妾如き愚かなる者にも、人並に、成しやらばやとの、御慈くしみの御心栄ね、忝けなく、いとゞ忍ばれて、かく功の顯はれてや、普通なる學びも、卒へたれは、今度東なる都に、遊べとの御許し出で、今日しも、出立の日にてなん在りける、朝未だ來より、用意なんど、整へ置てければ、いざや御別れ告げばやと、父君の御部屋に入りぬれば、母人も居給ひて、御二方のおごそかに、古への賢き姫たちの、文草、摘合へて、學びの事、家庭の事共、細かに、悟され給ひ、汝の、故郷に、錦を飾りて歸りくべき、時をや待づと、母も傍より、ゆけ／＼、女の道忘れざる樣なしてよと、篤き情けの言の葉さらぬだに、安き心のなき物ぞ、かてゝ、加へて、幼なき妹の、何やらん遠き別れと思ひてや、我袖留めて惜む言葉の、いじらしと、やゝや、君、心や安く持ち給ひてよ、妾は都に學びの爲に行くなれば、亦近々に歸り來て、共に野山に遊ばなん、樂しき日をぞ今暫し、待たれよ、父母の御言葉をよく／＼守りて、學びの事共、怠り無く、いそしみて、世にたつ人になり給ひてよ、妾とても同じ思ひにてなんありつれば、是よく聞き分てよと、なだめ先づ方、たらち根の給ひける言の葉を、來ん年の春錦着て歸る家つとの、鑑にもせばやと小册なる栞に綴りて、わかれつけてぞ立出ぬ。

三河　石川滿壽子

妾こたび、ゆるりなくもさる方へ、嫁ぐべき身とはなりぬ。豫てより、覺悟はせし物の、いよ／＼今日となりては、今更の如く覺ねて、越し方行末の事共、一時に胸に浮み出てゝは、中／＼に人々の、千代を八千代もと、壽ぎ給ふるに、などてか、吾ながらいぶかしきまで、怪しき露に、袖をしぼりぬ。やがて支度も調ひしかば、吾とわが心を勵まし、筆とりて斯くなん

たち根の惠みの露のあまれきて
　　けふ生ひ出づる庭の若くさ

父母を始め一同に、別れの盃取かはすに、父上の威儀を正して汝此度いみじき赤繩によりて、他家へ嫁ぐ事、誠に幾久しふ芽目度事にぞ有、今さらいふ迄も無き事ながら、貞女二夫に見ねずとか与々此理を心得て、夫に操を盡すべし、亦舅姑を生みの親と思ひて、孝養を怠るなと戒め給ふ、母君も傍より、常にいひ聞かせ置し事共、固く守りて、ゆめ／＼ゆるかせになし給ひそ、暫し相見る事はかなはれど、隨分身を愛してよと、さすが女氣の、今日の別れを思ひ出でゝは、口にはわざと、凛としての給へど、まなこの底には、どこやらに、悲しき色の見ねける、妾も同じ思ひに打沈めば、弟のそれと案してか、姉上萬歳といふ聲に、勵まされて今はとて立いづる門のしきゐぞ我家の見納めと、思はずかへり見れば、彼方には父母の、のび上りて送り給へるに、端なくも見合す顏とかほ、さらば然らばと云ふ内も、早や車はきしり初めぬ。

熊本　日高かす子

年頃れき聞ねつる東への物學び此度許されて、上らんとする嬉しさ袖にも包みあへすなむ。ひたふるに到りつかん先の事のみ思はれ、兎やせん角やせんと、去年上りし友にしらせ、常に怠りがちなる伯母君の許にも便なしつ、手のまひ足のふみどさへしらず、たゞ出立たん日のまたれて我ながらとゞめがたうなむ。謝度とゝのへ父母の御前に暇聞ゆれば、あやしう胸とゞろき今更にかなしきは心おくれたるか、あらじ、父君しばし己を見給ひ、言ふまでもなき事なれど、海山遠く出づるかひには、ひたすらつとめはげみて女の道を修め、男の子とひとしなみに大路せばしとありく女學生とか云ふ群にないりそ、學の業は勝れたりとて女の德の高き低きによりては、文字しらぬ賤の女にも劣るぞかし心せよとて

なには江にしけるよしあしかき分けて
まことの道をふみなまよひそ

と示し給ふいとかたじけなし、母君はさすが袖おほひ給へど猶朝夕の事何くれと心添へたまひ、暑に向へば何處もあしき病はやりなむ、水な呑みぞ心して物食へよと、幼かるやうのたまふも深きみめぐみなりかし、せきあへぬ涙にいらへも頓に出てす筆とりて、

みことはをこゝろにしめて分けいらは
文のはしもやすけからまし
はゝき木のかけはなるともあたし世の
つゆにはぬれしなてし子の花

となむ答へ奉りぬ、さきくあれどはらからにも暇を告げ、しばしは見るを得ぬ家を今はと出れば、まれの門出と、かれて知らせ置たるもさらぬも集ひて餞する人々の厚き情をうれしみ、早く歸り來ませといふ聲を跡にして熊本停車場にと向ふ、此處までも送り給へる友多く、かたみに名殘をしまれてをりをりの文の便をちぎりつゝ滊車にのる、來ん春は己も上らんをまち給へとよふ弟、遠きもちかきもしらで人形を土產にとたのむ妹、明日にも歸る心にやいといとほし、笛の音にいざさらばさらばとて、手布うちふり送るも行くもつきぬ名殘を煙にとゝめて早見ねすなりぬるぞかなしき。げに都といはず、鄙といはず、己が生れし故鄉ばかり樂しきあらじ、父母あり、兄弟あり、はた師の君、友達、幼きよりしたしみ、山も川もたちなれて床しかりしをよそに見て出立つ旅のうひ衣なれむまでの心細さ、山のはのほそくなりゆくとよまれしも今日の我身なりけり。幼きより父母のもとをしばしもはなれし事なき身の、はや千里も來し心地して、たらちね如何おはすらん一年二年は對面もかなうまじとおもふにもいとかなしく、行くを嬉しとのみ思ひ別れてふことをしらざりしぞ恨なる。されど出にし上は、死とも歸らじと男の子のうたふ唐詩は女なりとて同じきな、おくれんやはと心の駒もいさみぬれば、車もはやうおぼへていつしか門司につきぬ、行先猶遠し、業卒へて歸らん日はいつならん、そもまた遠きかな。

六月中　兼題廣告

歌

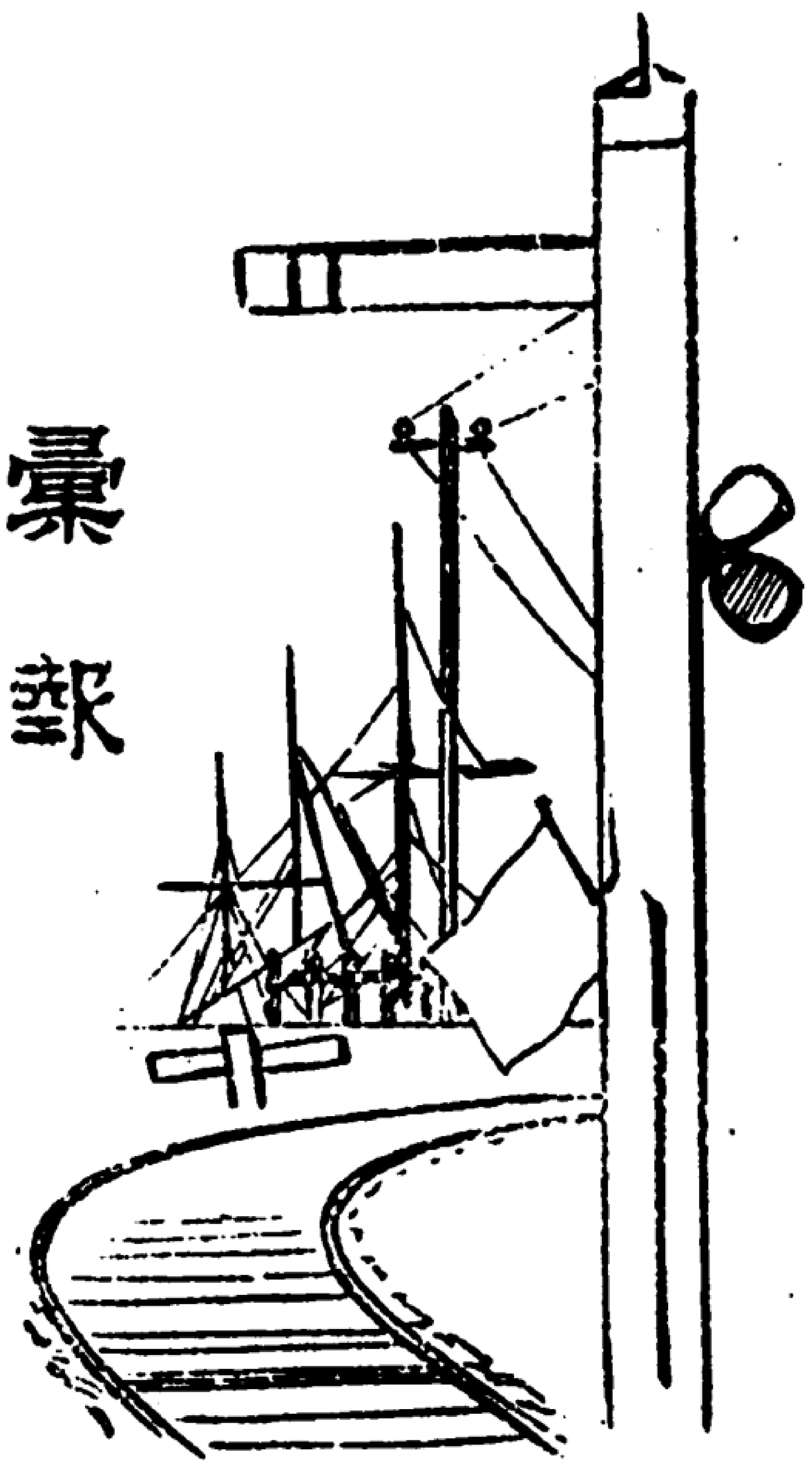
一日　雨後蟬

十五日　池蓮

文

一日　初夏野外に遊ふ

十五日　結婚を祝する文



彙部

○少女花束を上る

皇后陛下には去月廿六日春雨の降しきる中をも厭はせられず博覽會に行啓參考館に入御あらせられたるが同館出品の外人は之を以て非常の榮譽とし神戸グロッセル商會大阪支店長ハッシエー氏の令孃イルゼーとて本年五歳の少女の手より花束を捧呈せしむる筈なりしにぞ少女は陛下の入御に先ち水色の衣服を纏ひ白靴に水色のリボン…結びたるを穿ち同じ色のリボンを金色の髪に結びたる愛らしき姿にて母親ミセス、ハッシエーに携さへられ青々せるフエルンに蘭、秋海棠其他の香氣高き草花を取り添へたるを一束としレースもて束ねたる見事なる花束を双手に抱え　陛下の入御を御待ち申し居りしに　陛下には香川太夫の御先導にて數多の女官を従へさせられ入御相成りしに少女は孰れを　陛下と見分け兼ねたる有樣にて暫し躊躇ひながら却て御附の女官に捧げんとしたるを香川太夫が見て斯くと　陛下に言上せしに　陛下には玉歩を駐させられ打笑ませ給ひつゝ少女の手より花束を御受納あらせられ最と御滿足の御樣子に拜し奉しが軈て女官に向はせられ名は何、年齢は幾つなど御下問あり此時少女は高貴の御前にて女官に髪を撫られ年齢など問れ耻ひて頓には答へ得せずウジ〳〵しながら母親を見返る樣のいぢらしきを陛下も愛らしと御覽じて始終打笑ませ給ひつゝ注

視有難て御受納ありし花束を女官に取せ給ひ奉迎せる外國婦人に御會釋あり列品を御覧じて還啓あらせられしが其折にも少女がグロッセル商會前に商會主及五六の婦人と共に整列して奉送しまゐらせ居たるを御覧せられ臨時立止らせ給ひ畏くも打笑ませ給ひつゝ「さよなら」と御暇乞の御言葉あり御先導の女官も少女の頭を撫でつゝ「さよなら」と言葉をかけしに少女は畏こみつゝ花の如き目にて　陛下を見上げ奉りたるなか〳〵に繪の如き風情なりきとぞ此少女は神戸に生れたる獨逸人なれば日本語と獨逸語には通ずれど英語を解し得ざれば過日來英語にて　陛下萬歳の言葉を敎へ首尾能く其役目を濟したる上は御褒美としてメリーゴーラウントの木馬に乘する約束にて俄かに勉強したることゝて女官より英語にて名を問はれイルゼーとは答へたれど年は幾つとの間は通せざりしにや愛らしき眼を見張りて茫然たる樣一入可憐なりしといふ

○養蠶事業御奬勵　皇后陛下が去る二十八日午前博覽會農業館巡覽の際京都蠶業講習所の陳列區において各出品を最と綿密に御熱覽あり種々御下問ありし由なるが陛下には日頃より最も養蠶の事業に對し御熱心に渡らせられ斯業奬勵の思召を以て宮中におかせられて曾て蠶兒を飼育されし古例もあるとて同日の御巡覽に際しても各府縣繭生糸等の出品には特に御趣味を感ぜさせられ供奉のものに屢々御下問あらせられしよしなるが前記出品中において蠶兒が繭を造營し或は蠶蛆の經過を示せるもの及び害虫害菌の桑葉を侵蝕する實況を示せるもの等は何れもその傍に少時づゝ御佇立遊ばされ御熱心にその有樣を御覽あらせられまた種々試驗を施せる蠶糸の出品は互に比較御熱覽あら

せられし上細密なる御尋ねもありしやにて供奉の人々は陛下が養蠶事業に熱心にしてその御素養深きに感じ親しく斯業奬勵の有難き思召を蒙り伺れも感泣したりとぞ

○癸卯園遊會　華族女學校卒業生にして今は立派なる人の妻となり而も極めて平民化せる人々が其師下田歌子の設立せる帝國婦人協會附屬女學校の資金を補助せんが爲に發起せる癸卯園遊會は去月廿五、廿六の兩日午後一時より築地の水交社に開かれたり廿五日は曇りて風强かりしかども新に來朝されたる獨逸皇族、獨逸公使、暹羅公使、近衛公、三條公、黑田侯を始め朝野の紳士淑女等二千人に近き來會者あり園内には煎茶、紅茶、抹茶ラムネの席を設け發起人の貴婦人達盛裝して接待の任に當り來會者を遇する至らざる所なし一時三十分演奏場開かるゝや海軍の將校は發起者を助けて斡旋最も努めたり海軍々樂隊の奏樂を第一として櫻初子の謠曲『蘆刈』あり宛轉たる嬌喉は田中のぶ子の小鼓と共に先づ滿場の喝采を博したり次は千住ちか子、山尾かめ子のピアノ連彈にして夕ンクレット歌劇の大序ベステル、ワルツを奏し曲意を十二分に彈出せり次は高崎恒子の『橘妙媛父を追ふ所』の活人畫にして書割の巧妙なる能く紅裝の少婦を畫化せしめ毫末の遺憾あらず次は朝吹英二の娘磯子の『淸少納言捲簾の所』にして華族女學校所藏の參考品を着用し巧みに藤原氏の隆盛時代を描出せり次は下田歌子作歌の『千壽』を伊集院繁子、大内田芳子生田流の琴にて合奏し横濱の菅川英子節に合せて舞ひたるが舞の手振の優美なる千壽が重衡を慕ふの情溢るゝ計りなりし次は『松下禪尼破障子を繕ふ』活人畫にて有馬いよ子禪尼に扮し島田絲子城介義景に扮し、鎌倉時代宛然た

り次は嘉納すま子外一名の『楠公婦人子を諫むる所』の活人畫にて全體の配合頗る佳し次は勘解由小路福子(子爵令孃)の謠曲小袖曾我にして同やす子之が仕舞を爲せり次は柳谷末子の活人畫『奥村助右衛門の妻城中見廻りの所』にして澄み渡る月の下に三層五層の城樓見え右手に薙刀を提げて雄々しく



立ちたる姿勢は水の滴る許りなりし次は島田いと子、中隈ふじ子、川田みか子の山田流の琴『都の春』の合奏にて聲の美はしさと彈奏の巧みなるとは滿堂をして水を打ちたる如くならしめたり次は柳瀨光子の『活人畫秋色女櫻を詠ずる所』にして德川時代の面影巧みに描き出されたり此外に下田歌子作

歌の『諸葛孔明』を在學中の女學生が聲優さしく唱へて十四人の女學生が後庭にて舞へるあり全く演奏を終りたるは四時半頃なりし、二十六日も午後一時三十分に演奏場を開き櫻初子の謠曲、中隈富士子、島田絲子の山田流の琴『臼の聲』、伊集院繁子の活人畫『大葉古新羅國の陣頭に立ちて辭世を朗吟しつゝ領巾振る所』、大河内くに子（赤染右衛門に扮す）大内田よし子（大江匡衡に扮す）の活人畫『赤染右衛門夫の文章に助言する所』、千住ちか子、山尾かめ子のピアノ連彈（前日に同じ）、石幡とみ子（尼將軍に扮す）和田せつ子（北條時政に扮す）の活人畫『尼將軍簾中に訴訟を聽く所』、由利絲子（伊賀局に扮す）外四五名の『伊賀局松の木を折りて橋とする所』、前日の千壽、櫻初子（一豐の妻に扮す）永井貞子（一豐に扮すの）活人畫『山内一豐の妻夫に金を參らする所』長田仲子（春日局）外二名の活人畫『春日局竹千代君を輔導する所』勘解由小路福子の謠曲『羽衣』、前日の孔明あり、空模樣は曇天にて折々小雨さへ降りしかど二千余人の來會者ありて中々の盛會なりき、遂に何等の障害もなく物の美事に遣り果せたは姫御前達近來の大出來と云ふ可し

●赤堀峰翁米壽の賀筵　　去る明治十八年皇后陛下東京師範學校へ行啓在らせられし折柄始めて御獻立を調理したる以來今年八十八の高齡に至るまで婦人界の料理教授を擔當しつゝある日本橋平松町九番地赤堀峰翁の米壽賀筵は日も其齡に因みて八十八夜に相當する去る三日と云ふに濱町二丁目の日本橋倶樂部に於て催されたりき當日は女子大學、女子美術學校及び翁の設立せる日本橋淺草各教場の女生徒其他治庖會員等數百名出席し樓上の

▲式場　　には寄贈和歌の色紙短冊を糸もて壁に

懸け連ね床の間には熊谷直彥翁の壽ける双松の大幅を揭げたり斯くて午前十一時頃に至り發起人戸川殘花氏の同會にて畫報會幹事安西卯太郎氏開會の趣旨を述べ次に女子大學校長成瀨仁藏氏來賓總代として祝辭を述べ夫より二三の演説を終りたる後翁は一應の挨拶に及びたるが其▲扮裝は頭に緋縮緬の大黑頭巾を戴き同じ緋縮緬の襦袢白斜子の胴着二重、上着は黑斜子の紋服、其上に縮緬繼合せの綿入羽織を着流し脊中には金紗もて大きく壽の、字、又裾には同じく龜を刺繡せり此縮緬は翁が維新以前京都にて八十以上の高貴の方々より貰集めしものなるが刺繡の部分は八十歲の折女子職業學校生徒より贈りたるなりと云ふ▲餘興は筑前琵琶、臺灣踊、住吉踊等の外庭前には女子美術學校生徒の料理と菓子　日本橋敎場の料理、淺草支部の壽司等の接待所を設け尚ほ池の坊の挿花陳列、澤山寬僊、成宮東湖など云ふ畫家の席上揮毫等ありて頗る盛會なりしが當日寄贈の玉什の中に左の久々の和歌も見えけり

赤堀老人の八十八を賀して

福羽美靜

めでたくもけふ祝ふかな萬代の
龜の齡をわがものにして

同　小杉榲村

椿さくやつ世をこえて百重やま
かくてものぼる君の齡や

同　三輪田眞佐子

萬代は龜のかはらのうらかたに
うらわはせても見え渡るかな

○貞婦松永タキ　眞や歲寒ふして松柏の操を知るといひけん今其松に緣ある松永タキとなん呼べる貞婦あり此貞婦の身の上を聞が儘書き記さんに

雜報

タキは芝區西の久保廣町十一番地に住める新潟縣平民松永瀧藏(四十一)の妻にして夫婦の間には長男庄次郎(十一)長女リウ(九)次女トヨ(七)といへる三人の子供あり瀧藏は嘗つて人力車夫を業とし實直に稼ぎ居りしかば多少の貯金も出來二三輛の人力車をも造り之れを他人に貸附け和蘭公使館其他好き得意先を持ちて何不自由なく暮し居りしが今を距る四年前の事とか或日和蘭公使館の旗綱が途中より切れたるを以つて瀧藏は旗棹に攀ぢ登り之れを繼がんとせし際過つて二丈餘の處より墜落し腰の骨を挫き慈惠病院に入院し治療を受けたるも



兎角思はしからざるより退院し自宅にて治療する事となせしが家計は之れが爲め日々に乏しくなり行き、人力車は素より家財道具衣類迄も悉く賣却なし一家の糊口すら困難なる場合とはなりしかど女房タキは必死となりて手内職に努め夜の目も碌々合せず自らは三度の食を二度に減じて夫の看護と三人の幼兒の養育を怠らず屢々自ら人力車に夫を乘せて之れを輓き接骨醫の許に至り施療を乞ふ事もあり爲めに警官に怪まれて取調を受けしことも少からず夜は病夫を隣家の者に托して次女を伴ひて各所の緣日に出で繪草紙茹豆抔を賣り些細ながら

利を得ては只管ら夫の全快を祈り居る内其誠意や神に通じけん近頃に至り瀧藏は漸く其腰立ちて坐る事の出來るやうになりしかばタキは大に喜び夫を勵まして下駄の歯入れを覺えさせ氣に任せて仕事をさせる事とし自らは晝丈け芝區二葉町の煙草店水戸屋事關久四郎方へ莨の賃卷に通ひ夜は緣日に出で其間には他人の爲めに使走りを爲し居れるを見て誰一人其行ひを賞めぬ者もなき程なりき或時夫瀧藏は愛知縣羽栗郡淺井村に淺井萬兵衛とて名高き接骨醫ある由を人の噂に聞込み是非其治療を受けたしと朝に夕に口癖の如く言出すよりタキは如何にもして其望を達せしめんと夫よりは一層仕事に身を入れ人力車一臺を買入れて夫を其車に乘せ自ら輓行かんとの決心を起せしこそ健氣なれ茲に又一昨年二月より長男の庄次郎は同區明舟町三番地の飴兼方に奉公し居れるが主人より小遣又は褒美として貰ひ受けたるものは五厘一錢なりとも決して無駄に消費する事無く宿下り若しくは主家の閑ある毎に家に歸り病父の好む物を買ひては之れを進め共に喜ぶといふ孝心を雇主の飴兼も大に感じ今回尾張に療治の爲め瀧藏夫婦の出發すると聞きて金三圓餘を惠み其他にも志ある人々の餞別として金品を贈るものもあるより瀧藏夫婦は愈々跡の始末を付け目下出發の準備中なるが所轄警察署區役所にても此次第を知りて目下種々協議する所あり追つては授賞の沙汰もあるべしとなり世の人の妻たるもの丶鑑とやいはまし

◯今治婦人會慈善市　愛媛縣下今治婦人會は昨春岡山孤兒院のため慈善音樂會を開き二百七十餘金を寄贈せしに今亦た東北飢饉の慘狀を座視するに忍びずとて去二十六日午前九時より今治吹揚公園内に慈善市を催せり吹揚神社左側一面に幕を引

廻らして會塲とし入口には東北飢饉地の寫眞畫を二面の額として揚げ大國旗を交叉し珠燈數百を山形に吊し其下には會劵交附處を設けあり内に入れば會劵受取所ありて男子は左側の接待席、女子は賣店側の幔幕内へ案内し茶菓劵引替へに菓子及び海南新聞社今治支局編纂の東北飢饉の慘狀並享保年間今治地方飢饉の狀況なる二枚の印刷物を呈し能舞臺には絶へず音樂、青年の和琴、劍舞、小供手踊等あり而して能舞臺右側には婦人會製作の寫眞掛、毛糸細工、涎かけ、裁縫箱、羽織紐、等數百品を陳列し他の小間物店煙草店には會員及商店の寄贈品を陳列し、菓子店には長谷部夫人自製の寄贈菓子、廣島佐藤のぶ子寄贈の夏橙等を陳列し、扇子店には扇子、短冊等を賣りて書畫席の鱸松堂、村尾鼎堂、山本王仙女史は無料揮毫をなしたり各賣店共會員六七名宛しきりに參會者に愛嬌よく購買を勸めたれば午後三時頃には大半品切となり各賣店中會員製作品、扇子、菓子は全く賣切れとなりし位にて來會者は會員の熱心に感じ頻りに買求めければ意外にも賣上金百四五十圓に上りたり、又寄附申込も八十餘圓ありて總收入約三百六十圓餘あり尚當日熱心に斡旋の勞を取りしは商工會の檜垣大三郎、柳瀨春次郎、八木春樹、富田元資、矢野萬助、橋田虎之助、吉田直一、山田源七、木村勝三　渡邊廣太氏等及有志にては長尾忠雄、山本太三郎、山本美翠、嶋谷一郎、秋元元輔の諸氏にして婦人には小松崎會長、越智、市村、松平、長谷部、檜垣、長尾、益田、武智クミ、阿部、八木の諸夫人あり賣店にては保持ヨシ子外五十四名、通劵係寄附、接待、餘興等には會員八十二名詰切りて熱心に奔走したるは來會者の感を惹きたりといふ。

○孝女　雪降る朝に榾拾ひ行くも人の子なり霜寒き夜に母の手曳して稼業を助くるも人の子なり金殿玉樓に嬢樣と生れて大勢の奉公人に侍かれ無理も道理も言ふが儘にして思ふて成らぬ事無きも人の子なり何れは運命の成す業あれや神奈川縣下三浦郡田越村三百十二番地に住む村石ふじの娘かね(十八)といふは天性温和なるのみならず親を大切にする事は眞似も出來ぬ程にて母親ふじは按摩業をなし是迄水入らずに暮し居れるが去る二十七年中即ちかねが八九歳の頃父親原幸德は三人暮にして横濱初音町に家を構へ甚麼やら恁うやら暮し居たるも家計上の都合か或は他に已むなき事情のありしものか夫婦相談の上一先づ離別する事となりかねは母親ふじが引取りて養育なし良人の家名なる原の姓を名乘らせる事と相談極りてふじはかねを連れ同年中三浦郡葉山村字堀の內へ赴き按摩業をなして其日の家計を立て居たるが何分ふじが目盲の事とて手曳きが無くては歩行し難き故かねは子供ながらも其手曳となりて霜降る朝も風吹く夜半もぼろ〳〵の着物を身に纏ひて母の稼業の手助けをなし母が客先きにて仕事する折は往來に立ちて待つ事もありまた臺所の隅に小さくなりて温和しく控へ居る事もあり遊び度がる年頃なるに村の子供とは一向に遊ばずまた遊ぶべき際もなければ唯だ稼業大切と母を助け痛はりながら得意を廻るを見て感ぜぬ者は無かりしとか斯くて三十一年に至り稼業上の都合より田越村の逗子へ來り中西雄次郎方の物置を借りて尙も手曳をなし居る內女のたしなみなればとて中西方にて裁縫を習ひしも元より無報酬に習ふと言ふは心苦しくさりとて餘計な金のある筈なければ其報酬として同家の小間使をなし夜は母を介抱しながら得意先きをば廻り居

りて十年一日の如く孝を盡し早や十八の年頃といふに白粉紅は思ひも寄ず身を飾心は少しも無く忠實しく立働き居る由世に斯る孝女あることそ嬉けれ

○千島同情婦人會發表

去七日午後三時より赤阪靈南坂齋藤海軍少將邸に於て同夫人及び高木醫學博士夫人、寺垣海軍大佐夫人等數名幹事會を開き發企人にて各方面を分擔して勸誘狀を發する事と定め即時數百通を諸方に配布せり尚は同會は徒に其聲を大にせず廣く熱心誠實の人々と共に永く子孫にまで其事業を傳へんとするにわり既に過日其發起人會わりとの報を聞き發表以前に入會を申込みたるものも少からざる由一昨日幹事會の席上自ら千島に赴きて同島の婦人を慰問したしと語れる夫人もありたるが兎に角先づ慰問狀を發することゝし今九日上野より青森を經て函館に向ひ千島初航便の葛城艦に便乘する報效義會員吉田正平氏に其狀を託したり尚同會は四谷區愛住町愛住學校に事務所を置くといふ



○海員救濟會とマクリーン孃

嚢に我國に來りて布教に從事し歸國の後我が海員の英國に到るものを各所に案内し或は之に物品を寄贈し誘掖懇切到らざるところなく遂に自ら其居を日本船定

繫場附近の地に移すに至り汎く我海員の慈母として世に知られ殊に先頃叙勲の御沙汰までありたる英國人エム、マクリーン孃に對して我海員の養成保護を以て其任とせる日本海員掖濟會は其保護の下に在る帝國海員に孃が厚く慰安を與へ其品位を保たしめたるの功を表彰する爲め總裁殿下の旨を奉じ赤松同會長より左の謝狀を添へ有功彰を贈り

貴孃夙に博愛慈惠の志篤く我帝國艦船の海員にして英國に到るもの貴孃の恩惠に浴せざるもの稀なり殊に本會保護の下に在る商船海員に對しては愛撫訓誘至らざる所なく爲めに其風儀を矯正し品性を保持するの功寔とに顯著なりとす依て茲に總裁威仁親王殿下の令旨を奉じ本會所定の有功彰を贈進し以て其美德を表彰す

明治三十六年四月三十日

日本海員掖濟會長

海軍中將正三位勳一等男爵　赤松則良

エム、マクリーン孃貴下

○日本學生の母　獨逸伯林にも學生の母として日本遊學生に尊敬せられつゝあるラーグルストレートといへる婦人あり同女は同府パッサウエル街三十一番地に住し本年八十歲の高齡に達したるが其日本學生を愛する事マックリーン孃の日本水兵に於るそれよりも甚だしく千八百六十八年以來此に三十六年の長年月を獨逸遊學の我國人の爲に盡し同婦人の住宅には年中我國人の寓居する者あり其親切なる世話周到なる注意は親身の母も及ばぬ程にて一度老婦人の好意を受けし者は何人も其慈愛を感せざる者なき程なるが同婦人は來る六月十日が第八十回の誕辰に當るを以て從來直接間接に同人の好意を受けたる在獨逸の日本人相會して盛んなる祝意を表せん計畫中の由なるが同婦人は至つて壯健にして居措活潑壯者に讓らず今に至りても猶日本人を世話する事を唯一の樂しみとし熱心に諸般の斡旋をなし居れりといふ

投稿心得

○彙題歌文は女子は何人にても隨意投稿することを得

○投稿用紙は半紙(歌は半截文は全紙二つ折)の事

○歌は題毎に用紙を別にし、一題には、一人一首若しくは二首を限りとす。上句の中に、二音の漢字を一字入れ、其の他は、悉く、平假名若しくは、一音の漢字にて認むべし。

○文は、毎行十五字詰とし、且、句讀點を施すべし。

○右歌文とも、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して、分明に認め、住所氏名は、題目の下に明記すべし。

○投稿宛名は、國光社女鑑編輯局とすべし。

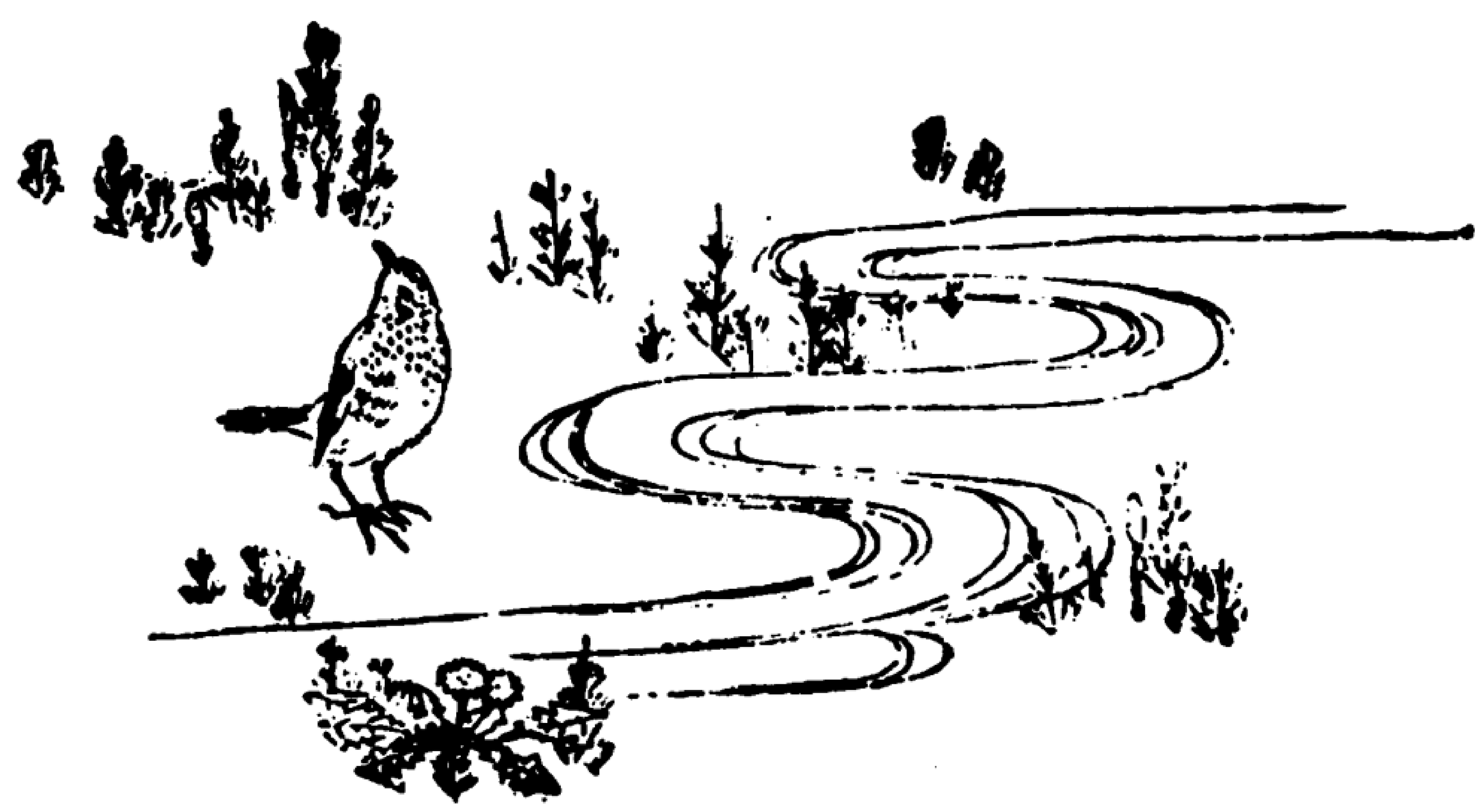
○總て書式に、違ひたるもの、及び、期日に後るゝものは決して採らず。

○投稿〆切期限は總て發兌日の十日前則一日分は前月の二十日十五日分は其月五日とす。依りて其期間内に到着すべき日取りの順序を數へて寄稿せらるべし。

○當撰者には文は壹圓(天)五十錢(地)三拾錢(人)歌は各其半數の計算を以て孰れも代價相當の書籍を呈す

明治三十六年五月

女鑑編輯局



御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

著者	書名	定價
工藤武重著	第三版 孝明天皇御遺德	定價貳拾五錢 郵税四錢
文學博士 栗田寛著	天朝正學	定價參拾五錢 郵郵金四錢
杉谷正隆編	家庭訓歌 修身百首	定價貳拾錢 郵税四錢
國光社編纂	抄譯獨逸讀本	定價貳拾錢 郵税四錢
國光社編纂	日本教育	定價郵税共 金貳拾五錢
宮内默藏著	王學指掌	定價壹圓 郵税拾錢
ラウレー原著 寺内淳二郎譯	再版 奢侈亡國論	定價郵税共 金二十二錢
甲紫州編	再版 德川の孔明	定價郵税共 金十五錢

東京 株式會社 國光社 發行

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

衛生無毒 クイーン白粉

皮膚艶美 クイーン水



發賣本舗 花陽堂

東京市日本橋區新和泉町

女鑑

明治三十六年五月十五日發行

每月二回一日十五日發行
第拾參年第拾號

明治廿五年三月二十日
第三種郵便物認可